



0049329-000

特201-572

国文の新解法

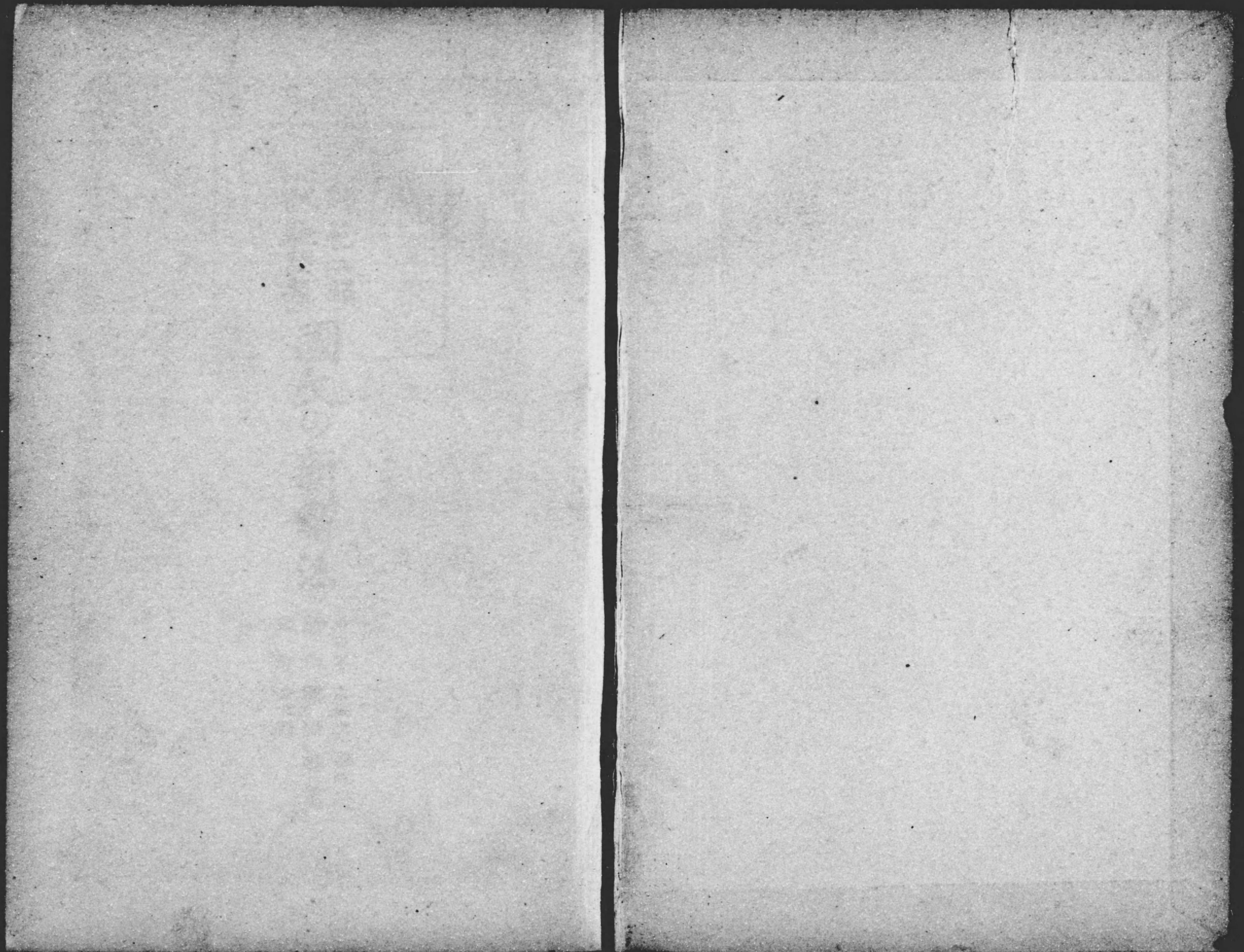
高等普通教育研究会・編著

成業堂

昭和3

AHJ







特 201  
572



國文の新解法

近古文 近世文 現代文  
詩歌 熟語 書  
文法 作文類





## 本書の讀者へ

師範二部の入學試験に於て「語科が重ぜられてゐることは事實であるに係らず、案外その成績はよくないのであります。又一通りは出来てゐても、「これは申分ない」と思ふやうな答案は極めて稀であります。この缺陷はどこから來てゐるかと思つて見ると、

一、二部の入學試験問題には何から出るか。

その見當がつかないので、準備がさつぱり出来ないこと。

二、問題の出し方が多方面である。

それでどんな風に答案を書いたらよいか分らぬこと。

三、一般に「解釋」とはどうすることか。

その意義とその呼吸とを呑み込んでゐないこと。

大體この三點に歸着するやうに思はれます。此の書にはそこを明かにしようと努力しましたから二部受験の方々には便利でもあり、またきつとお役にも立つことと信じて、自ら悦びを禁ずることが出来ません。



所で昭和三年度の全国二部入試問題を根據とし、過去數年間の問題をも參考して仔細に研究して見ますと、

### 一、問題は何かから出るか。

其の見當がつくのであります。それによると中古文即ち平安朝の作品からは、殆ど出て居ないと云つてもよい程で、僅かに「枕草紙」それに「古今集」「山家集」の和歌が少し出てゐます。近古文と現代文とが多く、近世文がその次位、その他は詩歌であります。近古文では徒然草が一等多いでした。で此の書には大體右の割合を考へて、新しく模擬の問題を作製し、略ぼ時代順に排列したのであります。讀者はこれによつて「何かから出るか」「時代はいつか」といふ見當をつけて勉強することが出来るであります。次に、

### 二、どんな問題が出るか。

これは特に此の書で注意した點であるし、又出さうな新しい問題を苦心して考案したことでもあります。他の高等の學校の入試とは違つて師範二部の入試問題は可なり程度が高いし、亦面白いのや一寸書けさうもないのことが多いのです。大體に於て一般に問題の出し方が進んでゐると思ひます。「解釋」、「大意」、「要旨」、「趣意」、「感想」、「文の組立」、「鑑賞批評」、「段落關係の説明」等々多

種多様。それを一々抽象的に今こゝで説明しても得る所は少いものであります。それで本當の實地模範の意味の「解答」を「本文」と「問題」と照し合せてよく玩味して頂きたい。「参考」の部で特に「指題」欄を設け、右各種問題の意義を述べて、具體的にわかりやすく解説いたしました。例へば「感想」の書き方、「鑑賞」とはどんな事を書くのがよいか。「大意」と「要旨」とはどう違ふか。など一々問題について詳しく説いたのであります。なほ、

### 三、「解釋」とはどんなことをするのか。

といふことを、はつきりと表はすことにいたしました。従來受験者の多くが、「解釋」といふことを、唯逐語譯をすることだと思ひ、無理な又一面採點者を噴き出させるやうな云ひ方をして居るのが非常に多いのであります。その缺陷の基く所は、

- (1) 文脈（文の筋）を明かにするための補足をなす。
- (2) 文の内面に潜む心持を明かにするための補足をなす。
- (3) 難語、動詞、助動詞の通譯をなす。

此の三點をはつきり目標として答案を書かないからであると信じます。そこで此の書にはその點に深き注意を拂ひ、「補足」の部には括弧（ ）をして、「この補足が加はつて居るからよい答案にな



つてゐるのだ」といふ呼吸がおわかりになるやうにして置きました。また難語、動詞、助動詞、の通譯については〔語釋〕或は〔指釋〕の部で親切に説明した積りであるからよく味うて下さい。同一の語も「作者」により又「時代」により譯を適當に違へなくてはならない事もあるし、動詞、助動詞にしても、文法を考へて適當な譯をせねばならぬ時と、餘り文法を考へ過ぎては却て不適當な譯になることもあるのですから、その呼吸が大切であらうと思ひます。例へば「……てむ」といふ助動詞は「つ」といふ完了、「む」といふ未來の助動詞、この二つの結合である。そして口語では「……シラシマフダラウ」といふのが正しいのでせう。然し「……スルコトガデキサウダ」とも「……シテシマヒマセウ」とも譯しなくてはならぬ時がある。それ等は一々注意して置きました。要するに解釋の方法は、所謂不即不離で、餘り本文の語につき過ぎて逐語譯になるのもいけないし、それかと云つて餘り語を離れ過ぎて頓でもない餘計な事や廻りくどい事を書いてはいけない。その中間の程よい所を行くのがよいので、又それがほんの呼吸ものでむづかしくもあるものであります。今や二部制度が益重んぜられて来て、募集人員も増加される時運に遭遇しました。充分に自重して入學の榮冠を得られるやう切に祈るものであります。

目次

第一編 近古文

- 一 山鳥のほろ／＼……………(方丈記)……一
- 二 二に六十の露……………(同)……………二
- 三 御門より始め奉りて……………(同)……………三
- 四 貧しくして富める家……………(同)……………四
- 五 それ人の友たる者は……………(同)……………五
- 六 それ三界は……………(同)……………六
- 七 事のたよりに都を……………(同)……………七
- 八 まだ知らぬ道……………(東關紀行)……八
- 九 頃はみ冬たつ……………(十六夜日記)……九
- 一〇 蕪姑射の山の峰……………(増鏡)……一〇
- 一一 院のおはします所は……………(同)……………一一
- 一二 都にもなほ世の中……………(同)……………一二
- 一三 いさあやしげなるあまの……………(同)……………一三
- 一四 この大臣(實朝)は……………(同)……………一四
- 一五 時政は建保三年……………(同)……………一五
- 一六 弓のをしきは取らばこそ……………(平家物語)……一六

目次

- 一七 かゝりしほごに法皇は……………(同)……………一七
- 一八 凡そ王土に生れ……………(神皇正統記)……一八
- 一九 言辭は君子の樞機……………(同)……………一九
- 二〇 家居のつき／＼しく……………(徒然草)……二〇
- 二一 主ある家には……………(同)……………二一
- 二二 主ある家には……………(同)……………二二
- 二三 心なしと見ゆるもの……………(同)……………二三
- 二四 しづかに思へば……………(同)……………二四
- 二五 雲のおもしろう降り……………(同)……………二五
- 二六 飛鳥川の瀬瀬……………(同)……………二六
- 二七 法顯三藏の……………(同)……………二七
- 二八 よき人の物語するは……………(同)……………二八
- 二九 かりにも愚を學ぶ……………(同)……………二九
- 三〇 神無月の頃……………(同)……………三〇
- 三一 老來りて初めて……………(同)……………三一
- 三二 人はかたちありさまの……………(同)……………三二
- 三三 朝夕へたてなく……………(同)……………三三
- 三四 萬のさがあらしき……………(同)……………三四
- 三五 世に語り傳ふる事……………(同)……………三五

目次



三六 我がために面目……………(同) 上…三六  
 三七 或人弓射ること……………(同) 上…三六  
 三八 平宣時朝臣……………(同) 上…三六  
 三九 京に住む人……………(同) 上…三六  
 四〇 一生のうちにむれと……………(同) 上…三六

第二編 近世文

一 心もさなき日敷……………(奥の細道)…一  
 二 明くれば又野中を……………(同) 上…三  
 三 三代の榮耀一睡の中……………(同) 上…三  
 四 蝸牛はたゞ水に……………(鴉衣)…七  
 五 松蟲のその木にも……………(同) 上…八  
 六 花は春こそ……………(樂則)…九  
 七 かたちうるはしく……………(同) 上…一〇  
 八 手かくわざは……………(加藤千庵)…二  
 九 千里をへだて侍れど……………(同) 上…二  
 一〇 おのれ教子どもの……………(鈴屋集)…三  
 一一 よろづよりも手は……………(玉かつま)…三  
 一二 近き世の人は……………(同) 上…七

一三 物學ぶさもがら……………(同) 上…六  
 一四 すべて新なる説を……………(本居宣長)…三〇  
 一五 すべてよき人さいへども……………(同) 上…三三  
 一六 大かた世の常に……………(同) 上…三三  
 一七 げにさ思ふふしも……………(同) 上…三三  
 一八 常にかきかはす消息文……………(同) 上…三三  
 一九 御館に入らせ御徒束……………(つづらぶみ)…三三  
 二〇 西行法師人に語りて……………(同) 上…三七  
 二一 あはれ世のならはし……………(琴後集)…六  
 二二 あはれ世のならはしこそ……………(同) 上…三〇  
 二三 人のこさわさ多かる中……………(同) 上…三三  
 二四 うつせみの世の人……………(同) 上…三三  
 二五 よろづ何の業にも……………(同) 上…三三  
 二六 すべて下りたる世人の……………(同) 上…三三  
 二七 この雨に田づら……………(花月草紙)…三七  
 二八 なしと聞けばありさ……………(同) 上…三六  
 二九 いでや横さいはで……………(同) 上…四一  
 三〇 海人の住家ばかり……………(櫻園文集)…四三  
 三一 ののこさあらむもの……………(同) 上…四四

三二 人は心のそこつよく……………(藤井高尙)…三三  
 三三 眞淵に及びて……………(伴蒿巖)…三七

第三編 現代文

一 天は公に授くるに……………(高山樗牛)…一  
 二 雲いろくの夕暮……………(同) 上…三  
 三 假令活神向上……………(瀧島健川)…四  
 四 あはれかゝる夜よ……………(樋口一葉)…六  
 五 誠によくこそ我は……………(尾崎紅葉)…八  
 六 青しんだり怒つたり……………(夏目漱石)…九  
 七 住みにくい世から……………(同) 上…三  
 八 吾人は詩人の建立……………(同) 上…三  
 九 國中兒等を……………(大町桂月)…三  
 一〇 春寒未だ去らざる……………(同) 上…七  
 一一 彼の君子人の老後……………(坪内雄蔵)…九  
 一二 人の真性は……………(徳宮蘇峰)…三  
 一三 詩人としての山陽……………(同) 上…三  
 一四 新を喜ぶものは……………(同) 上…三  
 一五 我が國民は……………(同) 上…三

一六 つらつら文運の……………(朝比奈知泉)…六  
 一七 吾々の最初の……………(阿部次郎)…三〇  
 一八 弱者は唯その……………(同) 上…三三  
 一九 花が象徴する……………(同) 上…三三  
 二〇 門のすきまから……………(薄田泣菫)…三六  
 二一 私はこゝに二三の……………(土居光知)…三六  
 二二 一茶は六歳の時……………(萩原井泉水)…三六  
 二三 今の世は凡ての人……………(同) 上…三六  
 二四 何のその百萬石……………(吉田綾二郎)…三六  
 二五 哲人ソクラテスは……………(同) 上…三三  
 二六 少し油断をすると……………(相馬御風)…三六  
 二七 絶對に純草の……………(同) 上…三六  
 二八 さまくに……………(同) 上…三六  
 二九 老翁は美を……………(幸田露伴)…三六  
 三〇 沈黙は愚人の……………(同) 上…三六  
 三一 富士山の頂……………(同) 上…三六  
 三二 成長するもの……………(同) 上…三六  
 三三 社會は一種の……………(中澤昭川)…三六  
 三四 讀書は伴例を……………(水井荷風)…三六



三五 日は赫々たる光……………七〇  
 三六 時に君、古い本……………七一  
 三七 播磨語は……………七二  
 三八 或時、不幸な彼の爲に……………七三  
 三九 六十年前の今日は……………七六

第四編 詩歌

一 いや、君は人生の……………一  
 二 青い空を映す海は……………四  
 三 人はいさ心も知らず……………六  
 四 いづくより胸うち入れむ……………八  
 五 わが前を押し黙り……………九  
 六 世の中に絶えて櫻の……………一〇  
 七 つくづくし手にもち……………一〇  
 七 見わたせば山本かすむ……………一一  
 八 うすくこき野邊の……………一二  
 八 月天心貧しき……………一三  
 九 さゞ波の流れたゆたふ……………一四  
 九 夏草やつはものごと……………一四

一〇 何となく住まほしく……………一六  
 一一 三日月の地は……………一七  
 一二 芭蕉野分して……………一八  
 一三 大根引大根で……………一九

第五編 熟語書取

一一〇 語句の讀方 意義等……………一一七  
 一一一 三六 書取……………一八三

第六編 文法

一一五 品詞分類、正誤等……………一一三  
 (附録) 作文題

近 古 文



一 次ノ文ヲ解釋セヨ。

(栃木女師二部)

山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯の鹿の近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。或は埋火をかき起して、老の寢覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。(方丈記)

解答

山鳥のほろ／＼と鳴く聲を聞いても(行基菩薩の歌にある通りに)我が父ではないか、我が母ではないかと疑ひ、峰の鹿が、(自分を恐れなくて)馴れ近づいて来るにつけて、(我が身がいかに)ばかり)世間から遠ざかつてゐるかと思ふ程度がわかる。或は埋めた火をかき起して、老の身の目覚めた時の(さびしさをまぎらす)友とする。恐しい山ではないが、梟の聲を聞いて感に堪へぬこともあつて、山の中の景色は、四季の折々につけていつもなくなることはない。(私のやうなつまらないものでもこのやうに感興が深い)のだから、まして深い考をもち、深い知識ある人にとつては、(當然その感興は)これ位では止まりはしないだらう。

参考



【要旨】 世を離れた山中生活の感興を述べたものです。

【語釋】 ●山鳥の云々——行基菩薩の歌に、「山鳥のほろ／＼と鳴く、壺聞けば、父かぞ思ふ、母かぞ思ふ。」とあるによる。「ほろ／＼」は山鳥の鳴き聲の形容。●峰の鹿——鹿は山奥に潜んで人里に近づかぬもの。西行法師の歌に「山深み馴るゝかせぎのけぢかきに、世に遠さかるほぞぞ知らるゝ。」鹿を「カセギ」と讀む。●深く知れらむ人——「知れらむ」は「知りたらしむ」「知りぬらしむ」等と同じく、口語では「物を知つて居る人」といふことになる。これを「深く知つてならう人」と譯するのはよくない。

【指導】 ○これにしも限るべからず。——「しも」は意味を強く云つたので「これ位」と譯した。「べからず」はその感興と云つたら以上述べた位のものではなく當然もつと多いてあらうの意。これを「限つてはいけない」「限つてはならない」などと譯しては落第です。○右解答中（ ）の部——これ位補足して口語譯をすれば筋の通つた解釋になります。○況んや——から以下が本問題の難所でせうが、それまでの文が「山中生活の感興の深いことを述べたものだ」と云ふことにさへ氣がつけば「まして」以下は「……に於てはもつと感興が深い」といふ意に當然なることがわかるのです。

二 左に掲げた十箇の句を續けて讀み、各句の意味を文法に注意して口語に譯し各句の右に記しなす。

(埼玉女師二部)

- (1) ここ、に六十の露消えがたに及びて、
- (2) 更に末葉のやどりを結べることあり。

- (3) いはば狩人の一夜の宿をつくり、
- (4) 老いたる露の萌をいとなむが如し。
- (5) これを中頃のすみかになすらふれば、
- (6) また百分の一にだにも及ばず。
- (7) とかくいふほどに齡は年年にかたぶき、
- (8) 住家は折折にせばし。
- (9) その家のありさま世の常ならず、
- (10) 廣さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。(方丈記)

解答

- (1) (こゝに六十歳といふ露のやうな命の消えるのも間近い時になつて、こゝに六十の露消えがたに及びて、)
- (2) (また晩年しばしの宿を作つたことがある。更に末葉のやどりを結べることあり。)



- (3) (たとへば狩人が山に一夜の宿をつくり、いはと狩人の一夜の宿をつくり、)
- (4) (老いたる輩が藪をつくるやうなものだ。老いたる輩の藪をいとなむが如し。)
- (5) (この庵を中頃構へた住家に比べると、これを中頃のすみかになすらふれば、)
- (6) (またすつと小さく百分の一程の大ききさへもない。また百分の一にだにも及ばず。)
- (7) (さうかう云つてゐるうちに年齢は年毎に寄つて、とかくいふほどに齡は年々にかたぶき。)
- (8) (住家はだんだん狭くなる。住家は折々にせばし。)
- (9) (その家の有様は世間一般の風ではない、その家のありさま世の常ならず、)
- (10) (廣さは僅かに一丈四方、高さは七尺以内である。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。)

参考

〔通釋〕 さてここは藪のやうにもろい身の、六十歳といふ死期も間近の時になつて、また老後留しの餘生を托すべき宿として一つの草庵を造つたことがあるのです。それはたとへていふと狩人が山中に一夜宿る家を造り、老いたる輩が藪をつくるやうなものです。この草庵をあの私の三十歳頃に構へた賀茂川べりの草庵に比べるとすつとまた小さく百分の一程にも當らないものなのです。かれこれ云つてゐるうちに年々寄つて死期に近づき、住む家はだんだんと狭くなつて行くといふわけです。その構へた家の有様はと云ふと世間普通の家とは大へん趣を異にし、廣さは僅かに一丈四方、高さは七尺にも足らぬとても小ほけな家なのです。

〔語釋〕 ●ここは——前の文から一轉して更に文を起す語で「さて」といふ程の意。●六十の藪云々——人の命のはかないことを藪にたとへ、死期の近いことを藪の縁語「消えかた」と云つたのである。●末葉のやどり——晩年しほしの宿のこゝを、前の句を受けて葉末にやどる藪のはかないさまにたとへたのである。●むすぶ——「藪の結ぶ」と「庵を結ぶ」ことをかけたのである。

〔指釋〕 ○本問題は特に「文法に注意して」とあるから右の解答のやうになるべく本文を離れぬやうに逐語譯をやるがよいと思ひます。殊に助動詞の口譯は注意なさい。〔解釋せよ〕とある場合は前に示した参考譯の通釋が適切でありませう。

三 左の文中傍線を施した部分を詳解なさい。

御門よりはじめ奉りて、大臣・公卿、悉く攝津國難波の京に移りたまひぬ。世に仕ふる程の人、誰か一人故郷に残り居らむ。官位に思をかけ、主君の蔭をたのむほど



の人は、一日なりとも、とくうつらむと勵みあへり。時を失ひ、世にあまされて期する所なきものは、うれへながらとまりぬたり。(方丈記)

解答

- (1)天皇。天皇の御身を直接に指すのを畏れて、その御居所について申し上げた語。
- (2)朝廷に任へる高位高官の人達。「大臣」は大政官の中の上官で、大政大臣・左大臣・右大臣・内大臣がある。「公卿」は攝政・關白・大臣・大納言・中納言・參議・それに三位以上の人達のこと。
- (3)官位についてゐる程の身分の人。
- (4)高位高官に上りたいとか、主君の御蔭に預りたいとか願ふ程の人は、一日も早く新都へ移らうとお互に一生涯命になつてゐる。
- (5)仕官の時機を失つたとか、世間からのけものにされて、前途に何もあての無い者は憂ひ悲しみながら舊都に止まつてゐた。

参考

〔補説〕 平清盛が都を福原に遷したので、官途についてゐた人達は、皆我先きに新都に移つて、あとには失

望してゐるやうな人間の心が透つたことを述べてゐる。

〔語釋〕 ●御門——安徳天皇。●難波の京——攝津福原の都。●故郷——舊都、こゝは平安京を指す。詳説すれば「故郷」に三つの意味がある。(一)自分の生れた土地。(二)以前時々行つた馴染の所。(三)舊都。以上三つの何れの意味に當るかは文の前後の關係から推測してわかるから答案に明示した方がよしい。

■ 次の文を解釋せよ。

貧しくして富める家の隣にをるものは朝夕すばき姿を恥ぢて諂ひつゝ出で入り妻子僮僕の美めるさまを見るにも富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも心念々に動きて時として安からず。(方丈記)

解答

家が貧しくて、富貴の人の家の隣に住んでゐる者は、朝夕(自分の)みすばらしい姿を恥つかしく思ひながら、(その富貴の人達の)御機嫌を取りく、その家に入りし、(其の上自分の)妻や、召使共が、(その富貴の家の様を見て)羨ましく思つてゐる様子を見るにつけても、又富貴の家の人々が(こちら)を輕蔑する様子のあるのを聞くにつけても、心は時々刻々にぐらついて、いつも落ちついてゐられる時がない。

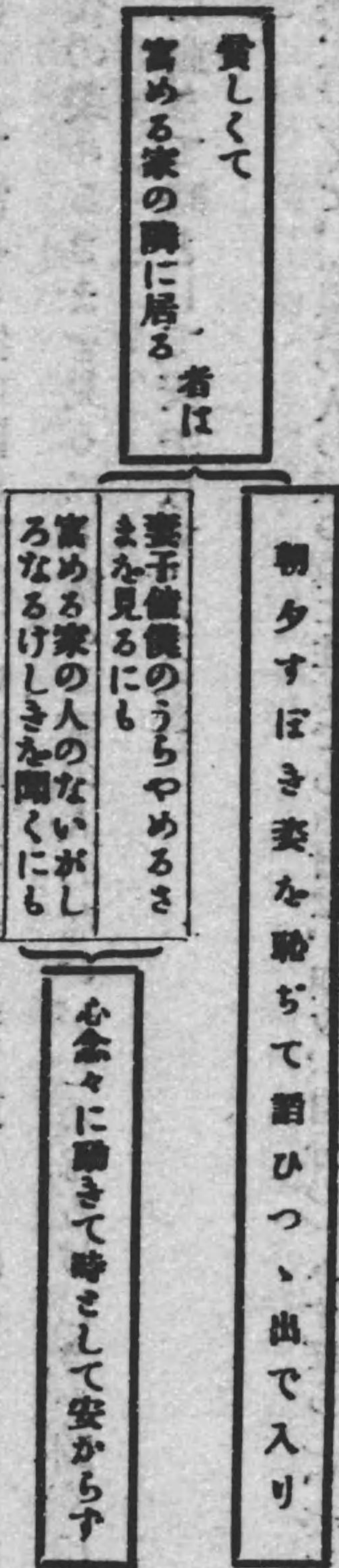
参考



〔解説〕 作者鴨長明はこの前文に世の無常なことを述べてゐる。こゝは「住む場所、身分によつて心を苦しめることが多く」安住の地のないことを暗示した文である。

〔語釋〕 ●すばし——「スボミテ細シ」の義から来たもの。●使僕——召使、しもべ。●ないがしろなるけしき——輕んずる有様。こちちを見下げるやうな態度。●念々に——一瞬毎に。●時として——どんな時も常に。「時に」、「常に」、の意ではない。

〔指題〕 この文は筋が複雑になつてゐるから表に示して見ませう。



答案にはこの關係がはつきりするやうに認めることが大切で、その關係をはつきり表はすには、例へば「家が貴しくて」の下に「い」を必ず附けるが、必要な所に右解答中へ（ ）のやうな補足をすることがあります。

五 次の文を解釋なさい。

それ人の友たる者は富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。必ずしも情あると直な

るとをば、愛せず。たゞ絲竹花月を友とせむには如かじ。人のやつこたる者は、賞罰の甚だしきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすくしてしづかなるをば顧はず。(方丈記)

〔解答〕

一體、(今ごろの) 友達なる者を見るに、彼等は、金持の人を貴び、さも親切らしく世話を焼いてくれる人を第一とし、(之と交ることに努めてゐる。)そして必ずしも情愛の深い人や、實直な人を愛して、之と交らうとはしない。(だから私共はそんな輕薄な者を友とするよりは)、たゞもう、音楽とか、四季自然の景色とか云ふやうなものを友として樂しむに越したことはない。(又當世の) 奴僕なる者を見るに、彼等は、主人から貰ふ賞與がうんとあるかを念頭に置き、金品を多く恵まれる方を有難がつて、(さういふ主人に使はれることを願ふのである。)そして主人が勞はり可愛がつて(苦勞がないやうにしてやつても) 彼等は心配がなく、のんきであることを少しも望まない。(だから人を使ひたくないのだ。)

〔参考〕

〔解説〕 これは作者長明が雨居の氣味を述べた文の一節で「今ごろの友人、奴僕は利慾ばかりに目がくらんで



めて、少しもあてにならぬことを言ひ、結局、獨で暮し、自然を相手に楽しむと云ふやうな生活が一番よい」と主張してゐるのである。

〔語釋〕 ●人の友なる者——上に「今の世の」を補つて見るべき所。●れんごるなるを——うはべだけいろい  
ろと世話やいて呉れる人の意。●先さす——先づかう云ふ人を見つけて交らうとするの意。●情ある——  
真情のある人の意。●絲竹——「絲」は琴、琵琶など、糸のある樂器。又「音樂」の意に用ひる。●花月  
——春の花、秋の月と云ふ意であるが、廣く、四季自然の景物を見るべき所だ。●如かじ——「……の方  
がました」「……に及ばない」「……に越したことはない」と譯せよ。●人のやつこたる者——これも「今  
の世の」を補ふこと。●賞罰——此處は「賞」の意で、「罰」には意味がない。外の例「一旦發急アソバ」  
の場合に「罰」といふ字には意味がない。●恩——金品を惠まれる恩。●更に——ちつとも。少しも。最  
後の「願はず」に係る故、譯の際は位置を下げて「少しも願はない」とする方が至當である。●はこくみ  
あはれむ——いたはり可愛がる。●やすくしてしづかなる——氣樂で香氣。

〔指釋〕 ○この譯には補足して譯すべき箇所が多い。( )の部をよく味つて下さい。補足は餘り多過ぎても  
よろしくありませんが、文によつては相當に補はないと、すらしと意味の通つた譯になり兼ねます。○そ  
れから文の前後の關係から推して似たやうな意味の語も反對の意味に解すべき所があるのです。其の例  
(一)「れんごるなる」と「情ある」——本來は殆ど似たやうな意味だが、「れんごる」の方は、うはべだけで、表面的・物  
質的に「情ある」の方は内面的・精神的に解すべきです。「れんごる」の方は、うはべだけで、一寸した便  
利を計つてやるさか、物を呉れるさかして親切に見せかける方。「情ある」の方は、眞の心から湧く情の意  
味である。(二)「賞罰」「恩」と「はこくみあはれむ」——前者は物質的の賞恩、後者は精神的愛撫を見る

べきは、文の前後をよく味つて見て下さるさ、さう解さればならぬことがわかります。

六 次の文について左の問に答へなさい。

それ三界はたど心一つなり。心もし安からずば牛馬・七珍もよしなく、<sup>(1)</sup>宮殿・樓閣も望なし。今さびしき住居・一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、<sup>(2)</sup>乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝにをる時は、<sup>(3)</sup>他の俗塵に惹するを憐ぶ。(方丈記)

一、文の要旨。

二、傍線の部の解釋。

解答

〔要旨〕心の持方一つではつまらないものにも満足することが出来るのだ。自分には寂しい此の草庵が楽しく、こゝに居ると世間の名利に囚はれてゐる人達が可哀さうになる。

〔補解〕(1) 一體、人間界の一切の事物は各人の心の持ちやう一つで、同じ事物も或は楽しく思はれ、或は悲しくも思はれるものである。



- (2) (あつた所で) 何にもならないつまらない。どうにもならない。
- (3) わざ／＼でなく、自然と何かの折に。
- (4) 他人が浮世の名利に執着して心を悩ましてゐるのを可哀さうに思ふことである。

【参考】

【語釋】 ●三界——欲・色・無色の三界。この三界は、一切衆生の生死輪廻する世界である。それで人間界の意となる。七珍——金・銀・珊瑚・瑪瑙・琥珀。この七種の珍寶。此の處では、多くの寶物の意に解してよい。さびしき住居・一間の庵——「さびしい住居即ち一間の庵」と譯せよ。●乞食——托鉢僧。物を買つて歩く僧。●こゝ——自分の庵を指す。

【指釋】 牛馬・七珍云々の解釋は、「牛馬さか七珍などいふ寶物もつまらないものであり、宮殿・樓閣のやうな宏壯美麗な建物も何にもなりはしない。」と補へば、「七珍」、「樓閣」などの語もそのまま使用して置いて結構よい解釋になります。解答文中に「七珍(七珍トハセツノ珍ラシイ寶物ノコト)もつまらなく……」とすゝる人があるけれどそれはなるべくよした方がよいと思ひます。今次に通解を示しませう。

【通解】 一體、人間界の一切の事物は、各人の心の持ち方一つで(同じ事物も或は楽しく思はれ、或は悲しくも思はれるもので)ある。(それで)若し自分の心が安らかでないならば、牛馬さか七珍(などいふ寶物も)つまらないものであり、宮殿・樓閣(のやうな宏壯美麗な建物)も何にもなりはしない。(處が)今この寂しい住居(即ち)一間の(狭い)庵は、自分にさつては心から楽しい愛すべき物なのである。何かの序にふと、都に出て行つては、托鉢して歩くことを恥かしく思ふのであるけれど、歸つて來て此の庵の中に居

る時には、ほんとうに氣樂なもので、他人が浮世の名利に執着して(心を悩まして)ゐるのを氣の毒に思ふことである。

七 左の文を解釋なさい。

事のたよりに都を聞けばこの山に籠り居て後やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆまして數ならぬたぐひつくしてこれを知るべからず度々の炎上に亡びたる家又いくそばくぞ。(方丈記)

【解答】

何かのついでに、都の様子を聞いて見ると、(自分が)この山に籠り住んでから後、高貴の方のおかくれになつたのも、澤山あるとのことである。まして物の數にも入らぬ賤しい身分の人達の(死んだのは)、多くてとても皆知ることは出来はしない。(それから)度々の火災に焼け失せた家も亦、どれ程あらうか。(實に莫大な數であらう)。

【参考】

【語釋】 ●この山——作者である鴨長明の庵のあつた日野山のこゝ。山城國宇治郡木幡山の南北に當る。●やむごとなき人——身分の貴い人。●つくして——残らず。悉く。皆「と譯してよい。●炎上——大きな建物(例へば殿堂の如き)が焼けるのを云ふが、こゝは火災を解してよいこゝは下の文意からわかる。●い



くそばくぞ——「ぞ」は「だらうか」と云ふ意で、味歎と疑問の心持を含んだ助詞と見るべきだ。  
八 次の文の通解をなし大意を述べなさい。

まだ知らぬ道の空、山重なり、江重なりて、はるばる遠き旅なれども、雲をしのぎ霧をわけつゝ、しばらく前途のきはまりなきに進む。終に十餘日の日數を経て、鎌倉へ下り着きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽かなる砌に至るごとに、目にたつどころどころ、心とまるふしぶしを書き置きて、忘れず忍ぶ人もあらば、おのづから後のかたみにもなれかしとてなり。(東國紀行)

解答

〔通解〕まだ一度も行つたことのない道のかなた、いくつもの山、いくつもの入江(を越えて行く)遙かに遠い旅ではあるが、雲や霧を押し分けて、暫く果てしなく遠い前途に向つて進んで行きました。つひに十餘日の日數を費して、鎌倉に着きましたので、或は山村の旅館又は野原の旅亭に一夜の宿(を求めるとか) 或は海邊や河畔の寂しく静かな境に至るとか、そんなたび毎に、著しく目についた所々、又特に心に印象した事柄(などが澤山あるのです。それ)を書きつけてお

いて、私の事を忘れず思ひ出す人もあらば、自然(これが)後の記念にもなれよと願ふ次第であります。

〔大意〕始めての難儀な旅をして、やうやく十餘日かゝつて鎌倉についた。そこで、途中の著しい見聞を後の記念にもなれよと思つて書き止めて置くのだ。

参考

〔語釋〕 ●道の空——この「空」は方向又は場所を漠然といふ時に用ひる語である。例「旅の空」「故郷の空」など。 ●山重なり江重なり——山や入江が幾重にも重なる意、山海遠くへだたる。 ●雲をしのぐ——山など越すとき雲の間を通る。即ち雲を押し分けて通る。 ●前途のきはまりなきに進む——きはまりなく遠い行く先に向つて進む意。 ●着きし間——この間は「……したから」の意。 ●幽かなる砌——幽遠な場所。 「砌」は「ミヤリ」と讀む。「境」「際」の義。

〔指導〕 この文は「東國紀行」の文を尋くに至れる由來を述べた序文ともいふべきものであります。調子よく書かうとした文なので通解のやりにくい文です。「鎌倉へ下り着きし間」その旅行途上、「目にたつ所所、心にとまる箇所」多し。それを「書き置きて」……と云ふ風に、補足したり、句を切つたりしなくては解釋の出来ない所があります。これを唯のべつに譯しては、結局よく讀めて居ないと思られます。だが二部の入試には殆ど東國紀行から出てゐませんので、こゝに一つだけ選んだのです。

九 次の文の通解をなし文を通して見たる作者について述べよ。



頃ほみ多たつはじめのさだめなき空なればふりみふらずみ時雨もたえず嵐にきほふ木の葉さへ涙とともに亂れちりつゝ事にふれて心細く悲しけれど人やりならぬ道なればいきうしとでもとどまるべきにもあらで何となくいそぎ立ちぬ。(十六夜日記)

解説

〔通解〕時は、冬になつたばかりの、晴雨定めない空模様折ですから、降つたり止んだり、時雨の絶え間もありません。(その上)嵐に吹かれて、吾先きにと木々の葉までが、(私の頬を傳ひ落ちる)涙と共に亂れては散りするのです。(そんな具合で)何かにかにつけて、心細くまた悲しくもあるのですけれど、人から無理にやらされたのでなく、(もとく)自分の心から求めて行く旅なのです)から行くのがいやだと云つたところで、今更思ひ止まるわけにも行かないので、何といふこともなく夢中に急いで出發いたしました。

〔作者〕「涙と共に亂れ散りつゝ」とか、「事にふれて心細く悲し」とか、「いきうし」とか、至る所に悲歎に暮れて居る心持、弱々しい女性、敏感な神経を思はしめる。作者は胸一ぱいた或るものを晴らすべく氣強く旅に立つのである。それを女性らしい敏感さを以つて感傷的にこの記録を作つたのである。概して云へば、女性らしいが亦一面非常に強い一念に燃えてゐるやうな所がある。

参考

〔語釋〕●みきたつ——「み」は接頭語で意味はない。「たつ」は「來ル」「ニナル」の意。「去ル」の意も思つてはならぬ。陰曆十月の初を指す。●ふりみふらずみ——この「み」は「……シタリ、……シタリ」といふ意を表はす。従つて「降つたり 止んだり」となる。●時雨——秋冬にかけて、時なしに降り来る小雨。●嵐にきほふ——「きほふ」は「競フ」意。嵐の吹く毎にどの葉も先を競うて散るのである。●人やりならぬ道——人から強ひられて仕方なくする事柄を「人やりの道」といふ。此處は「自ら求めてする旅」の意となる。●いきうし——行きづらい。

〔挿釋〕この文は阿佛尼が、鎌倉に旅立つた日の悪い天氣で、その時の自分のつらい心持を續り込んで書いたもので、續き具合がなかく複雑してゐます。今簡單にしてわかりやすいやうに圖に示しませう。

頃ほみ多たつはじめの定めなき空なれば	(時雨や木の葉の散るなど)
事にふれて心細く悲しけれど	人やりならぬ道なれば
	(いきうしとて止るべきにあらで)
	何となく急ぎ立ちぬ

「十六夜日記」からも、餘り問題には出てゐませんが、このやうな所の解法も心得て置く可きであります。

一〇 次の方を解釋せよ。

(廣見島女師二部)

親姑射の山の峰の松もやうく枝を連ねて千代に八千代を重ね霞の洞の御すまひ幾春を経ても空行く月日の限り知らずのどけくおはしましぬべかりける世をありく



てよしなき一ふしに今はかく花の都をさへ立別れおのがちり／＼にさすらへ磯の苦  
 屋に軒を並べて自らこと問ふものとは浦に釣する蚤小舟鹽やく煙のなびく方を  
 わが故郷のしるべかとはかりながめ過ぎせ給ふ御すまひどもはそれまでと月日を限  
 りたらんだにあす知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべしまいていつをはと  
 か廻りあふべき限りだになく雲の浪煙の浪の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべ  
 き御さまども口惜しといふもおろかなり。(増鏡)

【増鏡】

菴如射の山の峰の松が、次第に枝を連ねて(繁るやうに、君が代の榮えは)千代に八千代と重  
 なつて、仙洞御所の御生活は、幾度も春を重ね、年を迎へても。(丁度)空を行く月や日の限り  
 ない(やうに)長閑かに安らかでおはすべき世であつたのです。所がそんな風に續いて來た最  
 後には、たわいもない一事(のため)に、今はかうして花の都をさへ遠く去り、(三上皇を始め  
 皇子達まで皆)それぞれに、ばらくと離散なされることとなり、ました。今は、磯の漁夫の小屋  
 と軒を並べて住居して(ゐられるので)自然お話相手になるものと云つては、浦で釣をする漁

夫の小舟ばかり(であります。それで)鹽を取るために藻を焼く煙の靡いて行く方を、(あち  
 らが)故郷の(京都であると思はせる)しるべかとはかり(思うて)眺めお暮しなさるのであ  
 ります。(ですからそのやうな)御住居などは何日までと期限の定まつてゐるさへも、明日の運  
 命も知れぬ人生の不安さに、餘程心細いことでありませう。況して何時迄といふ期限とか、或  
 はめぐり合ふべき期待といふものもなく、雲烟萬里の遠い所に、この世を盡し果される御境  
 遇は残念などと申してもなかなか云ひ足りません。

【増鏡】

【増鏡】 ● 姑蘇射の山——「ハコヤ」の山と讀む。支那で想像上の山、仙人の住所。こゝは仙洞御所、即上皇の  
 御所で、雲の洞も同じ。● 苦屋——苦を以て葺いた見すばらしい漁夫の小屋。● 軒を並べて——この「て」  
 は「ヤレバ」の意味に解す。● こゝ問ふもの——訪れて來るもの即ち物を語り合つて慰む友とすべきもの。  
 ● しるべ——案内をするもの。● うしろめたさに——氣掛りになるので。不安になるので。後の方の事に  
 心が掛る意。● 雲の浪、烟の浪——遙々遠い有様。遙かに遠いので、浪の上に雲や烟のこめた様。まいて  
 ——まして。

【増鏡】 ● 増鏡「新島守」に出てる文でよく教科書に取られてゐる所です。切れ目の少ない文ですから解釋の  
 際に通言に意味のはつきりするやうに切つた方がよいと思ひます。本解答はこゝで切つてあるか御覽下さ  
 い。○ 語釋を解答の一部として後方につけた方がよいでせう。例へば「菴姑射の山」など。○ 比喩から文の



本筋に續く所は次のやうにお考へなさい。松もやうやう枝を連れて「繁りぬ。その如く君が代の榮え」は千代に八千代を重ね……。空行く月日の限り知ら（さるその如くに）。こんな所は日本文學の一特長で、澤山ありますから、いつもこの調子で譯して行くのです。

一一 次の文章を解釋せよ。

（東京女子醫專）

院のおはします所は人はなれ里遠き島の中より海づらよりは少しひき入りて山かけにかたそへて大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて松の柱に葦葺ける廊などけしきばかりことそぎたり誠に柴のいはりのたゞしばしとかりそめに見えたる御やどりなれどさる方になまめかしく故づきてしなさせ給へり水無瀬殿おぼしいづるも夢のやうになむはるばると見やらる、海の眺望二千里の外ものこりなき心地する今更めきたり潮風のいどこちたく吹きくるを聞しめして

我こそは新島守よおきの海の

あらし浪かせこゝろして吹け （増鏡）



御島羽上皇のおすまひになつてゐられる處は、人里から遠く離れた島の中であります。（假の御所は）海邊からは少し山の方へ引き込んだ所で、山の蔭に片寄せ、大きな岩の高く立つてるのを利用して（建てられ）松木を柱とし、葦を葺いたお廊など、ほんの形ばかりで、萬事簡略なことあります。ほんたうに「柴で造つた庵に、たゞ暫くの間住むだけ」と言つたやうなほんの間に合せて造られたやうに見えてゐる御住居だけれど、それはまた簡略といふ方面で、上品に趣をそへて造られてあります。（昔では榮華をつくして御住ひになつた）水無瀬殿をお思ひ出しになるにつけても（餘りに變化が酷い爲め）夢のやうに（お感じなされるのであります）。また海上が遙かに見渡されるにつけても「二千里の遠くまでがよく見えて遠方にゐる舊友知己を懐ふの情に堪へない」といふ古人（白樂天）の詩句の趣を今更のやうにしみんくとお感じなされるのでした。海上から風のひどく吹いて來る音を御聞きなされて、（次のやうな意味の歌をお詠みになつてゐられます。）

自分は今度、此の隱岐の島に島守として來た者であるぞ。隱岐（沖）の海を吹き渡る荒き浪風よ（汝等は）氣をつけて荒く吹かないやうにしてくれ。

参考

〔語釋〕 ●海づら——海面。轉じて海邊。●たよりにて——利用して。岩石に一方をもたせかけたのだ。●け



しきばかり——「形ばかり」で實際粗末なこと。●ここそぐ——事殺ぐで簡略にすること。●柴のいほりのたゞしげしき——柴葺の小屋に假の宿りたるやうに、ほんの一時住むだけと云つたやうな。西行法師の歌に「いづくにも生まれずばたゞ住まであらん、柴の庵のしげしなる世に。」とあるによつて書いたもの。「柴の庵」は粗末な住ひと云ふ意味と同時に次ぎの「しげし」を呼び起す序詞。●さる方に——それはその方で。即ち簡略さいふ方面で。●なまめかしく——上品に。氣をきかせて。●ゆゑづきて——由緒ありさうに趣深く。●水無瀬殿——攝津の國水無瀬にあつた離宮。後鳥羽上皇此處に屢々御幸なされ榮華をつくされた。●二千里の外も——二千里の遠い外もすつかり見えるやうな氣がする。これは支那唐代の詩人白樂天の「三五夜中新月色、二千里外故人心」によつたもの。「故人心」は舊友を懐しく思ふ心の意で、上皇が都の人々の身の上を思ひやりなされる意を含めてある。●今更めきたり——古人の言ひ古した句だが今更事新しく感じられる。●こちたく——事痛くであつて「烈しく」の意。●おきの海の——この「おき」には「神」と「塵岐」との意が持たせてある。

【挿題】 解答中、( )の部は本文にはないが、當然含まれてゐると思はれるので、補足した部分です。「柴の庵のたゞしげし」の所や、「二千里の外も」の所は、どうしても一度前以て當つてゐないか完全には解かれませんが、入試問題としては、「大意と感想を記せ」位が適宜ではないかと思ひますが、こんな所は暗記して置くのすすめ。

二二 次の文の傍線の部分を解釋せよ。

都にもなほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづにおぼしなぐさめて、

關守のうち寝るひまをのみうかがひ給ふにしかるべき時の至れるにや、御垣守にさぶらふつはものどもも、御けしきをほの心えて靡きつかうまつらむと思ふ心つきにければ、さるべきかぎりかたらひ合せておなじ月の二十四日のあけばのに、いみじくたばかりてかくろへひて奉る。(増鏡)

解答

- (1) 色々考へて御心をおなぐさめになつて。
- (2) 天皇の御身邊にゐる番人の油断するすま。 (關守とは關所の番人のことだがこゝはそのまゝではないけない)
- (3) 本來は禁中の御門を守る者の稱であるが、本文では、北條氏からお附け申した警固の武士である。
- (4) 陛下のさういふ御心の内をうすく承知して。
- (5) さう云ふ心を持つてゐる連中だけが相談し合つて。
- (6) 非常に深く策略をめぐらして他の警固の武士に見つからぬやうに、こつそりとお連れ申し



た。「かくろへ」は「かくれて」。即ち人目につかぬやうにして。

参考

【語釋】 ●むほ世の中静まりかたれたる様に云々——まだ守軍の勢が強くて、北條氏の天下になり切つてしまはないといふ噂が聞えたからの意。後醍醐天皇はそれを樂しみにして御心を慰められたのである。●しかるべき時——連れ出で給ふに都合のよい時。●膝きつかうまつる——従ひ仕へ奉る。

一三

いとあやしげなるあまの釣舟のさまに見せて夜ふかき空の暗きまぎれにおしひだす折しも霧いみじうふりてゆくさきも見えずいかさまならむとあやふけれど御心をしづめて念じ給ふに思ふかたの風さへ吹きすゝみてその日の申の刻に出雲の國につかせ給ひぬこゝにてぞ人々心しづめける。(増鏡)

右の文について次の間に答へなさい。

(1) 全文の口語譯をなさい。

(2) 文中「人々」とあるのはどんな人達のことですか。

解答

(1) 誠にみすばらしい漁船の様子に見せかけて、まだ夜のあけぬ暗い時分にまぎれて、(天皇のお乗り遊ばした船を) 漕ぎ出した。丁度其の時、霧が大そう深くかゝつて、行く先きもはつきり見えない。どうなることかと危険には思はれたが、(天皇は) お心を落ちつけて、じつところへてゐらつしやると、霧も晴れ(その上) 思ひ通りに追手の風までも吹き出して、島をお立ち出でになつた日の午后四時に、出雲の國にお着きになつた。こゝで(始めて) 皆安心して落ちついた(のであつた)。

(2) 天皇をお守りして従つて居る人達のこと。

参考

【解説】 この文は後醍醐天皇が隱岐をお逃れになる時のことである。

【語釋】 ●あやし——賊し。粗末な。これを怪し「奇怪」の意に取つてはいけぬ。徒然草の四四段「あやしの竹の瀬戸の内より」も「粗末な竹の瀬戸の内から」と譯する。●いかさまならむとあやふけれど——どうなることかと危ぶまれたけれど。●念じ——堪へるといふ意。●さへ——物の更に加はる意を示す助詞で「その上……までも……する」と譯すればよい。

【指掌】 この文の前半「ゆくさきも見えず」までは敬語が使つてない。これは護衛の武士どもを中心として描いてあるからで、「いかさまならむと」からは天皇が中心となつてゐるので、隨所に敬語が用ひてあります。さう云ふ點を見逃しては不完全な答案になりますから御注意なさい。



一 左の文を解釋せよ。

この大臣(實朝)は大方心ばへうるはしく猛くもやさしくもよろづめやすければこ  
とわりにも過ぎてもののふの靡き随ふさまも父に越えたりいかなる時にかありけむ  
山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごゝろわがあらめやもとぞよみける。

(増鏡)

解答

この大臣(源實朝)は大體に、性質が立派で、勇猛といふ點も、優美といふ點も、萬事に非難  
される所がなかつたので、殊の外武士共の服従してゐる有様が、父(頼朝)以上であつた。どう  
云ふ折であつたらうか。(次のやうな意味の歌を)詠んだのであつた。

(たとへ)山は裂け崩れ、海は水が涸れて浅くなつてしまふ(やうな烈しい變動のある)世の中  
であらうとも、(朝廷に謀反心を起すやうな)ふた心を何で私が持ちませうぞ。(決して決してそ  
のやうなやましい心は抱きません。)

参考

【語釋】 ●うるはし——端正なこと。きちんとして居ること。(今は「奇麗」の意に用ひてゐる)。 ●やさし——

上品、優美のこと。(今は「柔和」の意味に用ひ、更に「困難でない」意味にも轉用してゐる。 ●めやすし——  
【見て感じよ】の意。非難すべき點がない。見苦しくない。徒然草七段に「命長ければ聆多し。長く  
さし聞かば是らぬ程にて死なむこそめやすかるべけれ」——四十歳近くで死ぬのが見よいたらう」と譯す  
ればよい。 ●あす——水が涸れて底が浅くなることを云ふ。

【語釋】 ●なむ——「な」は完了の助動詞「ぬ」の將來段「む」は未來の助動詞「……シテ シマフダヌウ」の  
意であるが、此處を「水がアモテシマフアアラウ世」と譯するのは今日の語法にない言ひ方でいけない。  
「アモテシマフ世」。前の例、「死シテシマフノガ……」といふ位に譯すればよからう。○本文の如く文中に  
歌のある場合の解法は必ず「次のやうな意味の歌を詠んだ」として次に歌の解をして置きなさい。ごん  
時であつたらうか山はさけ……と詠んだ」とする解法は拙いと思ひます。○「さぞよみける」と「さよみ  
けり」とは同一の意味ながら、上の方は意味が強い故、と詠んだのであつた」とすれば心持が出て來ます。

一五 次を番號順に連続して讀み、上段の漢字には右側に讀み假名を附し、下段には各語句の文法  
上の語形に注意しつゝ、傍線ある語には、特に下に括弧して簡単な解釋を加へて、適當な口語  
に改めゆけよ。 (兵庫御影師二部)

(上段)

- 1、時政は建保三年にかくれにしかば
- 2、義時を後を繼ぎける

近古文

(下段)

解答

- 1、時政は建保三年と寫してしまつたから
- 2、義時がその後を繼いだ。



- 3、故左衛門督の子にて
- 4、公曉といふ大徳あり
- 5、親の討たれしことを
- 6、いかでかやすき心あらむ
- 7、いかならむ時にかとのみ
- 8、思ひわたるに
- 9、この大臣また右大臣にあがりて
- 10、大饗など
- 11、めづらしく東にて行ふ
- 12、京より尊者をはじめ
- 13、上達部殿上人
- 14、多くとぶらひいましけり。(増儀)

- 3、故左衛門督の子で
- 4、公曉といふ大徳(高僧に云ふこと、は入道者といふ)がある。
- 5、親の殺されたことを
- 6、どうして諦める心があらうか。
- 7、どう云ふ時に(復讐を)しようかとそればかり
- 8、思ひつゞけてゐる(中)に
- 9、この大臣がまた右大臣に昇進して
- 10、大饗(大臣に任ぜられた時に宴會を)などを
- 11、珍しく東國で行ふことになつた。
- 12、都から尊者(実席に列する上客)をはじめ
- 13、上達部殿上人(位の高い貴人)が
- 14、多数訪れてお出になつた。

【参考】

【指掌】 ○本問題は讀方の力、單語の意味、文法上の智識等各方面から受験者の實力を試さうとしたものであります。○「文法上の語形に注意しつ」といふのは、「かくれにしかば」かくれ(助動連用形)に(助動連用形)「かくれ」(助動連用形)「は」(助動)で、これを口語に改めると、かくれ てしまつ た から と なります。これを適當に「寔じてしまつたから」と譯しました。若し唯「死んで」と譯すれば、語形を無視し適當な口語でもなくなるのです。但し今日ではこの「に」に當る正しい語法は先づないと云つてよいから「寔じたから」の方が一層適切であるかも知れません。○「大徳あり」の場合でも今日では普通「僧が居た」とか「僧があつた」と云ひ、「いかならむ時」は、「どうあらう時」でなく、「どんな時」とか「どう云ふ時」とか申します。○「行ふ」にしても、四段活用の口語は文語と同形ですから、文法上の語形から云へばそのままですが、今日の口語文では「行ふことになつた」と云ふ外ないのです。

【語彙】 ●故左衛門督——「故」は當時既に死んでゐなかつたから云ふ。「左衛門督」は官名。頼家のこと。●上達部——公卿のこと。攝關、大臣、大中納、三位以上、四位以上の參議。●殿上人——昇殿と云つて禁中の清凉殿、紫宸殿に昇ることな許された人。

一六 次の文の通釋をなし内容を批評せよ。

弓のをしさに取らばこそ。義経が弓といはゞ、二人しても張り、もしくは三人しても張り、叔父爲朝などの弓のやうならば、わざとも落して取らすべし。庭弱なる弓を



敵の取り持ちて、これこそ源氏の大將九郎が弓よなど、嘲弄せられむが口情しさに、命にかへて取つたるぞかし。(平家物語)

〔通釋〕

弓が惜しくつて取つたのなら(それは悪からうが實はさうではないのだ。)義經の弓と云へば、二人がよりでも張り、三人がよりでも張ると云ふ風に、あの叔父爲朝などのやうに(強い)弓だつたら、わざとでも落して(敵に)取らせるだらう。(このやうに)かよわい弓を敵が取り(それからそれへと)持ち廻つて(これがまゐ、源氏の大將九郎義經の弓なんだよ。(よわい弓だね)などと、嘲弄されるのが残念さに(俺は)命がけて取つたんだぞ。

〔批評〕

義經が、海中に落した弓を拾ひ取つた理由を、自分の家來達に説いて聞かせる所である。「命にかへても」武者を重んずる思想である。さすがは源氏の大將だけある。又當時武人の理想を代表したものと云へる。一方には強い弓を持つて居るといふことをわざ／＼敵に見せようとする態度も見える。これがやゝもすると外面を重んじて内面を軽んずるといふ缺點を生じた。

〔参考〕

〔通釋〕○取らばこそ。——この下に「悪しからめ」といふ語が省略されてゐることは、よく全文を味つて見るとすぐわかる所て是非補足する必要がありません。

一七 次の文を解釋せよ。

かよひしほどに法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御すまひ、御覽せまはしう思召されけれども、二月三月のほどは、嵐烈しう、餘寒も未だつきす、嵐の白雪消えやらで、谷のつら／＼もうちとけず。かくて春過ぎ夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇は夜をこめて、小原の奥へ御幸なる。(平家物語)

〔通釋〕

さうしてゐた中に、法皇様は文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居な御住居を御覽になりたくお思ひ遊ばされましたが、二月三月の時分は、嵐が烈しく吹いて冬の寒さもまだすつかりは無くならず、嵐の白雪も消えてしまはないし、谷の氷もとけないといふ有様なので(御幸になることをお見合せになつてゐました。)かうして春が過ぎ夏が来て、北祭——(賀茂神社の四月のお祭)——をも過ぎましたので、法皇様は朝まだ暗いうちから、小原の奥へ御出で遊ばすことになりました。

〔参考〕



〔持穂〕よく讀める人にはすぐわかるのですが、この文で唯一つ氣を附けて補足すべき點があります。御覽ぞまほしう思召されければとあるばかりで、あとは「谷のつらもちとけす」となつてゐることです。これは「うちとけざれば御幸ならず」とでも受けて結ぶ可きを略したのです。

一八 左の文を解釋なさい。

(山梨女師二部)

凡そ王土に生れて忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべからず。されど後の人を勵まし、その跡を感びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきはひ争ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難き習なりけんかし。(神皇正統記)

解答

一體、天子がお治め遊ばす此の國土に生れた以上、身命を投げ出して忠義を盡すのは、臣下たるものゝ(當然なすべき)務である。(忠義を盡しても)それを、自分の手柄だなどとは、決して考へてはならぬ。然し人を獎勵する爲めに、又手柄のあつた子孫をあはれんで、その功を賞せられるのは、天皇がなさる政治上の事である。臣下としては(御恩賞に預るやうにと)手を

かへ品をかへしていろ／＼申すべきものではなからうと思ふ。まして是といふたいした手柄もなく、不相應な大きな望を抱くといふことは、自分で自分を危くする端緒であるのだが、先人の失敗を見て、自分の戒とすることは誠にむづかしい事で、例の少い事と見えるわい。(やつぱり同じ失敗をやつてゐる。)

参考

〔語釋〕 ●王土——帝王の領土、こゝは日本國。 ●その跡——國に手柄をたてたその子孫。 ●あらぬにや——「あらぬにやあらん」の「らん」が省かれたものだが、この頃の文では「にや」を「だらう」の意に解した方がよい。 ●前車の轍——前に通つた車の轍を指したあとを見て、後から来る車は用心をする、といふのが原意。 ●有難き——めつたにない。現今使用する「有難い」と意味違ふ。 ●けんかし——「けん」は「やうだ」。「さう見える」。「かし」は「よ」「わい」「なあ」に當る。

一九 次の文の大意を述べ、傍線の部を解釋せよ。

言語は君子の權機なりといへり、<sup>(1)</sup>あからさまにも君をないがしろにし人におごる事はあるべからぬ事にこそさきに記し侍りし如く、<sup>(2)</sup>堅き氷は霜をふむよりいたるならひなれば、<sup>(3)</sup>亂臣賊子といふものは其のはじめ心言葉を慎まざるより出でくるなり世の中



の衰ふると申すは日月の光のかはるにもあらず草木の色のあらたまるにもあらず人の心のあしくなり行くを末世とはいへるにや。(神皇正統記)

【大意】心や言葉は非常に大切なもので、それを慎まないと亂臣賊子ともなり、世は末世ともなる。心、言葉は慎しめよと云ふのである。

【補遺】

(1)「言語といふものは、學徳ある人にとつて、最も慎まねばならぬ大切なものである」と古書に云うてある。

(2)「かりそめにも君主を輕蔑するとか、人におごり高ぶるとか云ふ心言葉があつてはならぬことである。」

(3)「軽い氷は突然に張つたわけではなく、先づ霜が少しづつ、幾度も／＼降るその頃から、次第次第と下地が出来て、後に堅い氷となるのが普通で、丁度そのやうに大事も初め些細な事から起るものなんだ。」

(4)「圖を亂すもの、君父を弑するやうな大罪人。」

【参考】

【語釋】●「言語は君子の徳義なり——」は戸の「タマヤ」で、扉はこれで開閉する。「慎」は石弓の「マネ」で、石弓はこれで射せられる。御ち徳義は事物の活動を掌る要諦とやふ所から、「大切なもの」との意に用ひる。是の「言行者君子之徳義」を指したのらしい。●「あからさま——」「かりそめ」「ついでとつ」との意。只今は「言葉々」「あらはに」「つゞみかゝらす」の意に用ひられてゐる。●「堅き氷云々——」是の「履」は「踏む」にまつたもの。●「末世——」道徳すたれ、人情無義となつた世の中のこと。

【補遺】○「……といへり」といふやうに、ほつんと讀がとどつて書いてない場合は、「古語」とか「古書」とか、に書つてあると感うて讀違ひありません。○「いへるにや」と云ふのは下に「あらん」が書かれてある「云つたものであらうか」といふより、もつと確實性を持つて「自分はさう思ふ」との心持であるから「末世といふのであらうと思ふ」と譯するのです。○「要は」と「大意」とは餘り違ひはないと思ひますが、この文の要旨を云つて見れば、

「心や言葉は慎しめよ、その慎みのないことが亂臣賊子の基となる」

とでもなりませう。つまり大意は全體の大意の意味を含んでゐる範圍内に文を結めるのです。

二〇 左の文について

(兵庫女師二部)

イ、全文を正しく口譯しなさい。

ロ、傳紙の部分を抽出して詳解しなさい。

ハ、内容の批評をしなさい。

聖古文



家居のつきづくしくあらまほしきこそ假のやどりとは思へど、興あるものなれよき人のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も一きはしみと見ゆるぞかし。今めかしくきら、かなならねど木立もの奮りて、わざとならぬ庭の草もあるさまに簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えて安らかなるこそ心にくしと見ゆれ。

解説

〔口譯〕住居のしつくりと調和がとれ、理想的に出来てゐるのは、(どうせ)假りの宿だとは思ふものゝ(やはり)感興の深いものである。物の情趣を解した上品な人のゆつたりと心靜かに住みついてゐる家は、さしこむ月の色も、一層しみじみと感じが深く見えるものだ。何も當世風に華美といふわけではないが、木立も時代がつき、わざとらしく仕立てたのではなく(自然のまま)になつてゐる(庭の草も、深い趣があるやうに見え、簀子や透垣の位置恰好も面白く、一寸置いてある手道具も、昔が思ひ出されるやうな古雅なもので、いかにもよく落ち着いてゐるなどは、奥床しく見えるものである。

〔備考〕

- (1) つきづきしく——家の建て方、庭の造り方などよく釣合がとれてゐること、一説は「身分に相應しく」の意に取つてもよい。
- (2) 假のやどり——佛教に此の世は假の宿といふ。家も一時生存する間のホンの假寓。
- (3) よき人——貴人のことだが、作者愛好は、よく物の情趣を解してゐる人の意に用ひる。
- (4) 今めかしく——現代式に、當世風に。
- (5) 木立もの奮りて——庭の植込が、時代がつきさびの出でゐること。
- (6) わざとならぬ——態々人工的に手を加へたのでなく、自然なこと。
- (7) 簀子——(スノコと讀む)細い枝又は竹を横に並べ、雨や霧のたまらぬやうに、枝と枝との間を少しづつ透かして張つた縁側のこと。唯縁側のことにも云ふやうになつた。
- (8) 透垣——(スイガイと讀む)竹又は木で間を透かして造つた目の荒い垣。四ツ目垣など。
- (9) うちある調度——何気なく一寸置いてある手道具。例へば扇だとか、硯箱などが、そこらに一寸置いてあるのだ。
- (10) 心にくし——實際に憎むのではない。心憎きまでに奥床しいといふ意味で、「ゆかし」よりも強い言ひ方だ。



〔批評〕「かりのやどりと思へど」といふ所では作者の佛教思想を伺ふことが出来るが、又理想的な家屋は「興あるものなれ」と云つて、以下上品な情緒を解した人の家屋の奥床しさを述べてゐる。彼は「今めかしくきらゝかな」のは俗慮と見る。ものよりて、わざとならぬ」のを愛し、「むかし覺えてやすらかなのを極度にゆかしがるのである。爾ちその思想は勝寂、古雅、自然を愛して、豪華、富貴風、入玉を持つるといふ傾向である。これが純粹の日本趣味なのである。なほ彼は此の書を彼の書と見て、一切を捨てゝゐるかも知れぬが、第三者の眺める態度で、物の美態を味ふことだけは失はないのである。

〔解答〕

〔批評〕内容の批評といふことは「文」にあらはれてゐる要諦、思想の傾向、作者の性格等を指摘して、それに自分の感應を加へる」といふ位に心得てよろしいのです。今後の試験問題はこの「批評」を問はれる所まで進むべきであります。

二二 次の文を解釋せよ。

(京都師二部)

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくる事なし。あるじなき所には、道も入みだりに立入り、狐鼻やうのものも人げにせかれねば、所えがほに入りすみ

こたまなどいふけしからの形もあらはるゝものなり。又鏡には色・形なき故に、よるづのかげ来りてうつる。かがみに色・形あらましかばうつらざらまし。虚空よく物を容る。我等の心に念念のほしきまゝに來り浮ぶも心といふものゝなきにやあらん。心にぬしあらましかば胸のうちにてこぼくの事は入り來らざらまし。(徒然草)

〔解答〕

住む主のある家には、用のない人が勝手自由にはいつて來ることはない。あき家には、通行人がむやみに立ち入り、(おまけに)狐や鼻のやうなものも、人のけはひに邪魔されないから、我が物類に遣入り込んで住み、木魂などいふ奇怪異形のものも現はれるものである。又鏡の面には、色や形がないから、萬物何物の影でも來てうつるのである。鏡に色や形があつたなら映らないであらう。又虚空はよく物を容れる。(かう云ふわけであつて見れば)我々の心にいろ／＼の欲念が勝手に來て浮ぶのも、(眞の)心といふ主人公がないためであらう。心に主人公があつてしつかりとして居れば、胸の中に澤山の妄念は遣入つて來ないであらう。

〔解答〕

〔評釋〕 ●すゞろなる人——「すゞろ」は漫然の義で、用のない人。●人げ——人間の居る氣はひ。●せかれ



れば——「せく」はせきさめる義、妨げられないから。●所得顔に——俺がこの主人だ云つたやうに得意然と。●木魂——山彦。こゝは古木の輪が化した妖怪を云ふ。●怪しからぬ——怪しき同意、變態な。●あらましかば——「ましか」は推量の助動詞「まし」の已然形「あつたならば」と譯する。●虚空——空中の事だが、こゝは全く物の存在せぬ空間のこと。●念々——多くの雑念。「時々刻々」の意にも用ひるから能くして置きなさい。

〔補題〕○「心といふものゝなきにやあらん。」の「心」は心の主即ち精神を統一する主體の意と解するがよいと思ひます。これも文の前後の關係からかく解するのです。○家と鏡と虚空の三つの譬喩を以て巧に心法を述べた名文とされてゐます。○徒然草二百三十五段に出てゐます。○なほもう一つ今年同様の文が次のやうな問題として東京青山師範二部に出てゐるので面白いと思ひました。

三三 左ノ文ヲ讀ミ文後ノ問ニ答ヘヨ。

(東京青山師範二部)

主ある家にはすゞろなる人心のまゝに入り來ることなし主なき所には道行人みだりに立ち入り狐鼻やうのものも人氣にせかれねば所得顔に入り住みこたまなどいふけしからの形も現はるゝものなり又鏡には色彩なき故に萬の影來りてうつる鏡に色彩あらましかばうつらざらまし虚空よく物を容る我等が心に念々のほしきまゝに來り浮ぶも心といふものゝなきにやあらむ心に主あらましかば胸の中にそこばくのこと

は入り來らざらまし。

問 (1) 傍線の箇所を解釋せよ。

(2) 文中に如何なる譬喩があるか説明せよ。

(3) 此の文の主旨を極簡単に述べよ。

解答

(1) 1. 人氣にせかれねば——人のけはひに妨げられないから。「人氣」とは人間の居る氣はい。

「せかれ」とは塞かれる義、遮り止められること。

2. そこばくのことはいろいろの雜念は。「そこばく」とは、澤山といふこと。

(2) 主なき家。

鏡。何れも眞の心のない人間の胸中の譬喩である。

虚空。

道行人。

狐。鼻。木魂。皆眞の心なきものに起る妄念の譬喩である。

萬の影。物。

(3) 人間はしつかりした心の主人公即ち眞の心がなくてはならないといふのである。



【補註】この文の主旨については古來いろいろに云はれてゐるのです。例へば心といふもの、法則を論じたものだとか、或は孟子の「求其放心」の工夫から思ひついて心に主を失つてはならぬことを訓へたものだとか、新しい説では「自分自らが信仰に安住しようとしても、一方には絶ちがたい人間性がある。それに対する無意識の告白である。」といふやうな面白い説もあります。これは徒然草の一番初めに「心にうつるよしなしことを、そこはかとなく書きつゞければ狂しうこそ物狂はしけれ。」とある所などを考へ合せて一處尤だと思ひますが、兼好もこの所を書く頃は心が澄んでゐるやうです。やはり私の考へては人に信仰、師りの大切なことを自分の體驗の上から述べたものと思ひます。○この問題の出し方は適んでゐると思ひます。

二三 次の文に句讀點を施し、全文を平易な口語で解釋しなさい。

(東京女師二部)

心なしと見ゆるものもよき一言はいふものなりある荒ゑびすの恐しげなるがたへの人にあひて御子はおはすやと問ひしに一人も持たずと答へしかばさては物のあはれは知り給はじ情なき御心にぞ物し給ふらんどいとおそろし子ゆゑにこそよろづのあはれは思ひ知らるれといひたりしさもありぬべきことなり。(徒然草)

【補註】

情愛を解せぬやうに見える者でも、(時に)感心な一言位はいふものである。或東國の田舎武士の恐さうな男が、側の人に向つて、「お子さんはおありですか」と問うたところ、「一人も持ちません。」と答へたので、(荒夷が)、「それでは、あなたは、物事の情合は御存じありますまい、なさない、お心でお出だらうと思へて、大變恐しいやうな氣持がいたします。子を持つてこそ真事の情合がわかりますからね。」と言つたのであつた。いかにも(これは)左様あるべき(尤な)事である。

【補註】

【語釋】●心なし——無知又は無情で、こゝでは没情漢の意。●荒ゑびす——關東の田舎武士を云つた當時の語。●荒い野蠻人と云ふのが原意。一説にアイヌ人の事といふのがある。●物し給ふ——「物す」は何に限らず事を爲す意、こゝでは「いらつしやる」と譯する。●言ひたりし——言つたのであつた。迷置止めの言ひ方。

【補註】○句讀點を施すことは紙面の關係上よしました。口語譯を見て下さればおわかりになります。人の言つたことには「」を附け、その言葉のおしまには「。」をつける。「知らるれといひたりし」の所で切つて「。」をつける人々、親切にして「、」をつける人々あります。今は「。」にしましたが、意味は餘情を残す言ひ方でありますから、その心持をあらはすために、「のであつた」を譯したのです。「」にすれば「いひたりし」は「」の「」が書いてあると見て、譯は「言つたのはいかにも」を續けることになります。



二〇 次ノ文ヲ解釋セヨ。

(岩手師範二部)

しづかに思へば、よろづに過ぎにし方のこひしさのみぞ、せん方なき。人しづまり  
てのち、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、残しおかじと思ふほうご  
など、やり捨つる中に、亡き人の手ならひ繪かきすさびたる、見出てたるこそ、た  
ゞその折の心地すれ。この頃在る人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつ  
の年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくて、か  
はらす久しき、いとかなし。(徒然草)

解答

じつと考へて見ると萬事につけ過去に属した事の無しさばかりは何とも抑へやうのないもので  
ある。人が寝静まつて(しんとした)後に、夜長の慰みに、何といふこともない(あれこれの)  
手道具などを取り片づけ、残して置くまいと思ふ反古などを破り捨ててゐるその中に、今は亡  
き人となつた人の、歌の書き散らしや、繪の慰み書きなどを見付け出した時は、唯もう目前に  
其の當時其の場合の光景に接するやうな心持がして(なつかしい。故人ばかりではなく)現に生

きてゐる人の書いたものでも、年数がたつてゐて「之はどんな時のだつたか、何時の年ののであ  
つたらう」と追想するのは、感慨の深いものである。自分の久しく持ち馴れた道具なども、一  
向無心で、相變らずいつまでも昔のまゝであるのは、(我が身の變化に引き比べて)、誠に哀愁の  
感に堪へない。

参考

【語釋】 ●せん方無き——上に「ぞ」とあるので「無し」が「無き」といふ連體形となる。意味は「どうとも  
爲やうがない。遺る瀬がない。」 ●長き夜——秋の夜長。「短夜」は夏の夜。 ●すさび——心通ひてその事  
に興を持つ。慰みにする。 ●何となき——あれやこれやの。 ●具足——道具のこと。こゝは繪巻のこと  
ではない。 ●とりしたため——整理する。 ●手習——今の習字といふのさ少し違ふ。これは「むだ書き」  
「暇み書き」のこと。 ●やり捨つる——破りすてる。 ●文だに——「文」は手紙、書いたもの。「だに」は  
助詞で、極端な一つを挙げて、他を推察せしめる意がある。口語「でも」に當る。

【補釋】 ○「たゞその折の心地すれ」……これには充分に「なつかしい」といふ心持がしみ出てゐます。補足  
してよい所です。 ○「手なれし具足なども、心もなくて、かはらす久しき、いとかなし」……自分の持ち  
物がいつまでも昔のまゝである、自然かなしくなるのは、そこを持つた當時などは考へ出すと同時に、  
今の自分の年のさりやう、身の變化が思ひ合されるからである。従つて「我が身の變化に引き比べて」の  
補足をする。それが解釋といふものであります。なほこの「かなし」は、一種の味のある悲哀美感である  
から唯「大そう戀しい」と譯するのは物足りない。「ほんたうに哀愁をそゝられる」とか「哀愁の感に堪へ



ない」さかすべきである。又文の前さの關係から見てもさう譯せればならぬ所です。

二五 左の文を解釋せよ。

(愛媛師範二部)

雪のおもしろう降りたりし朝人のがりいふべきことありて文をやるると雪のこと何ともいはざりし返事にこの雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどのひがくしからん人の仰せらるる事聞き入るべきかはかへすく口惜しき御心なりといひたりしこそをかしかりしか今はなき人なればかばかりのことも忘れがたし。(徒然草)

解答

前夜雪が降つて、面白い光景を呈した朝、人の所へ言つてやらねばならぬ用事があつて手紙をやるのに、雪の事は何とも云つてやらなかつた。(すると、それに對する向うからの)返事に、「此の雪を見てどう思ふかと(一筆お書になつても宜さうなものを)一筆もおつしやらない、それ程迄に無風流なお方の仰しやることは、承知の出来るものですか。どう考へても情ない御心です」と書いてよこしたのは、如何にも面白かつた。(ところが、その人も)今では此の世の人ではなくなつてゐるので、これ程の一寸した事も忘れられないのである。

参考

〔語釋〕 ●人のがり——人の許に。●いかゞ見る——「どう見て? 歌でも出来ませんか」の心持である。●ひがひがし——心がれぢけてゐる意であるが、こゝは「物の情趣を解しない無風流な人。●口惜しき——残念な、情ない。●をかしかりしか——「をかし」は笑ふ意でなく「面白い」。●興がある。●趣味がある」の意。しかは過去の助動詞「き」(口語の「たじ」の已然形である。上に「こそ」の係がある爲め、斯く「しか」で受けたので。これをうっかり「をかしかりしが、今は亡き云々」と讀みあやまる。また「か」とあるから疑問の意だと思ひやすい。

〔指導〕 ○筋の複雑な文だから、先づ荒筋を考へなさい。或る人に手紙をやつた。その返事は「どこからどこまでか」を考へて、その返事が面白かつた。その人が今は死んでゐない。……かくして主客を明かにするため「先方から」といふ語を補つて見る。するさ「をかしかりしか」までの間を切るにはどうしても「何ともいはざりし」の所がよいとわかりませう。この際、全體をよく考へないで先方からの返事は「この雪いかゞ見る」だけだと思ひやすい。○「ひがくしからん」……これを「無風流であらう人」と譯してゐる本があるが、いつも云ふ如く、この場合の「ん」にあたる語法は口語にない「無風流である」即ち「無風流な妙方」とすべきであります。

二六 左ノ文ヲ通釋セヨ。

(大分師範二部)

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび、行きかひて、花やかなりしあたかも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃



李ものいはねば、誰と共にか昔を語らん、(徒然草)

〔解答〕

飛鳥川の淵と瀬とは(いつもよく變るといふ譬があるが、その譬のやうに)誠に定めぬ世であるから、時日はどんとどんと移り物事は消え去り、楽しみは悲しみとなり、悲しみは楽しみと代り、華美な邸宅のあつた邊も、人の住まぬ荒野となり、(たまたま)昔ながらの家があるかと思へば、中に住む人間が變つてしまつてゐる。桃や李は(今も變らず咲いて居るにしても、無情無心)物を云はないから、誰を話相手に昔を語り合はうぞ。(誰も話相手は居りはしない)。

〔参考〕

〔語釋〕 ●飛鳥川云々——古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」とある。この歌から、飛鳥川がよく變ることが世の無常に譬へられて、有名になつてゐる。●世にし——「し」は意を強める意の助詞。●時移り——時日が過ぎて轉變する。●たのしびかなしび——「び」は「み」に通ずる。●行きかひて——行き違ふ意で、樂しみが行くさ次には悲しみが来る。といふのだ。●野ら——「ら」は接尾語と云つて軽く通へて云ふ語。「野」といふのと同義。●人あらたまりぬ。——人がかかつてしまつてゐる。(これを人が變つ「た」とするのは誤りである) ●桃李云々——史記に「桃李不言、下自成蹊」嘗三品の時に「……桃李不言、春華暮、煙霞無聲、勝音難測」

〔推察〕この文では「飛鳥川の淵瀬」桃李ものいはねば」の解し方で上手に譯する人否々がよくわかる所で

す。又受験者は大抵「變らぬ住家は人があらたまつた」といふ位の所ですまして置きますから少しの注意と解法を心得て居れば他に勝れた答案が出来るのです。

二七 次ノ文ノ傍線ノ所ヲ説明セヨ。

(折木女師二部)

法顯三藏の、天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲み、病に臥しては漢の食を願ひ給ひけることを聞きて、「さばかりの人の、むげにこそ、心よわきけしきを、人の國にて見え給ひけれ」と、人のいひしに、弘融僧都、「優になさけありける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にく、おぼえしか。(徒然草)

- (イ) (誰ヲサスカ)
- (ロ) (ドユカ)
- (ハ) (誰ガイツタノカ)
- (ニ) (オボエシ人ハ誰カ)

〔解答〕

(イ)「あれ程の偉い人が」の意味で、法顯三藏を指す。



- (ロ) 「人の國」とは他人の國、即ち他國での意で、天然を指す。
- (ハ) 「或る人が言つた所が」の意で、三藏の事を聞いた人である。
- (ニ) 「心にくい程に床しさを感じた」の意で、作者兼好がさう感じた。

参考

〔通解〕 法顯三藏が、天然に渡つて故郷の支那の風を見ては故郷を思ひ出して悲しがり、病氣で寢て居ては、本國の食物を食ひ度いと思ひなされた。この事を聞いて、或る人が「それほどの人が馬鹿に氣の弱いや、餘所の國で人に見せなかつたものだ」と云つたところ、弘融僧都が「いや、優しい情のある人だな」と評したのは、世を捨てた法師のやうでもなく、よく人情の底を言ひ破つたもので誠に奥床しいと感じた。

〔推察〕 此の問題は「傍観の部を説明せよ」とあつて、又後に(イ)(ロ)(ニ)とそれより問が出てゐる。これは唯「説明せよ」では、肝要な聞き度い點を抜かして答へるので、態々念入に問を出したのでせう。こんな場合、受取者としては、説明を簡にして、問の答をして置くといふやり方がよろしいと思ひます。

〔批評〕 「心弱き氣色を人の國にて見え給ひけれ」と云つた人は、普通の世間の人を代表したものである。即ち僧侶とし云へば、更に人間味に乏しいもの、枯木冷灰のやうなものさきめてゐる人達である。然るに眞の偉い僧はさうではない。一面に超世間、超人間で、又一面は人情味、温情の流露する趣がなくてはならぬ。法師に入り法師を出なくてはならぬ。三藏、弘融、兼好は共にこの兩面を備へてゐた偉い僧である。故郷の物を敬しめる心持、故郷の食味をなつかしむ無持の中には眞情の流露するものを見る。誠に有難い事だ。

二八 左の文を解釋しなさい。

(宮崎女師二部)

よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなくあまたの中にうち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひてもいたく興せぬと、興なき事をいひてもよく笑ふにぞ、品のほど測られぬべき。(徒然草)

解説

上品な人の話をするのは、多人數の中でも、(その中の)一人に向つて話をする(と云つたやうな具合で、それ)を他の人も(床しさの餘り、自然聞くと云つた風になるのである。(所が)下品な人は誰を相手ともなく、大勢の中へ乗り出して、(現に)見て居る事のやうに語りなすのだから、(座中)皆一緒になつて笑ひ騒ぐ、(それが、非常に亂りがはしい。(すべて人といふものは、)面白いことを云つても、ひどく面白がらないのと、面白くないことを云つても、よく笑ひこけるのとで、(其の人の)品位の高下が測り知られるものである。

参考



〔解説〕 徒然草五十六段に出てゐます。講話のし方で人品の高下が判るから氣をつけることだといふのです。  
 〔語釋〕 ●よき人。——善人悪人の善人ではない。品のよい人の意。●罵る。——又イワイ罵ぐことで、今の罵言ではない。●ちうがはし。——「亂がはし」でやかましい。●をかしき事。——面白い事で、笑ふの意でない。●いたく興ぜぬ。少しは興するが矢鱈には興しないので、一寸微笑して居る位のことである。●測られぬべき。——「られ」は可能「ぬ」は完了「べき」は推量だが「ものだ」と譯するから直譯すれば「測ることが出来て了ふものだ」となる。

〔推察〕 ○おのづから人も聞くにこそあれ。——「一人に向つて話す。それ以外のそばの人」といふ意をはつきり解くことが大切です。

二九 左ノ二文中傍線アル所ヲ摘出シテ解釋シ、更ニ全文ヲ通解スベシ。(鳥取女師二部)

かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路をはしらば則ち狂人なり、悪人のまねとて人を殺さば悪人なり、驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢を學ばんを賢といふべし。(徒然草)

解答

〔語釋〕 ○驥を學ぶ。——驥の眞似をする馬。驥とは一日に千里を行く名馬であるから自分も千里行かうと努力する馬。

○舜の徒。——舜の仲間。舜とは支那上代の聖天子であるから「舜の仲間」といふことは「聖人」といふ意になる。

○賢といふべし。——賢人と云ふべきである。……云つてよい。

〔通解〕 假にも悪人を眞似てはならぬ。狂人の眞似だと云つて往來を走ると、眞似の狂人が本當の狂人も同様。悪人の眞似だと云つて人を殺したなら、矢張り悪人である。(之に反して) 千里の名馬を眞似する馬は矢張り千里の名馬の類である。舜の聖徳を學ぶものは(たとへ小人でもつまり)舜の仲間である。偽つてでも賢を學ぶ者は賢人と云つてよい。

参考

〔解説〕 徒然草八十五段に出てゐます。結句の「偽りても賢を學ばんを賢といふべし。」が文の要點であります。

〔語釋〕 「學ばん」とだけある場合は「學ぼう」と譯するが、本文の如き「學ばんを」といふ場合は「學ぶ者を」と譯すべきはこれまで屢々説いた。それから「驥」とか「舜」とかを知らぬ場合でも、文の照應上、前の「狂人」、「悪人」に對して、これは「善」に屬するものであるだけにはわかるのです。

三〇 次の文を通釋せよ。(千葉師二部)

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かな



る苔の細道を踏み別けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ寛の雫ならではつゆおとなふものなし。閑伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほごに、彼方の庭に大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ少しことさめて、この木なかなましかばと覚えしか。(徒然草)

解説

十月の頃、栗栖野といふ所を通つて、或る山里に尋ね入ることが御座いましたが、(其の途中) 遙かに長い苔の細道を(草)踏み別けて(行く)と云つたやうな所に、心細く住みついてゐる庵があるのです。(そこへ行つて見ると、それはそれは静かなもので)木の落葉に埋もれてゐる寛の雫の(幽かな音より)外には何も音づれるものもないのです。それでも、閑伽棚に菊や紅葉などが折り散らしてゐるのは、矢張り住む人があるからでせう。こんなに寂しくつても住めば住まれるものぢやワイと、感に打たれて見てゐると、向ふの庭に、大きな、枝の撓むほどになつた柑子の木が、(盗まれないやうに)周りを嚴重に圍うてありました、でちと興が醒めて、此の木がなかつたら(よからうになア)と感じたことでした。

参考

【語釋】 ●時無月——陰曆十月の異稱。 ●栗栖野——山城國宇治郡山科村栗栖野。 ●つゆ——ちつとも。少し。この場合は「何も」といふ譯の方が當ると思ふ。 ●閑伽棚——「アカゲナ」佛に奉る水を置く所。 ●菊、紅葉を折り散らしたる——佛に備へるためのもの。 ●さすがに——住む人のありさうでもない寂しい庵であるが「それでも」の意。 ●あはれけるよ——「ある」は「世にある」で生存の意。「ける」は過去の意でなく、感動の意味をもつ助動詞。「よ」は感動詞。それで「住めば住まれたよ」の譯はいけなしい。住めば住まれるものであるなア。住めば住まれるものぢやワイ」などさすべきだ。 ●あはれに——すべて物事の感興あるにいふ譯で、「物憂しく」の意ではない。 ●なからましかば——「ましか」はまだこの木が無かつた時を推量して「無かつたら」この意で、下に「よからまし」即ち「よからうに」の願意を含む語が略されてゐるから補足する。 ●覚えしか——「覚え」は感ずる意。「しか」は「き」といふ過去の助動詞の已然形で上に「圍ひたりしこそ」とある結びである。「感じたことだ」など譯するがよい。

【考釋】 ○柑子の木の柱もたわゝになりたるが——これは中古文によくある語法で「枝もたわゝになりたる柑子の木の」といふのが今の語法であるから、譯する時も「枝もたわむほどになつた柑子の木が」さすべきであります。柑子とは密柑のことです。○この文は初めこの庵主に全く共鳴した心持をあらはし、柑子の所に置つて、今迄の快い気分が少し破壊されたことを遺憾に思つたのですからそのつもりで譯すべきであります。

三一 次の文を解釋せよ。



老來りて初めて道を行せむと待つことなかれ。古き塚多くは是少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちに此の世を去らむとする時にこそ初めて過ぎぬる方の誤れる事は知らるれ。誤といふは他の事にあらず。速かにすべき事を緩くし、緩くすべき事を急ぎて、過ぎにし事のくやしきなり。其の時悔ゆとも甲斐あらんや。

〔譯本〕

(徒然草)

年老いてから佛道修業を始めようと考へて、徒に老境を待つてはならぬ。(といふのは)古い墓を見ると多くは少年の墓で、(人間はいつ死ぬかわからないものであるからだ)。(まだ)と油断をしてゐる中に思ひがけなく病氣などにかゝり、急に此の世を去らうとする時になつて、初めてこれまでのやり方の誤つてゐたことがわかるものだ。その誤りといふのは外ではない。急いでせねばならぬ(佛道修業の如きを)後廻しにし、後廻しにすべき(世間日常の俗事)を急いでして、(本末先後轉倒の生活をした)過去のやり方が悔まれるものである。(それが誤りだといふのだ)。死に際に後悔したとて何の甲斐があるものか。

〔譯本〕

〔語釋〕 ●老來りて云々——寒山の時に、「莫<sup>レ</sup>待<sup>テ</sup>老<sup>シ</sup>來<sup>ル</sup>ニ方<sup>ニ</sup>學<sup>ブ</sup>道<sup>ヲ</sup>古<sup>ク</sup>墳<sup>多<sup>ク</sup></sup>是<sup>レ</sup>少年<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>」さあるを取つて言つたのである。●道——こゝでは「佛道」の意であることは全文體の上からわかる。●知らるれ——自然、悟れる。●其の時——臨終の時。

〔指點〕 緩くすべき事を急ぎて、——「急ぎて」の所で一旦意味を切るがよい。「ゆつくりと後廻しにしてもよい事を急いでやつて」の意。この文なども省略の部分が多いから補足して解釋する所が多いやうです。よく味つて下さい。

三三

人はかたちありさまのすぐれたらんこそあらまほしけれものうちいたる聞きにくかなす愛敬ありことは多からぬこそ飽かずむかはまほしけれめでたしと見る人の心劣りせらるゝ本性見えんこそくちをしかるべけれしなかたちこそ生れつきたらめ心はなとか賢きより賢きにも移さば移らざらん。(徒然草)

右の文について次の間に答へなさい。

- (1) 全文を正しく口譯しなさい。
- (2) 要旨を簡潔に述べて批評を加へなさい。

〔譯本〕



(1) 人は容貌風采の立派であるといふこと、それは望ましい事である。何か一寸物を言うたのでも、聞き心地がよく、愛敬があつて、(而も)多辯ではない、(さう云ふ人とは)飽きる事なくいつまでも対談してゐたいものだ。(所が)風采などが立派だと思つて(敬意を表して)見てゐた人が、何かのはずみに、今迄の尊敬の念も薄らぐやうな卑しい本性が見えるやうなことがあるのは、誠に遺憾なことである。人品や容貌、それは生れつきで、どうにも出来ないであらうが、心はどうして、賢い上にもなほ賢くすることが、しようと思へば出来ないことがあらうか。(きつと出来るんだ)。

(2) 「風采の優秀なのは望ましい。然し、そのみではいけない。心の修業が大切である。」といふのが要旨である。風采などはどうでもよいとは言はない。やはりなるべくは風采も立派なのがよいといふのである。そこに作者の豊かな人間味さはやかな風采が何はれて氣持がよい。然し、それは生れつきだからどうしようもない」と云つて、望まれぬものを無理に望まうとするやうな愚痴は少しも持たないのである。「心はなか賢きにも移らざらん」論旨の中心がこゝにある。これは望み得られるもので而も絶對至上のものである。作者の精神主義の心持を見ることが出来る。文章もよく、教訓にもなる。

【語釋】 ●すぐれたらん——「たらん」は口語に直譯すれば「すぐれてゐるだらう」「すぐれてゐよう」となるが今日ではこの場合の「ん」に當る語法はないから、單に「すぐれてゐる」と譯するがよい。これは前にも云つてゐる。●物うち言ひたる——「うち」は「ちよつと」などの意を添へる接頭語である。前に「うちある調度」と云ふのがあつた。「一寸置いてある道具」と譯する。●愛敬——「アイヤヤ」あいそのよいこと。愛嬌と同。●心考りせらるゝ本性——見かけによらず案外ゆかしさのない心根。●見えんこそ——この「ん」も「すぐれたらん」の「ん」と同様で「見えるのは」と譯する。●生れつきたらめ——「たら」は「である」。「め」は「よう」と譯する。従つて「生れついでめよう」となる。

三三 次の文を解釋なさい。

朝夕へだてなく馴れたる人のともある時われに心をおきひきつくろへるさまに見ゆるこそ今更かくやはなどいふ人もありぬべけれどなほげにげにしくよき人かなどぞおほゆるうとき人のうちとけたることなどいひたるまたよしと思ひつきぬべし。

(徒然草)

いつも心おきなく馴れ親しんでゐる人が、どうかした時に、氣がねをし、改まつた様子に見えることがある。その場合「(隔てのない仲で、)今更そんなに儀式ばらんでも宜からう」などと云



ふ人もあらうけれど、(私は、そんな人を)矢張り誠實な品位のある人だと思ふ。(又反對に日頃は)さう親しくない人だが、(ふとした時に)打ち明けた話などする(場合がある)。これも亦よいと、その時から親しみ心がつくやうになるだらう。

【参考】

【語釋】 ●ともある時——ふとした時。「こ」は「ひよつこ」の意。「友ある時」などと誤つてはならぬ。「とある家」の「こ」も同様。●かくやは——かく他人めいた様子をしてよからう。「やは」は反語。●有りぬべけれど——「有るべけれど」と同じ調をしてよろしい。「ぬ」があれば語氣が強く確實性を帯びた言ひ方となる。●なほ——やはり。●げにげにしく——眞面目で。下の「人」の修飾語。●よき人——上品な人。(善人といふ意ではない。前述した。)●うさき人——「へだてなく馴れたる人」に對して云つたので「朝夕」の語を補うて解くがよろしい。●打ちさけたる事——前の「心おき、ひきつくるへる」に對してあるから上に「ともあるさき」の語を補うて解くがよい。●思ひつき——思ひついて忘れられぬさきいふので「思ふ心が起る」意。「思ひあたる」とする説に従へば、「この人もよい人だつたのださ氣づくだらう」となるが今は取りかゝれる。

【指釋】 この文では特に脚中( )の中、即ち補足すべき程度呼吸をよく呑みこんで下さい。本文を離れぬやうに而も本文の眞意を第三者に傳へる態度で譯さない。次に示す問題は「思ひつく」といふ語もあるし、内容も文章もよく出来て、青年の教訓とするにも足る。

三 左の文の口譯をなし、要旨を述べなさい。

萬のどがあらじと思はゞ、何事にも誠ありて、人をわかす、うやうやしく、言葉少かじんには如かじ。男女老少、皆さる人こそ宜けれども、殊に若く形よき人の、言うるはしきは、忘れ難く、思ひつかるゝものなり。萬のどがは馴れたるさまに上手めき、所えたるけしきして、人をないがしろにするにあり。(徒然草)

【解答】

【語釋】 萬事につけて過失のないやうにと思ふならば、何事にも誠實で、相手に區別を置かず一様に恭しく、言葉敷を少くするに越したことはない。男も女も老人も若いものも、皆さうしてゐる人がよいのだけれど、取りわけ若く容貌の勝れた人の言葉遣ひが立派にきちんとしたのは、深く胸裏に印象が残つて心を引きつけるものである。すべて過失は、其の道に馴れた様子を以て、上手ぶつて、得意な風をして、人を輕蔑するから起るのである。

【要旨】 誠、恭、寡言であれ、上手ぶつて人を輕蔑しては過のもとだと戒しめたものである。

【参考】

【語釋】 ●さがあらじ——過失のないやうにしよう。多くの場合「じ」は「まい」を譯すがこれを「過失が



「あるまい」と譯しては不完全だ。●さる人——「然ある人」といふので、説、辯、軍曹の人を指す。●言うるはしきは——「うるはし」は例により「端正」さか「ちやんとして居る」さかの意。●思ひつかる——自然さ心がその人にしみついて離れられぬやうになる。

三五 次の文の解釋をなせ。

世に語り傳ふる事、まことはあいなきにや、多くはそらごとなり。あるにも過ぎて人は物を言ひなすに、まして年月過ぎ、境も隔りぬれば、云ひたきまゝに語りなして筆にも書きとめぬれば、やがて定りぬ。(徒然草)

【解説】

【解説】世間で語り傳へてゐることは、本當の事は面白味がないからか知ら、大抵はうそごとである。人は物事を實際以上に大きく作つて言ふものであるのに、まして年月がたち、所も隔り(遠い國のことになつて)しまふと、言ひたい放題に語りたてゝ、(そればかりか)書物にも(扇機に針小棒大に)書きとつてしまふのだから、誇張がそのまま事實ときまつてしまふのである。

【参考】

【語釋】●まことはあいなきにや——「あいなき」は「つまらぬ、興味が無い」の意。「眞實の事は興味なきにや

あらん」である。●やがて——「すぐ」そのまゝ。●定りぬ——定つてしまふ。これを「定つた」と譯してはよくない。「日も暮れぬ」の如きは「日も暮れた」としてよい。

三六 次の文を解釋し感想を述べよ。

我がため面目あるやうに云はれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。皆人の興するそらごとは、獨りさもなかりしものと言はんもせんなくて、聞き居たる程に、證人にさへなされて、いとど定りぬべし。(徒然草)

【解説】

【解説】(人間は)自分の名譽になるやうに言はれたうそは、(そんな名譽には自分は値せぬとは思ふが悪い氣持はせぬので)強ひて反對もしないものなのだ。(又、一座の人が)皆面白がつて聴くやうなうそごとは、自分一人だけ「さうぢやなかつたのに(あんなうそを)」と言ふのもむだなことなので、まあだまつて聞いてゐる、すると、(ネエあなたさうでしたねエ、あなたがよく知つてたわ)など、いつのまにか證人にさへなされていよ／＼(うそが事實だといふことに)きまつてしまふであらう。

【感想】「我がため面目あるやうに云はれぬるそらごとは」實際離れしも「いたくあらがはず」だ。



實によく人間内心の動きを捉へ得て微妙であると思ふ。かう云ふ所は自己内心の體驗の告白を聞かされてゐるやうに吾々の心を抉るのである。「皆人の興するそらごと」は「自分だけ一人反對しきれぬのも事實であるし、亦反對してもつまらないと思ふので、かくして結局、うそで固めた世の中になるのである。人間心理の動き方と、人間の弱さと、世相と、——この短い文の中にしつくりと織り込まれてゐると思ふ。その反面に虚言の罪の恐しさも暗示されてゐるやうに感じられる。

〔参考〕

〔語釋〕 ●我がため——護手自身のために。●いたくあらがはず——(少しはあらがふかも知れぬが)どこまでいふ風には争はぬのである。●皆人の興するそらごと——皆、虚言と知らないで面白がつてゐるのである。●いさご——「いさ」と云へば大層、非常に、誠に、など譯するが、「いさご」はもう少し程度の強い方で「愈々益々」、「更に一層」、「ふだんより強」などと譯する。

〔補註〕 「證人にさへなされて」の上に、「ホエあなたさうでしたれ云々」を補足したが、證人になされるさいふ意味がこれでよくわかるし、亦これ位補足するさその場面が躍動して来てよい譯文になります。この方法は或る程度まで應用して御覽なさい。

三七 左の文の大意を述べ、傍線の部の解釋をしなさい。

或人弓射ることをならふにもろ矢をたばさみて<sup>(1)</sup>的に向かふ師のいはく初心の人ふた三つの矢をもつことなかれ<sup>(2)</sup>後の矢をたのみて初の矢になほさりの心あり毎度たゞ得失なくこの一矢に定むべしと思へといふわづかに二つの矢師のまへにて一つをおろそかにせんと思はんや懈怠の心みづから知らずといへども師これを知るこのいましめ萬事にわたるべし道を學する人夕には朝あらんことを思ひ朝には夕あらんことを思ひて重ねてねんごろに修せんことを期す<sup>(3)</sup>いはんや一刹那のうちにおいて懈怠の心あることを知らんや何ぞたゞ今の一念においてたゞちにすることの甚だ難き。(徒然草)

〔解答〕

〔大意〕二本の矢を持つてゐると初の矢に氣をゆるめてかゝるからいけない。いつも只一本だと思つてやれと云つた。その師匠の戒は道を修學する時も同じだ。只今の一念に懸命になれ。

〔補註〕

- (1)二本の矢を手に挟み持つて的に向つた。
- (2)二本目の矢があるからと思つて、初の矢をおろそかにする心がある。(それがいけない)一度



毎に(そのやうな)輕重をつけずに「この一本で決着を付けよう」と思つて(射よ)。  
 (3)まして(朝夕どころか)一瞬々々の中に於て、怠慢心のある事などに氣附く筈があらうか。  
 どうして人は(かう思ひたつた)その瞬間に於て、即刻にその事に取りかゝることがそんな  
 に至難なのであらうか。

〔参考〕

〔書體〕 ●しる矢——二本の矢。的に向ふには、通常二本を一組として持つのが例であるが、こゝは初學者を戒しめたものである。●なほざり——等閑にする。ぞんざい。おろそかにする。●得失なく——この矢が當らなかつたら(失)、次の矢で返せば(得)よいといふやうな考を持つことなく。●擧立——「ゲダイ」「クダイ」なまける。ゆるみ心。●重れて——再び。もう一度。●刹那——一秒の七萬四千七十四分の一ださうだからとても短い時間のことである。梵語。●一念——刹那のこと。

〔指掌〕 傍線の部の解釋はその文に即して、そこにあてはまるやうに解釋することが大切ですよ。まして「の下に「朝夕どころか」を補足したのも其の一例であります。即ち文の流れの一部を断ち切つて示すやうに解釋せねばなりません。

平宣時朝臣、老の後、昔語り、最明寺入道、或宵の間に呼ばるゝことありしに、

やがてと申しながら、直垂のなくて、とかくせしほごに、又使來りて、直垂などの候はぬにや。夜なれば異様なりとも、疾く。とありしかば、なえたる直垂、内々のまゝにてまかりたりしに、鏡子に土器取り添へて、もて出でて此の酒を一人たうべがさうくしければ、申しつるなり。看こそ無けれ。人は静まりぬらん。さりのべき物や有ると、いづくまでも求め給へ。とありしかば、紙燭さして、隈々を求めし程に、臺所の棚に、小土器に味噌の少し附きたるを見出でて、これを求め得て候ふ。と申し、かば、事足りなん。とて、快く數献に及びて、奥に入られ侍りき。其の世には、斯くこそ侍りしかと申されき。(徒然草)

右の文について、

(1)大意を述べよ。

(2)傍線の部を説明せよ。

(3)鑑賞せよ。

〔解答〕

近古文



(一)〔大意〕最明寺入道(北條時頼)が或夜宣時を呼んで、土着の味噌を肴にして、主客共に快く酒を酌み交はしたことを、宣時が物語つたといふのである。

(二)〔補解〕(1)「すぐ」「早速」。こゝは宣時が入道の使に托して「すぐ参ります」と云つたのである。下に「参らん」が省いてあるのだ。

(2)「此の酒を自分一人でたべるのが何だか物足りぬので、お呼びしたわけだ。時に肴がないんだ。(もう)家の者は寝静まつてしまつたらう。(起すのも氣の毒だ)(君)何か肴になりさうなものはないかとどこまでも一つ探して来て呉れ給へ」……こゝは 入道が宣時に云ふ所。

(3)其の時代にはこのやうに質素で御座りましたよと申された。「其の世」とは入道生存の頃で、宣時のまだ若い時分。「申されき」は宣時が作者に向つて申されたと見てよい。誰かに話されたのを作者が又聞きしたのかも知れぬ。何れでもよい。

(三)〔鑑賞〕入道は、夜になつてから一日の疲れを慰さうと思つたのでせう。「背の間に呼ばるゝことありて」——「宣時と一ぱい飲まうかなア」と云ふ所です。「すぐ」と云ふ返事であつたがなかく宣時は来ない。「直垂などの候はぬにや」——「宣時の事だ直垂がなくて困つとるぢやらう」と仲々察しがい。「夜なれば異様なりとも」——晝は仲々律義だが打寛ぐ時には人にも大に許す態度が思はれる。「疾く」——語は簡だが味が深い。如何にも待ち兼ねてゐるといふ心からの歎

迎の意味が表はれてゐると思ひます。入道自ら「鏡子に土器取り添へて」持つて出る。肴は若「SUくまでも求め給へ」とは何といふ打ちとけた温い心持でありませう。「人は静まりぬらん」と家人を起すのを遠慮したのもゆかしいものです。「小土器に味噌の少しつきたる」それで「事足りなん」「あゝ結構く」と云ふ所だ。實に有難い場面である。入道のサラリとした質素なゆかしい全人格と、それに宣時の正直な所など、遺憾なく表現されて申分ないと思ひます。

〔参考〕

〔用語〕●朝臣——「アソシ」もさば能の名、後に四位の尊稱となつた。こゝも尊稱。若し「平朝臣」と云へば三位以上の人と云ふことになり、「平朝臣宣時」ならば五位といふことになる。●最妙寺入道——北條時頼が入道して最明寺に住んだから云ふ。●背の圓——「背」は大抵日が暮れて圓もない頃を云ふ。●呼ばるゝ——「お呼になる」の意。●直垂——「ヒメタレ」古は庶人の常服、當時は禮服となつてゐた。●無くて——なえたのはあつたけれど、餘所行のものがなかつたものさへある。時頼はそれを知つてゐたのだらう。●異様——行儀を繕はぬ有様。●うちく——のまゝにて——不漸着のまゝで。●まかり——もさば出の意だが「参り」の意に用ひてある。●鏡子——長い柄のついた金屬製の酒器。●土器——「カハラケ」素焼の酒器。●たうべんが——たべるのが。●さうくし。——淋しい。物足らぬ。●さりぬべき——然あるべきで、何かそれ相成な。何かまかりさうな。●いづくまでも——晝所でもどこでもよいからどこまでもの意。●紙燭——「シツタ」手で持つやうに出来てゐるさもしび。●さして——さまして。●つきたる——「引ツついてゐる」といふやうにも取れるが、それは少しおかしい。「つけてある」といふ意味で、味噌



が土器に盛つてあつたさ見る説がよい。●数献に及びて——数回盃を酌み交はして。●坊々こそ侍りしか  
——こんな風に（實業）でありましたよ。これを「こんな風でありましたか」などと疑問のやうに考へ誤  
つてはならぬ。

三九 次の文の全文を通釋し、大要を述べよ。

京に住む人、急ぎて東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行きて、其の益  
勝るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。こゝまで來着き  
ぬれば、此の事をば先づ言ひてん。日をさゝぬ事なれば、西山の事は、歸りて又こ  
そ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。之を恐るべし。

〔通釋〕

（徒然草）

〔通釋〕京に住む人が、用があつて急いで東山へ行つて、既に行きついて居たにしても、西山へ行  
つた方が益が多いと思ひついたら、（其の家の）門から引返して西山へ行くがよいのである。（折  
角）此處まで來着いて了つたんだから、此の用事をまゐ言うてしまはう。今日と誤つたことで  
ないから、西山の用事は（一旦）歸つて又思ひ立つとしよう。と考へるので（此の際の）一時の意

りが、やがてそのまま一生の怠りとなるのである。こゝを恐れ慎まねばならぬ。

〔大要〕この事が一番益が多いと思ひついたら他の事は犠牲にしても早速その事に取りかゝるべき  
だといふことを例を以て述べたのである。

〔参考〕

〔語釋〕●言ひてん——「てん」は「て」が完了、「ん」が未來の助動詞で、「言うてしまふ」となる。●日をさ  
ゝぬ事なれば——いつと日限を指し定めぬ事だから。いつてもよいのだからの意。●思ひ立ため——「め」  
は「む」未來の助動詞の已然形で、上の「こゝそ」の結び。思ひ立たう」となる。●即ち——それがそのまゝ、

四〇 左の文を通釋し、大意を三十字以内にて述べよ。

一生のうち、むねどあらまほしからむ事の中に、いづれか勝ると、よく思ひくらべ  
て、第一の事をあんじ定めて、その外は思ひすて、一事を勵むべし。一日の中、  
一時の中にも、あまたの事の來らむなかに、少しも益のまさらむことを營みて、そ  
の外をば打ち捨て、大事をいそぐべきなり。いづかたをも捨てじと心にとりもち  
ては、一事も成るべからず。（徒然草）



【譯文】

【譯文】一生の中に、主としてかうありたいと思ふ事の中で、どれが一番大事なことであらうと。よく考へくらべて第一にすべきことを思ひ定めて、その外は思ひきつて捨てよ。(定めた)一つの事を断むのがよいのである。一日の中、一時の中にも深山の事が起つて来る中に、少しでも益の多い方の事を爲して、其の外をば打ち捨てよ、第一番の大事を急いでやるのがよいのである。どれもこれも捨てまいとして、始終思ひ込んでゐては、一つの事も成就しはしない。

【参考】

【譯文】●むねごと——主として。第一に。●あらまほしからんこと——あつたかうしたいと思ふ事。爲しそげたいと思ふ事。●心にとりもちては——始終心にかけては。執着しては。

【譯文】「あらまほしからん事」「来る人中」は何れも今日では「あらまほしき事」「来る日」と云ふべき所をかく。執着に背ふのは當時の語法であつたのです。従つて、文法に注意して譯せよとある場合でも、この「ん」を口語「う」に譯して「来よう」とするのは却つて不自然な譯になります。

# 近世文



一 左の文を解釋せよ(本文を書き取る必要なし)

(埼玉師範二部)

心もどなき日敷かさなるまゝに、白河の關にかゝりて、旅心さだまりぬ。いかで都へと便り求めしものわりなり。中にもこの關は三關の一にして風塵の人心をさむ。秋風を耳に残し紅葉をおもかげにして青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙は芙蓉の花の咲き添ひて雪にも越ゆることぞする。(風の聲)

〔本〕

何となく心の落ちつかぬ旅の日敷も(つぎつぎと)風なるにつれて、(今)白川の關までやつて来たが(こゝでやつと)旅心も落ちついた。(で)何とかして都へ(こゝを越えたといふ音信をした)いものだと知るべき)つてを求めたのも尤もなことである。とりわけ此の白河の關は(有名な)三關の中の一つで、風流な人が感興を起す所である(から一層たよりがしたくなつたのである)こゝを歌つた能因法師の「秋風ぞ吹く」の歌は兼ねて聞いて居るし、源頼政の「紅葉散りしく」の歌も思ひ出して(なか／＼感興を惹くのであるが)(今見る)青葉の梢もやはり深い情趣がある。うつ木の花が白布のやうに眞白(であるの)に芙蓉の花が咲きそうてゐて、(丁度)雪の頃に越



えるやうな心地がすることである。

参考

【語釋】 ●心許なき——(1)待遠しくて何だか氣掛りな。(2)何だか確とせず頼りないやうな。大體この二通りの意味がある。此處の場合(2)と見るべきである。旅には出たが何だか旅心になりきれず落ちつかないであるのである。●いかで都へ——「たまりあらばいかで都へ告げやらむ今日白河の關はこえぬさ」といふ古歌を思ひつゝ、自分も都へ手紙を出したくなつたのだ。●理なり——今まではどうも心が落ちつかず一向音信をしようとも思はなかつたが白河の關に来て見るさ愈々旅心定まつてどれ一つ都へ音信でもして見ようかと思ふ氣になるのも尤もなことである。●風塵の人——詩人、歌人のやうな風流な人のこと。●秋風云々——能因法師「都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」。源賴政「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關」

【考釋】 ○「心許なき」の解は下の「旅心定りぬ」と對照して見ればおわかりになりませう。○この關を越えしことを「いかで都へ」告げやらん」と頼り求めしも理なり」とあるべきをかく省略して云ふのは俳人の文に多い例であります。○「風塵の人心を留む」る所なれば「きは都への頼り求めぬ。……とあるべき所。○秋風云々……古歌を知らぬ場合は「この關所を吹く秋風の音は定めて氣持よいものだらう」とその音を想像し、繪圖に彩る紅葉の光景は又格別だらうと思ひ浮べて愉快であるが、今見る青葉の梢もやはり情趣が深い」と解して差支ないと思ひます。○一體に省略が多いのですからその積りで解釋の手心を悟つて下さい。この文は俳人芭蕉翁の作です。

二 次の文をわかり易い口語に譯せよ。

明くれば又野中を行くそこに野飼の馬あり草刈るをのこに歎きよれば野夫といへどさすがに情しらのにはあらずいかがすべきやされどもこの野は縦横にわかれてうねくしく旅人の道ふみたがへんあやしう侍ればこの馬のどまるところにて返し給へどてかし侍りぬちひさきものふたり馬のあとしたひて走る。(奥の細道)

解答

夜が明けると、又野中の道を通つて行つた。そこに野に放ち飼ひしてある馬がある。(近くの)草刈り男のそばへ寄つて行つて、「どうか私に馬をお貸し下さいませんか。」と歎願すると、農夫ではあるが、それでもやはり人情を解しないわけではない。(その男が云ふに)、「さあ、どうしたらいいでせうか。(お貸してよいのですが)しかしこの野は(道が)縦横にわかれて、その上曲りくねつた道でね、旅人の道をふみ遠へるやうなことがありさうで御座いますから(御自分で馬をお操りなさるよりも、この馬の進むに任せて)馬の止る所(まで御乗りになり、そこ)から御返し下さいませ。」と言つて馬を貸してくれた。(さうして)小さな子供が二人、馬の後からつ



いで走つて来た。

参考

【語釋】 ●野中——こゝは那須野のことである。●野飼の馬——野原に放つて飼つてゐる馬。●歌きよれば——  
「こゝが貸してくれど近寄つて敷願する意。●野夫——農業牧畜などに従事する男。●いかゞすべき——  
「これは貸さうか貸すまいかとためらつたま考へるよりも、貸しても道を迷ひさうなので、」どうしたらよい  
てはうか」と云つたものと見度い。

【補註】この文では第一どこまでが地の文で、どこまでが野夫の言か、又作者の言かを明かにすることが大切  
であります。その次に筋の通るやうな譯をしないさい。この際なるべく野夫の心中を察し、同情して通譯を  
見出すことです。

三 次の文を通釋せよ。

三代の榮耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたにあり秀衡が跡は田野になりて登  
兼山の形を殘す先づ高館にのれば北土川南部より流る、大河なり衣川は和泉が  
城をめぐりて高館の下にて大河に落入る泰衡等が舊跡は衣ヶ關を隔て、南部口をさ  
し堅め夷をふせぐと見えたりさても義臣すぐつて此の城にこもり功名一時の盡とな

る國破れて山河あり城春にして草青みたりと笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍  
りぬ

夏草やつはものどもが夢のあと (夏の朝露)

解答

三代の間の榮華は、僅か一ねむりする間の、(夢のやうにはかなく消え失せて、)その居城の正門  
の跡は一里も手前にある。秀衡の居た館の跡は今や田野となつて、金兼山だけが、(昔のまゝの)  
形を殘してゐる。先づ高館に登つて見ると、北土川が(すぐ眼の下に見える。この河は)南嶽  
地方から流れて来る大河である。衣川は和泉が城をめぐつて、この高館の下で(北上の)大河  
に流れ込んでゐる。泰衡などの住んでゐた跡(を見るに、こゝは)衣ヶ關を(前にし、それを)  
隔て、南部からの入口を守りかため蝦夷(の侵入)を防いだものもやうに見える。さてま  
兼、忠義の臣ばかりが選り抜かれて此の(高館の)城にこもり、主のために身命を犠牲して守つたの  
であるが、今になつて見れば(彼等の)功名もほんの一時の(夢と消え、後は唯このやうに)盡  
となつて居る。「國は亡ばされて(昔ながらのものとは唯)山と河とがある(ばかり)。今や  
この(城あと)に春は来て、(後に)草のみは青々と生えてゐる。(何と人生興亡のはかなきや)。」と



(いふ意味の詩があるがなるほどなアと)(私はそこに)笠を打ち敷いて(腰をおろし)時間の永くたつまで感胸に迫り涙を流したことであつた。(私はこの時次のやうな意味の俳句を詠んだ。)この舊蹟に来て見ると、一ばいに青々と夏草が生ひ茂つてゐる。昔は此處に忠義な家來どもがたて籠つて、主君の爲に悪戦苦闘した所であるが、その功名も今は一時の夢のやうに消えてしまつてこの通りの有様である。何といふ人生のはかなさであらうぞ。

参考

〔路邊〕 ●三代——藤原清衡、基衡、秀衡。●金羅山——秀衡が山の形を富士山に似せて築き、雄雄の黄金の鐘を山上に埋めて、平泉の鎮護とした。●高館——秀衡の居城で、義経はこれに據つた。●南部——盛岡市附近以北を云ふ。●南部口——南部地方から平泉に入る口。●夷——「エビス」。「えぞ」のこと。●義臣——忠義な臣で、義経の臣を指す。國破れて云々——支那の唐の詩人杜甫の詩に「國破山河在、城春草木深」を思ひ浮べたものと見てよい。

〔指題〕 こゝは芭蕉の「奥の細道」中でも殊に名文でよく味つて見るべき所です。文中に歌や俳句のある場合の譯のし方は大抵こんな風のやり方とよからうと思ひます。どのやうに補足してあるか、よく( )の中を考察してほしい。こゝの俳句を文章になほしたのは後の方に出てゐますから御覽下さい。この文で特に氣をつく可きは「高館に上れば」として「大河なり」と結び、「この城にこもり」の次にすぐ「一時の難さなる」とある所で、補足しないでこのまゝ譯したのではいけません。

四 左の文中傍線ある所を抽出して解釋し、更に全文を通解すべし。(鳥取女師二部)

蝸牛はたゞ水にあるべき者の、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、ゆく先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。蟹の歩に蟹ふべき物こそなけれ。たゞ原、吉原を、駕籠に乗りて、富士を眺めゆく人にぞ似たる(編者)

解説

〔通解〕

(一) 水にあるべき者——(蝸牛は殻を有し貝の形をして居るから貝と同様に)水中に住んで居べき者。

(二) 雲水の安き——(行雲流水の如く諸國をめぐり歩く)行脚の安氣な(境地)。

(三) 蟹ふべき物——蟹へられる物。例に引かれる物。

〔通解〕 蝸牛は(其の恰好の上から、貝と同様)一寸、水中に居るのが本體のやうなやつだが、どうして(あのやうに)草葉の上に這ひ廻つてゐるんだらう。(おかしなやつだ)。(あいつ感心に)家は持つてゐるが、歩き廻る先々まで(家を)背負つて歩くのは、(雲水のやうであるが)雲水の安氣な(境地)には似もつかない。(次に)蟹の(變な)歩きぶりに蟹へられるやうな物は



とそもたいたア。たゞ一つ、原、吉原へんを御籠に乘つて、富士の山を眺めて行く人に似てゐる。

【雑事】

●たゞ一つ——これは同じにくいが、「たゞ一つ……だけは似てる」位の意である。●物こまなれば——そんな物はとてもないと強く云つたのだ。●原、吉原——富士の南麓、東海道に沿うた原の名。

【雑事】 續事作者の俳文であるが、香雪が多く、ユーウアに喜んでゐるからそのつもりで少し補うて譯せれば文を生かして現はすことが出来ない。次の文はやさしい例ですが、それでも補足する所があるので、よく氣をつけて下さい。

五 次の文を解釋せよ。

松樹のその木にもよらでいかてかく名を附けたるならむ毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて松を枯らし人にうとまら一つ在所に二人の八兵衛ありひとりは後生をわがひひとり後生を事とすこれ松樹のたぐひなるべし。(續事)

【雑事】

松樹の(名前)は、松の木にも居りもしないのに、どうして松樹などと云ふ名を附けたものであら

る。(ところが)毛の生えた氣味のわるい蟲に同じく松樹といふ名のついたのがあつて、松を食ひ枯らし、人からいやがられてゐる。同じ或る所に二人の八兵衛(といふ同名のもの)があつて、ひとりの方は來世の安樂を願うて(佛を信仰してゐたが)もうひとりの方は生物を殺すことばかりして(無情冷酷であつた)この二人のまるきり性質の異つてゐる所を見ると丁度今述べた二つの(違つた)松樹の類であらう。

【雑事】

●おななじき——同じい。氣味わるい。●在所——或る田舎。又は田舎にある故郷の意。

【雑事】 この文の解答の場合に「その木」さか、「かく名を」さか、「おなじき」さか云ふ所をそのままにしないで「松の木」「松樹」とやうに補してゐるものを書いて置く可きものです。

六 次の文を解釋せよ。

(岐阜女師二部)

花は春とこそいへれど秋もまためでたき花おほし。秋の花の久しきにたへてちりがてまるは、春の花の見るほどもなくしてはやくちるにまされり。(續事)

【雑事】

花は春(によい花が多い)と昔から言ひ來つてゐるが、秋もまた結構な花が多い。秋の花が長い



間持ちこたへてゐて容易に散らないのは、春の花の見る間もなく早く散つてしまふのよりもまさつてゐる。

【参考】

【語釋】 ●ちりがてなる——散り離くある。「がて」は「離く」の意。●たへて——持ちこたへる。「堪へて」で「絶えて」でない。●見るほどもなくして——ゆつくりと眺める期間もなくして。

【挿釋】 ○平易な文であるが、よくかうした文につまづきがあるものです。「花は春こそいへれど」を「花は春さうふけれど」では解釋になりませぬ。「めでたき」も「めでたい」では誤譯です。古文では「結構」、「よい」と譯すべきです。○この文は高等學校の入試に出た問題です。「樂訓」は貝原益軒の文です。

七 次の全文を通釋して要旨を簡単に記せ。

かたちうるはしく物よくいひよききの着てまればどに對しすがた言葉はすぐれて人のもてなしよくふるまひうるはしく人の目たつべきほどなれど古今の事にうとくかたこといひて人の耳にたてばすがた言葉のうるはしきもむなしくなり人に見おどされあさましく下さまに見ゆるはくちをし。(樂訓)

【解答】

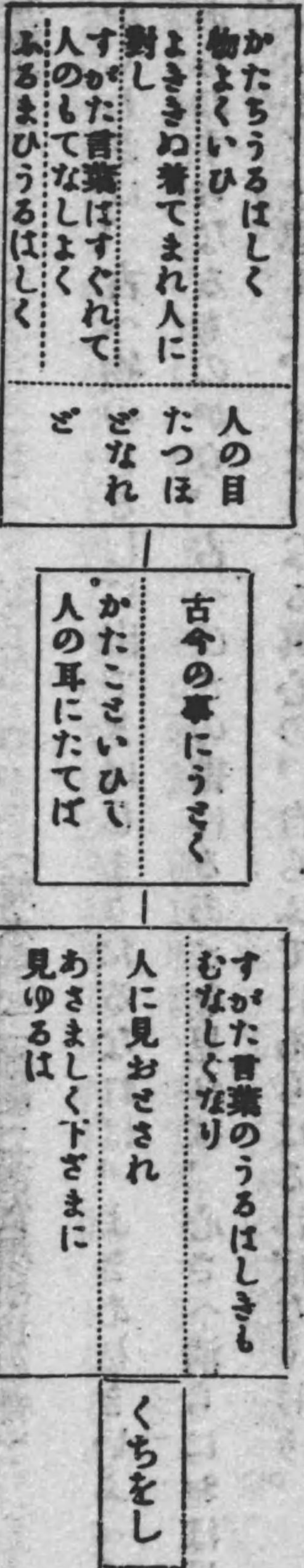
【通釋】 顔だちが立派で物を上手に云ひ、よい着物をきてお客に對し、様子や言葉がすぐれて人の應對が上手であり、動作が立派で、人の注目を惹くほどであつても、古今の事に通ぜず、間違つたことを云つて人の耳にさはると、折角の立派な様子や言葉も、何の甲斐もなくなり、人に見下げられ、あきれるほど下品な人のやうに見えるのは残念なことである。

【要旨】 人は古今の事に通じ間違つたことを云はぬやうでなくては駄目だと戒しめたのである。

【参考】

【語釋】 ●まれうど——「まれうど」に同じ「客人」のこと。●「かたちうるはしく」「すがたすぐれ」——「顔かたちやキチンと整うてゐる」のこ「からだ全體の有様がすうりさしてよい」のである。●「物よくいひ」「言葉すぐれ」——「うまいことを云ふ」のこ、「言葉遣ひがよい」のである。●かたこと——不完全な語。●あさましく——あきれるほど。ひどく。

【挿釋】 この文も、骨々筋がこたくして要旨の取りにくい所ですが、次のやうな組立であります。





八 阿彌せよ。

(熊本二、二師範二部實業學校の部)

手かくわざは、古へ物のしるしに出できはじまりたるなれば、よきあしきいふべくもあらぬすぢなるものから、古へびとの書けるあどを見れば、心さへ清らにおぼゆるはいかにと思ふに、すなほなる真心の、自らふでにあらはるればなりけり。

(加藤千庵)

解

字を書くことは、昔、物の目じるしとして出来始まつたものであるから、(字の)よしあしを(おぼこれ)云ふべきすぢのものではないながらも、古人の書いた筆跡を見ると、(自然その人の)心までも清いやうに思はれるのは、どう云ふわけかと考へて見るに、(それはその古人の)飾り氣のないまっすぐな真心が、自然と筆跡に表はれるによつてであるわい。

解

【阿彌】 ●物のしるし——忘れぬための目じるし。●ものから——ものながら。(二)ものであるから」と思つてはなぬ【心さへ清らに】——其の人の心までが清いやうに。

九 次の文を解釋せよ。

千里をへたて侍れど、こゝらの年月、まのあたり、かたらひかはし侍る心らせらるゝまんに、打ちつけなるものから、立ちかへる春のはぎ言聞え侍り。(加藤千庵)

解

遠く隔つては居りますが、長年の年月の間現在目の前で親しくおつきを合ひ申して居るやうな氣が登されますので、突然で(誠に矢張りでは)御座いますが、新年の御祝詞を申し上げます。

解

【阿彌】 ●こゝら——多く。多数。●打ちつけなる——突然な。●ものから——ものながら。こゝでは「突然ではありながら」となり「突然ですが」の意を含む。

一〇 左の文を解釋せよ。

(大阪天王寺師二部)

おのれ教子どもの爲に、早くよりこの物語(源氏物語)を讀解きて聞かすること教多かへりになりぬるをあたし書どもはかばかり長からぬだに、説くに倦む心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども聊かも倦む心出でず度ごとにはじ



めてよみたらん心地してめづらしくをかしくのみおぼゆるにもいみじくすぐれたる  
ほどは知られてかへすがへすめでたくなん。(鈴屋集)

解答

私は弟不達の爲に、すつと以前から、この源氏物語を講讀して聞かせることを幾度も繰り返したのであります。が、他の書物ですと、こんなに長く幾度も繰り返すのでなくてさへも、説明するのにも飽きる心もまじつて來るのであります。この(源氏物語)だけは、あれ程長い書物で(而も)長年月にわたつて(講義してゐても)、少しもいやだといふ心は起らず、一度は一度と始めて讀んでゐるやうな心地がして、珍らしく面白いとばかり感じるのであります。(これによつても、この書の「非常にすぐれてゐる程度が知られて、まことにまことに結構な書物である」と思ふこととであります。

参考

【語釋】 ●あまたかへり——幾回も。●あだし書——他の書物。●あだしこと——云ふは「他の事」の意。●めでたくなん——「めでたく」——愛でる意。愛賞する。見事な「なん」は「ぞ」「こそ」などと同じ助詞で、下に「ある」の省略されたもの。めでたいものである「即ち「結構な書物ではある」となるが、文の前の

關係から「結構な書物であると思ふ」と譯するがよい。

【指導】 こんなに次ぎ／＼と續く文を解釋する時には適當に切つた方が、解答文がはつきりして參ります。二ヶ所で切つて見ました。實際今日の口語文をこんなに長たらし／＼續けては悪文になります。

一 左の文を平易なる口語文に改め且傍線を施せる語を文法上より説明せよ。(札幌師範二部)  
よるづよりも手はよく書かまほしきわざなり歌よみ學問などする人はことに手あしくては心おごりせらるるをそれ何かは苦しからむといふもひとわたりことわりはさることながらなほあかすうちあはぬ心地ぞするや。(玉かつま)

解答

【口譯】 何事よりも、文字を書くといふことは、上手でありたいものである。歌を作つたり學問をしたりする人はとりわけ、文字が下手では、今迄ゆかしく思つてゐた折角の歌や學問までが、實際よりもつまらなく見られるものであるのに、「文字が下手だつて何の差支があらう。」といふ人もあるが、それも一應もつともな道理のやうに思はれるが、どうもやはり何だか物足りなく歌人たり學者たる人格に相應しないやうな氣持がするなア。

【文法】(1)を——助詞である。「のに」の意味をあらはす。即ち逆態の思想の場合に用ひる。



(2)何か——「何」は本来は代名詞。ここでは副詞。「か」は反語の意をあらはす助詞。「どうして……することがあるか、ありはしない。」となる。

(3)する——「する」は「す」「し」といふ行變格の動詞の連體形。「や」は咏嘆の意をあらはす助詞「するのよ」と譯してよす。

【参考】

●手——「手腹」の意で、文字をいふ。●まほし——口語の「たい」に當る。「まほし」の「く」が音略されたもので韻脚の意を表はす。●心おこりす——何事でもゆかしいと今迄思つてゐたのに、或事からふその人のあらが見えたりして手廻りも悪く、ゆかしさがなくなり劣つて見える。●それ何かは苦しからむ——それがどうして差支があらうか「少しも差支ない」と裏返る。反語である。「それは文字の下手なことを指す。●一わたり——一應は。●さることながら——然るべき事ながら。もつともではあるが。●あかす——物足りなく。満足しない意。●うちあはぬ——歌人、學者はその職業柄、文字が上手なのが相應しいものだ。従つて下手ではどうも職業上人柄に相應しくないと言ふのである。●心地ぞするや——「や」は咏嘆の意を表はす助詞で「ぞ」は意味を強く云つたものだ。「心地がまわることだわい。」

【注意】この問題はよく出る問題です。東京高師、東北大學農科、広島高女専攻科、専修等々。

一一 左の文を解釋すべし。

(廣島師二部)

近き世の人の歌も文も大方はよろしと見ゆるにもなほ僻事多きぞかしされどその遠へるよしを見知れる人はた世になければたゞかいなでにこゝかしこえんなる詞を  
使ひよしめきてよみなし書き散らしたるをばまことによしと見て人のもてはやし譽めたつれば心をやりてしたり顔すめるとかたはら痛くをこがましくさへぞ思はるる。(玉かつま)

【解答】

近代の人の作つた歌も文章も、大體はよいと見えるのだが、(よく見ると)やはり間違ひが多いなア。だが、その缺點を見分ける人がまた世にゐないのだから。(近代の人の)たゞほんのよい加減に、所々に美しい言葉を使ひ、いかにも勿體ぶつて詠んだ歌や書き散らした文を(その缺點を知らぬ)人が誠によいと見て激賞すると、(御本人は)大満足して得意顔をするやうであるが、(それなどは)ほんとに傍で見ると氣の毒で又馬鹿らしくさへ思はれるのである。

【参考】

●僻事——間違ひ。あやまり。●かいなでに——うはつらを「掻き搦で」の意で、「上すべり」「よい加



「讀」を譯する。●えんなる言葉——謂なる語で、優美な語句。美辭麗句のこと。●ましめて——仔細らしく。勿體ぶつて。●心をやり——満足すること。●したり顔——得意顔。●かたはらいたし——「飾りて見るのが苦痛である」この意で、「氣の毒」と譯する。●なごまし——「なご」は馬鹿といふ意で、「なごまし」は「馬鹿げである」と譯すればよい。「さしでがまし」を譯する場合もある。

〔指導〕この文を解くには先づ近代人の歌と文章の關係について述べてあることを考へ定めなさい。次に左表のやうな關係を明確に書き表はすことに努力することです。



受取者はよく「かいなでに」「よしめき」等の難語句の譯のみ苦心した揚句、よい加減に胡亂化し、却つて筋の通らぬ答案を作るやうであるが、一語二語はそのまゝとして置いても右の文の筋のはつきりした答案を認めることに骨を折つた方がよろしいのであります。

一三 全文を通譯せよ。

物學ぶともがら、物しり人にあひて物問ふに、ともすればまづ古書の中にも、よに難き事として誰も説き得ぬふしを、えり出で、問ふならひあるは、いとあぢきなき

わざなり。よく聞えたりと思ひて、心もとめぬことに、思ひの外なるひが心得の多かるものなれば、まづたやすきことをいく度もかへさひ考へ、問ひも明らかに、よく得たらん後にこそ、難きふしをば思ひかくべきわざなれ。(王かつま)

〔指導〕學問をする人々が博識の人に向つて質問をするのに、やゝもすると、先づ古書の中でも、非常に難解な事として、誰も解釋し得ない個所を選び出して尋ねるといふ風があるが、これは甚だつまらないことである。よく分つてゐると思つて、氣にもかけずに居る事に、案外な思ひちがへが澤山あるものであるから、先づたやすい事を幾度も繰り返し考へ人にも問ひ質して、充分會得した後に、(始めて)難解な個所を知らうと心がく可き事である。

〔語釋〕●ごらすれば——どうかすること。やゝもすれば。●よに——殊の外。格別。非常に。●あぢきなし——「味氣ナシ」から來た語で、三通りの意味がある。(一)「無益アアル」「詮ガナイ」「ツマラヌ」本文はこの意味。(二)「面白味ガナイ」。(三)「情ナイ」「ツライ」。●よく聞えたり——よく意味がわかつて居る。●ひが心得——間違つて覚えて居る。●かへさひ——「返す」といふ語が延びて「かへさふ」になり、その連用段を副詞として用ひたもの。●得たらん後——「明らか得たらん後」の意で「會得した後」さなる。「會得したらう後」などとせむこと。



一四 左の文を解釋せよ。

すべて新なる説を出すはいと大事なりいく度もかへさひ思ひてよくたしかなるより  
どころをどらへいづくまでもゆきどほりて違ふ所もなく動くまじきにあらすばたや  
すくは出すまじきわざなりその時にはうけはりてよしと思ふもほどへて後に今ひと  
たびよく思へばなほわろかりけりと我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

解答

(本居宣長)

一般に、新しい説を發表するといふことは、まことに重大な事である。幾度も繰り返し考へて  
充分に確實な根據をつかみ(その説が)どこまでも一貫して、くひ違ひの生ずる所なく、(どん  
なことにも)ぐらつくやうな事のないものでなくては、軽々しく發表してはならぬ事である。  
それを(發表する)時には、いゝ氣になつてこれで(大丈夫)よいと思つても、時が経つてから後、  
もう一度考へ直して見ると、「やはり間違つてゐるわい」と自分でさへも、自然に感付いて來る  
事が多いものであるよ。

参考

〔語釋〕 ●かへさひ——繰り返す意。 ●ゆきまほりて——論旨一貫して。 筋道が通つて。 ●違ふ所——矛盾す  
る點。 ●うけばる——我を張る。 いゝ氣になる。 ●我ながらに——他人が悪いと思ふのは勿論、その説を  
出した自分でさへこの意。 ●思ひならるゝ——自然ささう思ふやうになる。 即ち間違ひに氣がつくのである。

一五 左の文を解釋せよ。

すべてよき人といへどもまれにはことわりにかなはぬしわざもまじらざるにあらす  
あしき人といへどもよきしわざもまじるものにて生けるかぎりのしわざことごとくに  
よきあしき一かたに定まれる人はをさをさなきものなるをいかでかはただ一言一行  
によりてさだむべき。(本居宣長)

解答

一般に、善い人でも、(いつもきまつて善い事ばかりするとは限らぬ)稀には道理に合はぬ事を  
しないわけではない。 又悪い人でも、時には善い行爲もすることがあるもので、其の人の一生  
涯の行爲がすべて、善いか悪いかの一方に定つてゐる人といふものは、先づ殆どないものであ  
るのに、たゞ一つの言葉とか一つの行爲によつて、どうして(その人全體を善人か悪人かに)  
きめてしまふことが出来ようぞ。(出来るものではないのぢや)



参考

〔補遺〕これは確解の問題とは云へませんが、當然含んである意味は、解釋の際には文面に補足して出して置く可きものと思ひます。〔の中がそれです。かうすれば行き届いた答案と云ふことが出来ます。〕

一六 次の文を解釋せよ。

大かた、世の常にことなる新しき説を起す時には、よきあしきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者ににくまれそしらるるものなり。あるはをのがもとより據り來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるにすて、取り上げざるものもあり。

解説

一般に、世間の普通に言ふ説と違ふ所の、新奇な意見を出す時には、(その説の)よしあしにかゝはらず、先づ一通りは世の中の學者から、憎まれ悪く言はれるものである。それ等の人々のうちで、或人は自分の以前から基いて來た説と、非常に違つてゐるのを聞いては、新説のよしあしを味ひ考へもせず、始めから全く捨て、採用しない人もあるのである。

一七 次の文を解釋せよ。

げにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに従はむことのねたくて、よしともあしとも云はで、ただうけぬ顔して過ぐすたぐひもあり。あるは、ねたむ心のすすめるは、心にはよしとおもひながら、そのなかのきすをあながちにもとめ出で、すべてをいひけたむとかまふるものもあり。(本居宣長)

解説

或は、内心では、もつともだと思ふ點も津山ありながら、然しどうも近頃の人の言ひ出した説に従ふのが、残念で、其の説を善いとも悪いとも云はないで、唯同意しない顔付をしてそのまま通す連中も居る。或は、嫉妬心の一層ひどいものになると、内心には、その説を善いとは思ひながら、その中の缺點を無理に探し出して、その説の全部を否定しようと企てる人もある。

参考

〔語釋〕 ●始めより——あたまつから。 ●ひたぶるに——全く。 ●ものから——「ものながら」。「ものだけ」など。「モノダカラ」の意味に用ひられることは先づない。 ●さすがに——「しかし何と云つても」「やは



リ」などの意。今日は「有名ナダケアツテ」如何ニモ」などの意に用ひてゐる。●うけぬ顔——「承け容れぬ顔」の意で、「同意しない様子」を譯する。●いひけたむ——「けたむ」は「消サカ」打ち消さう。否定しよう。

一八 次の文をわかり易い口語に譯せよ。

常にかきかはす消息文なども文字よみ難くてはいひやるすぢゆきとほらすよむ人はた苦しみて頭かたぶけつ、かへさひ讀めどもつひによみえずなどしてはこ、讀みがたしとかへし問はんもさすがになめきやうなればただおしはかり心えては事たがひもするぞかし。(本居宣長)

解答

平生、人と遣り取りする手紙の文なども、文字が讀みにくくては、言つてやる事柄の趣が(向ふの人に)よく通らない。それを讀む人も亦苦しんで、頭を傾けくして、繰り返し讀んでもとう／＼讀めないやうなことがあつたりする。こんな時、「此處が讀めませぬ」と言つて、問ひ返すのも、やはり何だか無禮なやうで(それも出来ないから)たゞ當推量に合點しては、間違も生ずるものなんだよ。

参考

【語釋】 ●はた——「モマヤ」の意に取つてよい。「雲かはた霞か」といふ場合の如きは「アルヒハ」の意である。●かへさひよむ——繰り返し讀む。●さすがに——「親しい仲だもの、問返したつてよいとは云ふもの、ヤハリ」の意。「なんばなんでも」の譯は面白いと思ふ。●なめき——無禮な。●かし——「よ」「わい」「なア」などに當る。念を推し意を強めるのである。

一九 次の文の大意を書き傍線の部を解釋せよ。

(大阪池田師二部)

御館に入らせ御装束あらためさせたまへば、やがて大となぶらあまた照しか、げたり。今日のみちゆきづとゐてこと仰せたまふ。法師まわれとて、おましちかきところの一間なるどころのすのこにめされたり。大將殿見おこせたまひて、昔は藪姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものにおぼし、みて、身は黒くやつしたれど月花のなげきのほまれはもの、心なき吾妻人だに聞き知りたるぞ文字の數だに歌とのみ思ひしも、かうさしむかひては、もの、ふのまけじ心もあらずなりぬるぞ。八百日ゆく漢の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞ゆべく仰せたらうぶ。

(つとらぶみ)



〔解答〕

〔大意〕其の晩、燈火明るい一室で、大將殿（源頼朝）が法師（西行）を引見し、「お前は歌を詠むさうだが、お前の詠じた歌の話をして聞かせよ。」と仰せられた。その場面である。

〔補解〕

(1) 燈火を澤山照しかよげた。大將軍は近侍のものに、「今日の途中でのみやげもの、あの法師を比處へつれて来よ。」

(2) 上皇の御所にお仕へしてゐた人

(3) 月花に對して詠じた歌の名譽、即ち歌人としての（お前の）名譽は風雅心のない情感に乏しい（俺のやうな）關東人さへ聞いて知つてゐるのだよ。

(4) 澤山の日數をかけて歩いた長い／＼漢路の砂の中には玉として拾ひあげたものもあらう。とよことで、内意は、「長い長い旅の中にはいろ／＼感興を詠じた澤山の歌があつて、その中には立派な歌もあらう。」との意である。「眞砂」は歌、「玉」は其の中の名歌を指す。

〔参考〕

●やがて——直ぐ。そのまゝ。●藤姑射の山——支那で仙人の住むといふ想像上の山の名。我が國で

は上皇の御所を視し奉つて云ふので、仙洞御所といふのと同意。●おまし——御座。大將殿の坐つてゐられるところ。●すのこ——家の縁側。もとは竹又は細板で、雨水などのたまらぬ様に間をすかして作った縁。●見おこせ給ひて——（法師の方を）御覽になつて。●おぼしきみて——しみ／＼深く感じて。●身は黒くやつしたれど——身體は枯らなつて風塵の衣をきてゐるが。●仰せたまふ。——「仰せたまふ」に同。●大意の書き方はいろ／＼ありますが、こんな文では話の筋を要約して短く云へばよろしいのです。短く云つてあるがそれが、全文に行き渡るやうであれば結構であります。○文治の元年八月十五日、源頼朝が鶴ヶ岡八幡宮に参詣した時、西行が僧殿の垣のもとに跪いてゐたのを認めて、つれて歸つたのです。

二〇 次の文を通釋せよ。

二 西行法師人に語りていふ。右大將はまことにねぢけたる君なり。口に蜜したまへど心には針のおはするぞ。漢高の天度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆此の君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふ事を生れながら得させけん。只悲しむべきは神の御音の此の後やうやう衰へさせたまはん世の姿なるは。（眞實居士）

〔解答〕

〔通釋〕西行法師が人に語つていふのに。「右大將（頼朝）は、誠に心のひねくれた方だ。口ではうま



いことを言つて居られるが、内心にはおそろしいたくらみを持つて居られますぞ。漢の高祖劉邦のやうな大きな度量と又三國時代の魏の曹操のやうな智慧策略があるやうに見えるので、天下の人が皆この方の支配下に入れられてしまつてゐるのは、我がみ佛の與へて下さる仕合せといふものを、生れながら持つて居らつしやつたのでせう（實はそれほどの人物ではないのにそれは仕方ないとしても）只悲しいことには神の御子孫たる皇室がこの後だんだんお衰へ遊ばすであらうと思はれる世の有様でありますわい。」（と話した。）

二一 次ノ文ヲ讀ンデ大意ヲ述べ傍線ノ箇所ヲ解釋セヨ。

（京都女師二部）

あはれ、世のならばしこそはかなき物はあなれ。高き賤しき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは輪にて、唯足らばぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢の嵐をうらみ、月をめづるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはそのがるべき。林にやどる鶴鶴は、僅なる小枝の影をのみたのみ、流に水をもとむる鼠はたゞ腹にみたすにすぎず」とこそ古人もいひつれ。かゝることわりをだに分たば限あるこの世に、限なきことを思ふべきかは。（事後集）

解答

〔大意〕世の中の事は不満足な事ばかりだ。（これは餘り怨が深すぎるからだ）。鶴鶴には僅かな小枝、鼠には腹一ぱいの水しか必要はないのだといふ道理が分つて見ればさう怨の深いことも考へはせぬ。

〔補解〕

- (1) 或は高貴に、或は下賤に、人々の身分は千差萬別だけれど、各自充分満足な事だけだといふのは稀で、唯もう飽き足らないことばかりが多いものではある。春の花を慕つては梢を吹いて花を散らす嵐を恨み、秋の月を賞するにつけては、峰にかゝつて月をかくす雲を厭ふといふやうなことは誰のがれ得ようか、誰もその不満からのがれることは出来ない。
- (2) このやうな道理さへ知り辨へたならば、限りあるこの人生に、限らない事を得ようなどと思ふものか、思ひはしないさ。

参考

〔語釋〕 ●あはれ——あゝ。感嘆の語。●ならばし——しきたり、慣例。此處は世の一般の有様の意。●はかなし——あてにならない、頼みにならない意。●あなれ——「あるなれ」の「る」の省かれたもの。●品——身



分地位。●おのがじし——めい／＼。●心ゆくばかりなるは、——これで満足だと思ふほどのことは。●足らぬ事——足りぬこと、不足な事。●花を思ふ——次句「目をめぐ」に對して「花を思ふ」意。●尾の上——「尾」は山の嶺、尾の上といへば「峰」のこと。●鶴鶴——みそさとい。●古の人——支那の莊子のこと。●ことわりをだに分たば——道理をさへよく理解したならば。

【指導】○「小枝の影をのみたのみ」は「腹にみたすにすぎず」と對照して解くがよい。即ち「小枝の影を宿として身を寄せる」意となる。○この文の大意は次のやうに三段に分けて考へると取り易くなります。

一段……世の中は自分の思ひ通りにならぬ。

二段……不満足な實例。

三段……然し「必要なものは僅かである」との道理を辨へ分けよ。

さうしてよく考へて見ると、「不満足は態が深から起る」で「道理がわかれば態を出さなくて済む」と二つの事が含まれてゐることに氣がつくでせう。之をまとめて見ると大意が取れます。○要旨は態を戒しめたものであります。○『華後集』は村田春海作。○これと同一の文が少し短くして次のやうに『靜岡女師二部』に出てゐます。

三三 次の文を口語體にて解り易く解釋せよ。且つ『』によりて段落をつけよ。(靜岡女師二部)

あはれ世のならはしこそはかなきものはあなれたかき賤しき品いと異なりといへどもおのがじし心ゆくばかりなるは稀にただ足らぬことのみぞ多かりける花をお

もふとては梢の嵐をうらみ月をめぐとては尾上の雲を厭ふためし誰かはのがるべき。(『華後集』)



あゝ世の中の一般の有様といふものは、あてにならないものではあるなア。(いつも自分の思ひ通りの有様にあるものではない) 貴い人、賤しい人、その身分は千差萬別だけれど、それ／＼これで満足だと思ふ程の事柄は、稀で、唯もう飽き足りないことばかりが多いものではある。『(春の) 花が美しいと慕うにつけては梢を吹いて花を散らす嵐を恨み、(秋の) 月の清いのを賞するにつけては、月をかくす山の上の雲を厭ふといふことは誰のがれ得ようか、(誰しも逃れることは出来ない。皆不満足に思ふのである。』)



【指導】○段落は 第一段……世の中の事は思ひ通りにならぬ (不満足) 第二段……花に嵐、月に雲 (不満足の実例)

といふ風に二段に分けられます。○なほ唯「解釋せよ」と「口語體にて解り易く解釋せよ」とはつまり同じことで今日「解釋」を文語體でやる人は殆どありません。又解釋はなるべく解り易くやるべきであります。



二三 解釋セヨ。

(熊本一、二師範二部 中學其の他の部)

人のことわざ多かる中に、品わかるゝものは、手かくわざになむありける。そが中に、先づうち見てけちめいちじるきものは、手紙の文の書きざまなりけり。はかなき筆のすさみにあやしくも、高くも卑しくも見ゆるものにしあれば、いと慎ましきわざなりや。(平後集)

解答

人のする事柄は澤山あるが、その中で、よしあしの品等の分れるものは、(何と云つても)字を書くといふ事であるわい。その文字の中でも、先づ一寸見てすぐよしあしの區別の著しくわかるものは、手紙の書き振りぢやなあ、ちよいと筆にまかせて書いたものでも、不思議に、それが上品にも又下品にも見えるやうなものなんだから、餘程(文字は)慎まねばならぬことであるわい。

参考

【語釋】●ことわざ——事業。下の「手かくわざ」と對照すれば「諺」の意でないことに気がつく。●手かく

わざ——「手」とは手蹟、即ち「字」の意。●けぢぬ——區別。差別。●いちじるき——「いちじるしき」に同じ。目だつこと。●はかなき筆のすさみ——「はかなき」は、こゝでは正式に改まつて念入に書いたのでなく「とりとめもなくちよいと」の意。「すさみ」は「心のすゝむまに書く」の意。故に「つい一寸心のすゝむまに書いたもの」といふことになる。掛物とか正式の祝詞とかでなく、手紙とか、慰み書き等ないふ。●あやしくも——古文では多く「賤しい、みすばらしい」の意。こゝは「不思議にも」の意。●見ゆる——「める」は「やうだ」。「見える」といふ可きをかくばかして言つたもので、唯「見える」と譯しても差支ない所だ。●慎ましき——「つとむべき」の意。

【持論】「あやしくも高くも卑しくも見ゆる」の所は、やゝもすると「變にも、又上品にも、又下品にも見える」といふやうにどれも同等の位置に考へて何だか意味の取れぬ脚をしい所だと思ひます。こゝは「あやしくも」の下に「」の讀點のあることを忘れてはなりません。それで次のやうな關係かはつきりと答案にあらはれてなくてはなりません。



脚も原意上「あてにも」と「あやしくも」とは對等の位置にあるが、「あやしくも」だけは一段高い所にあつて下の全體に係つて居るのであります。

二四 次の文を通釋し要旨を述べよ。

近世文



うつせみの世の人のことわざよろづにさまざまなれど時にそむき折にあはでつきづきしからざらむはいみじきふしなりともいかで心のゆくわざなるべきされば夏の日  
は埋火のあたたかなるを思はず冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。(琴後集)

解答

〔通釋〕この世の人のする事柄は、多種多様であるが、それが、時季に反し、場合に合はないで、似合はしくないやうなものなら、たとへいくら立派な事であつても、どうして満足に思ふ事があらうか、(とても満足は出来ない。)そんな譯だから、夏の日には、埋火の暖かさを(戀しくも)思はないし、冬の夜には、氷水の涼しさを忘れてしまつて、(ほしいとは思はないで)あらう。  
〔要旨〕一切の事柄は時季に外れてゐてはつまらないものだ。

本考

〔所釋〕●うつせみ——世、命などに冠する枕詞、●ことわざ——事業。「爲る事」の意。「諺」と思つてはならぬ。●つきづきし——似つかはしい。ふさはしい。……にしつくり合つてゐる」意。●いみじきふし——すぐれてよい事。「いみじ」は善悪何れの意味にも用ひられて居る故よく其の場合を考へて譯すること。こゝは善い意味である。●心ゆく——満足。●埋火——「カモレンビ」灰にうつめた炭火。●ひみづ——「氷」を

「ひ」と讀む。氷水。●忘れつべし——「忘れてしまふのである」と断定して譯してもよい所である。「べし」にいろ／＼あるが大體は次のやうに譯する。

- (1) 明日は晴天なるべし。 (ダラウ。ニ遠ヒナイ) (推量)
  - (2) 三軍の師を奪ふべし。 (アキヨウ) (可能)
  - (3) 来る八日登校すべし。 (セキ) (命令)
  - (4) 明日月上仕るべし。 (シヨウ) (決意)
  - (5) 油盡くれば火は消ゆるべし。 (ハメテアル。當然テアル) (當然)
  - (6) 天下無雙といふべし。 (テヨイ) (許容)
- 本文の「べし」は先づ(1)推量に相當するのであるが、只「忘る」といふよりも「忘れるでせう」と懸と推量の形に言つて、讀者の注意を呼び起す言ひ方であると思ふ。徒然草などにいくらか例がある。次の問題にも出てゐる。

三五 次の文を解釋せよ。

よろづ何の業にも古よりしるべとなす法ありてそれによらざらむはまことの心を得がたくそののりを得たるはまめやかなりとして人もうべなふべし。(琴後集)

解答

すべて何事にも、昔から(その道の)手引となる法則があつて、その法則によらずにやると、



(その道の) 本當の精神をつかむことが出来ないもので、その法則通りにやつたのは、(これは忠實である) と云つて人も承認するものである。

【参考】

【語釋】しるべ——手引。案内。●まことの心を得——その事物の眞實を會得する。●まめやか——忠實、眞面目。●うべなふ——なるほど尤だとする。●べし——この「べし」は推量の「ニ違ヒナイ」に當るが、「承認するものなのだ」と断定的に取つてよい所である。「べし」の譯は常に文の前後の關係をよく考察して適當に譯するがよい。

二六 左の文を解釋せよ。

すべて下りたる世人の心ぐせにて、法に泥み、あとにかゝづらひて、却りてあらぬ方にひがみもてゆくたぐひも多かるをや。もろこし人のことばに「法はなきが中に在り」といへるは、そのことば味ありとこそ覺ゆれ。さはいへど、これは世の常のなほしききは人のためには、たやすく言ひ難くやあらむ。(平林集)

【参考】

すべて衰へた末の世の人の心のぐせで、法則になづみ、前例にかゝはつて、却つて思ひも寄ら

ぬ他の方面にひがんで行く人達も多いことである。支那人の言葉に「法則は法則などと云はない所にあるものだ」と云うてゐるのは、その言葉に深い意味があると感ずるのである。だがさうは言ふものゝ、これは世間一般の凡人のためには、容易に言ひがたいことであるかも知れぬ。

【参考】

【語釋】●下りたる世——末世のこと。●あと——「以前」の意、前例を指す。●あらぬ方——思ひもせぬ方面。●なほしきは——一般普通の場合。「きは」は身分附綴。

二七 次の文は二段から成つて居る。その二段の關係がはつきりするやうに全文を通釋せよ。

この雨に田づらいかならんといへば明日だに晴れなばなか／＼のびもよからんといふはまことは秋のたのみ心にかゝれどいふもさすがなれば口にはかくいふは民草の方のおとろへしなりおもきやまふにつけるゆかりのものら今日もきなふにおなじさまにてあしきことなしといふはやまふおもきなりと人のいひき。(花月草紙)

【参考】

「この雨で田はどうだらう。稻の害になりさうだね。」と尋ねると(農夫が)「なあに、明日さへ



晴れてくれれば、却つて稻の生長もよからう。」と答へるのは、實際は、秋の實のりなことが心配になつてゐるのであるが、その通りに云ふのも何だかやはりがひけて言へないため、(こんな氣休めを言ふので)こんな氣休めを云つてゐる時は民が力を落して弱りこんでゐる時なのである。(と或人が云つた。さうして又次に)重い病人に付き添うてゐる親類縁者達が「今日も昨日も、同じ状態で、別に悪くはない。」と云ふ時は(實際は)その病が重いのである。(とその同じ)人が云つた。

参考

〔詔釋〕 ●田づち―田ツツ。こゝは單に「田」といふ意。●ながく―却つて。今日は「非常に」の意に用ひられてゐる。●秋のたのみ―「秋の糧み」で「秋の稻の收穫」のこと。●さすがなれば―「さすが」いひかれること「なれば」の意。「さすが」は「サウハ云フモノノヤハリ」。現今では「……ダケアツテ」の意に用ひる。●やまふ―やまひ。病氣。●つける―附いてゐる。こゝは看病のために附いてゐるのだ。●ゆかりのもの―「ゆかり」とは「縁」で、その病人に關係ある人達のこと。即ちみうち親族の人達。

〔指釋〕 本問題の出し方は一寸面白いと思ひますが、かう云ふ風に書いてなくとも、常にその關係がばつきりするやうに解釋するのがほんたうなのです。さて二段と云ふのはどこまでか考へて見ると、すぐ分るやうに、

- (1) この雨に……力のおそろへしなり。
  - (2) おもきやまふに……人のいひき。
- で、その關係は、



となつてゐます。それで「この雨に……おそろへしなり」と或人が云つた。そして又「おもき……おもきなり」と前と同じ人が云つた。とすれば二段の關係明確な解釋となるのです。

二八 次の文について後の問に答へよ。

なしと聞けばありといはまほしく悪しきといふをば善きとことかへて言はんこそいとねぢけたることなれ櫻てふ花はわが國のものなるをから國にもありとてさまざまためしなど引きつくれども櫻かいたるもろこしの晝もなくかなへりと思ふからうたもなければなしとこそいふべけれ。(花月草紙)

- (一) 文の論旨を約言せよ。
- (二) この文は二段から成つてゐる。二段の關係を簡單に説明せよ。



(三) 傍線の都の解釋をなせ。

解本

(一) 櫻は日本特有のもので支那にはないのだといふのが論旨である。

(二) 第一段、なしと聞けば……ぬちけたることなれ。

第二段、櫻てよ……なしとこそいふべけれ。

第二段の「櫻は支那にはない」といふことを述べるのに、「反對のことをよく云ふ人があるが、それはぬちけてゐるのだ」と反對の出来ないやうに、前置したものである。

(三) 「櫻」の事が歌つてあつて(確に櫻に適合してゐる)と思はれるやうな漢詩もないのであるから、(支那には櫻が)ないといふのが至當である。

参考

【語釋】 ●「こかへて」言かへて。即ち「言を反對に」。又「事を反對に取つて」の意にも解される。●てふ——「といふ」を約めていつたものである。●から國——唐國。支那のこと。●引きつゝ——無理にこじつける。

二九 次の文を解釋せよ。

いでや櫻といはてしも花とだにいへばこと木にはまぎれぬものをほのくと明けゆく山際雲かどばかり咲きみちたるも霞こめたる夕まぐれ花のけはひもおぼろに見えて此處にのみ暮れのこす景色などいふは淺かりけりまいて暮ののびやかなれば近劣りするなどいふはかのことかへて才おふ心にいふことなりかし。(花月草紙)

参考

いやもう、更めて櫻と言はないでも、唯花とさへいへば、それでもう外の木とは紛れやしない。(それほど名花である)のに、(いろく)形容して「白くほんのりと夜の明け行く山際に、雲か霞かどばかり一ぱいに咲いて居るのがよい。」とか、「霞の一ぱいにかゝつた夕暮に、花の様子もぼんやりとおぼろげに見えて、そこだけが、暮れずに残つたやうに見える景色がよい。」などと云つてはめるのは、淺はかな心なんだよ。まして「暮が長くのびたやうになつてゐるから、近く寄つて見ると見劣りがする。」など云ふのは、例の、何でもわざと反對に云うて、才氣ぶる心から言ふことななさ。

参考

【語釋】 ●こと木——具木。即ち他の木。●山際——山の輪郭。こは山の表面。山の斜面ともいふ可き所。



●けはい—様子。●毒—「ツテナ」。四方に出て花片を受けてゐる所。●近寄りす—近寄つて見ると遠くから見たよりもよくない。●オオふ—「ザエ」と讀む。自慢ぶる。

【指導】この文は解答を御覧になれば、すぐおわかりになるのですが、第一段は次のやうな組立てになつた文です。



三〇 次の文章を解釋せよ。

(鹿兒島女師二部)

海人の住家ばかりあはれなるものはなし、いとたよりなき海邊の風もたまらぬ松蔭などに唯かりそめに造りたる葦屋どものさま波うちよせなば、やがて流れもうせぬべういとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なか／＼にをかしきものから、さて住みなば何心地かせました、思ひやるだに心細し。(檀園文集)

解答

漁夫の住家位衰つばい趣のあるものはない。それはそれはあたり淋しい海邊の、風も吹き通しの疎な松蔭なんかに、ほんの間に合せに造つた葦屋などの有様は、浪が打ち寄せたならばすぐ流れ失せてしまひさうで、誠にたよりなさうに見えるのであるが、それを繪に書き興じたの

などは、却つて風流で趣があるものゝ、さて實際にそんな家に住んで見たならどんな氣持がするだらうかと、たと想像して見るだけでも心細い。

参考

【解釋】●あはれ—本來は物に感じて嘆息する聲で「あ、」に當る。深く心を動かされた時、喜怒哀樂、何れにも使はれる。かなしい。哀つばい。深い趣。しみじみ感ずる等。●風もたまらぬ松蔭—松の葉も、樹と樹との間も疎であるため風が吹きぬける、そんな疎らな松の下蔭。●やがて—忽ち。すぐに。現今の「間もなく」の意で、時間を含むのとは違ふ。●うせぬべう—「失せぬべく」で、失せてしまはればならぬ状態にある。さういふ意。●すさぶ—心の進むまゝにそれをやるさういふ語で、「なぐさむ」興するさなり、更に「おぼれる」耽る「意さもなる。●なか／＼—却つて。現今のやうに「甚だ」の意に用ひられてゐることは古文には先づ無い。●をかしきものから—「をかし」は「興がある」、「風流である」などの意。「ものから」は「ものながら」の意。「をかし」ものだから「なごいふ」などこ譯してはいけない。

【指導】○一節は、海人の住家のあはれであることを概説し、二節は更にこれを詳説した文です。二節は文の筋が込み入つてゐるから、次に示すやうな文の本筋がはつきり答案に表はれるやうに注意なさい。





○語釋にある語は何れも古文によく出て来る語ですから記憶するが肝要です。作者は中島廣足。

三一 次の文を解釋なさい。

をのことあらむもの家にのみやはと心たけく思ひ立ちしも日かすふるまゝにいごこひしう今も立ちかへらまほしきこゝちするをしひて念じてへめぐるにいつしか年月も重なりぬ。(藤樹文集)

〔解答〕

男子ともあらむものが、(自分の) 家にはかり(引ッこんで居てよい) ものか、(それではならぬと)、勇ましく思ひ立つて(旅に出かけたのだつたが)、日敷のたつにつれて(自分の家が) 大それた難しうなり、今にも歸りたいやうな気がするのを、無理に我慢して、(次ぎ次ぎと) 歩きめぐつてゐるうちに、いつの間にか、多くの年月が経つたしまつた。

〔参考〕

〔語釋〕 ●おのこ——男子。●家にのみやは——「家にのみ居らんやは」の時。「家にはかり居てよからうか。よくない」と反駁になる。●まほし——「……したい」といふ意の助動詞。●念す——こらへる。我慢する。前出の「増鏡」の文にも出てゐた。「一心に祈る」意の場合もある。

〔指導〕 「思ひ立ちし」——旅を思ひ立つた。この「旅に出かける」といふことを補足するのは、全文から見て、さう思はれるが、「家にのみやは」から推してわかる所です。又「いごこひしう」は「自分の家が」難しうあることは、すぐ下の「今も立ち歸らまほしき」から推察して考へつかればならぬ所で、本問題は先づこの補足のあるかないかで解釋のよしあしがわかれます。

三二 次の文を平易な口語文で解釋し要旨を述べよ。

人は心のそこつよくてうはへはものやはらかに大かたのことはおのが立てたるおもむきありてもあらはにけやけく人と争はずおもひのどめてやうやうにもものすべくなく。(藤井高倉)

〔解答〕

〔解釋〕 人は腹の底はしつかりしてゐても、表面はやさしく、大抵の事は、自分の立てゝゐる主義方針なるものがあつても、さう露骨に際立つて人と議論するやうなことをせず、ゆつくり構へて、じり／＼と自分の意見を貫徹させるやうな方法をとるべきである。

〔要旨〕

自分の主義意見を實行貫徹して行く上の注意を説いたものである。

〔参考〕



【語釋】 ●「けやけく——きつぱりさ、はつきりさ。際立つて。更まつて、●おもひのどめて——靜かに考へ落ちついて。」の「どむ」はオナツカセル意。●「ものす——實現する。方法をさる。此の語は古文によく出る。何事にまれ「爲す」ことである。●「べくなむ——下に「ある」が省略されてゐる。意味を強くいふ。「かし」「ぞ」に似て、それよりも意が軽い。

三三 左ノ文ヲ讀ミテ次ノ各項ニ答ヘヨ。

(東京豊島師二部)

- (一) 全文ノ大意
  - (二) 傍線ノ箇處(イ)(ロ)ハヲ詳説セヨ
  - (三) 傍線ノ箇處(A)ノ中ナル係結ヲ説明セヨ
  - (四) 傍線ノ箇處(B)ヲ品詞ニ解剖セヨ
- 眞淵に及びてはじめて萬葉の風をよみうつし文章も亦古言をもて綴り一家を成し世の耳目を驚かす。従ひ學ぶ者多し。その説に契沖は新墾しつれど未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎしこそ惜しけれ。師の大人は歌のみかは舊りぬるちちの書ごもをあらすきかへししいたづきのかひさはなれどもまだ刈りをさめ果てざるに病に臥しつな

ごいひておのれ是がなりはひを遂ぐるよしなり。實に古を發揮して後生を誘ふ功少からず。(伴蒿蹊)

解答

- (一) 【穴書】眞淵は古學研究の大家で自ら契沖春滿の後をついで古學研究を完成するのだと云つてゐた程で、功績も大きい。
- (二) 【語釋】
  - (イ) 萬葉の歌風を詠じ。
  - (ロ) 先生(春滿)は歌ばかりではない、舊くなつてしまつて(誰も手をつけてゐない)澤山の書(古事記祝詞等)などを一通り解釋した。その勞力の効は非常なものであるが、(一通りの解釋だけで)充分に古代精神を發揮するに至らずして病氣にかゝつて臥してしまつた。
  - ◎「大人」——ウシと讀む。師又は學者の尊稱。「師の大人」で先生と言ふことになる。◎「あらずきかへし」——最初あらかた田畑を鋤きかへすといふことから、こゝは大體の解釋をしたことになる。◎「さは」——澤山。
- (六) 御自分の事業——研究——を成就するといふわけである。



(三) 上に「こそ」とあるから「惜し」と云ふ形容詞が、已然形「惜しけれ」で結んである。

(四) 實に 古 名詞 助詞 復生 功 少から 助助

参考

〔語釋〕 ●世の耳目を驚かす——世間の人をびっくりさせた。 ●新墾——「ニヒバヤ」始めて山野を開墾すること。こゝは初めて研究に着手したこと。 ●植まつくさぬ程に——充分に書を植ふとらぬうちに。即ち充分なる書得迄に行きつかなくなかつたうちに。 ●後生を誘ふ——後進のものを古學研究に引き入れる。 ●眞蹟が眞蹟の古學研究の功を書いた一節である。

現代文



一 次の文を読んで文後の問に答へなさい。

天は公に授くるに詩人の天分を以てし、而して先づ公に與ふるに政治家の境遇を以てせりき。公の政治家たりしや、煩惱内に公を苦め讒奸外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめき。然れども悲しい哉是の如くするに非ざれば公は遂に詩人たる能はざりしなり。而も公は死に至るまでは是の天分の地に居るを悲しみ、靜かに春秋の榮落を觀じて何時かは昔日の榮華に歸るあらむ事を望みたりき。是の憂愁と希望との現はるゝ所に天分は遂に大成せられたり。而して公自らは毫も是を知らざりしなり。嗚呼天道の冷酷無情何ぞ一に是に至るや。(高山樗牛)

(1) 「天道の冷酷無情」とは如何なる點を指して言つたものか説明なさい。

(2) 傍線の部を平易に解釋なさい。

解本

(1) 一、政治家となし非常な苦しみを與へ遂に流人となしたること。

現代文



二、配所に居ることの憂愁と昔日の榮華に歸る日のあることの空しい希望とを抱かしたること。

三、配所のかげな境地に居ればこそ天分の詩が大成したといふことを公に覺らしめなかつたこと。

以上三つの悲惨事はともに自ら求めたものではなく、運命がかやうにしたのであるから、天道の冷酷無情と云つたものである。

(2) 公が政治家であつた時分は、心の内部にはいろ／＼の情愁から起る迷ひが公をなやませてゐたし、外部には、よこしまな者共がゐて公の讒言をなし罪人として遂に告げ訴へるすべもない流され人としたのであつた。

【参考】

【語釋】 ●詩人の天分——詩人としての天才、天分とは天然自然にうけて生れた素質。●春秋の榮華を觀じて——花の咲く春があれば必ず葉の落ちる秋がある、人間にもその如く盛衰のあることをしみ／＼と考へて。●天分は遂に大成せられたり——詩人としての天才は遂に立派に完全に發揮し成就された。●何ぞ一にはに至るや——どうしてまの此の歳にまでひどかつたんだらうか。「一」は「一途に」全く「一」の意。

二 次の文を通釋し作者の心持を約言せよ。

雲いろ／＼の夕暮の空に、飛ぶ鳥のゆくへも知らず、紛れ入るこそうらやましけれ。  
吾は幾度か願ひぬ、この思を胸にして、吾がむくろの露となりても溶けよかし、かくて天風に散じて、かの限りなきみ空に吹きわたたりてむ。(高山樗牛)

【解答】

【通釋】いろ／＼の(形や色彩をした美しい)雲の(たゞよよ)夕暮の空に、飛んでゐた鳥が(いつのまにか)行く先きも分らぬ(やうに)紛れこんで行くのは(ほんたうに)うらやましいことだ。私はこの(やるせない苦しい)思を抱いたまゝ、私のからだ(どうぞ)露のやうになつて溶けてくれればよい、さうして天の風に(交じり四方に)散つて、あの無限に(廣く深い)大空に(どこともなく)吹きわたつてしまつたら(どんなによいだらう。と)私は幾度／＼も願つたことだ。

【作者】堪へきれぬやうな胸の悩みをどうしたなら散ずることが出来ようかと苦しんでゐる心持である。

【参考】



【落語】 ●むくろ——身體。今多く「死體」の意に用ふ。●露となりても溶けよかし——「露となりて溶けたい」の意で「露になつてもよいから」ではない。●てむ——「て」は完了の助動詞で「シマフ」。「む」は未来の助動詞であるから「……シマシマハフ」となる。(サウスレバドナニロイダラウナフ)の意がある。

三 次の文を読んで文後の問に答へよ。

假令活動向上が何等の較著なる効果を産せずとも、假令落々たる雄心浩志を抱いて空しく蓬蒿の中に埋了するが如きことありとも誰か之を目して全く失敗せりとせしや。之を失敗せりとするはこれ畢竟己が狹陋なる功利的打算的の眼を以てのみ成功の意義を解すればなり。(潮島澤川)

問 (1) 作者はこの文に於て何を云はうとしてゐるのか。

(2) 傍線の部を解釋せよ。

解答

(1) 作者は「成功の眞の意義について世人の誤解を指摘し人は活動向上に終始し雄心浩志を抱くとい事が何より大切だ」と云はうとしてゐる。

(2) イ、著しく目立つ所の立派な結果。

ロ、いかにも大きくすぐれた心や高遠な理想——(人類を救はうとか云ふやうな)——を持ちながら(いろ／＼の事情で)(それが實現されずに)そのまま草深い田舎で埋れで一生を終る。

ハ、何事をするにもそれが利益効果をもたらさぬ限りそれはつまらぬとし、これだけの事をしてこれ位の利益しかないぢやあはないといふやうな考へ方。

解説

【落語】 ●向上——よりよき状態に進むこと。●較著——「カウチロ」いちじるしく目立つ。●落々——大きなありさま。●浩志——大きな志、目的。●蓬蒿——二字共によもぎで草むらのこと。草深い田舎の意味に用ひられてゐる。

【傍線】 ○本文は病問語中の「成功の意義」と題する文の一節で、少しも困難な問題とは思ひませんが、唯これだけの文ですと、(1)の問の作者の意圖する所が果して那邊にあるか迷ひ易い點もあります。失敗せりと云はんや「失敗せり」とするは誤つた考へだ。さあるから「失敗したのぢやない」と云うて居ることがわかる。何が失敗したのでないかといふは「活動向上」の「雄心浩志」があるのだから失敗したとは自分は云はぬことになる。○「功利的打算的」の解はなるべくくくたいて解くがよい。○この文は十一年度の高校入試に出てゐます。「蓬蒿」「落々」の意味を多数知らなかつたといふことでありますが「蓬」がよもぎである位は知



つて居るから、略ぼ「名も知られず草叢の中に舞られて行く」とやうに解が出来ようし、「落々」は下の「雄心壮志」の形容だからこれも「いかにも大きな」といふ意味に取れさうです。

■ 次の文を解釋し、文を通して作者の身の上を想像せよ。

あはれかゝる夜よ歌よむ友のたれかれつどひてしづかに浮世の外の物がたりなどいひかはしつるはと俄にそのわたりこひしう涙ぐまるゝに友に別れし雁たゞ一つ空に聲していづこにかゆくさびしとは世のつね命つれなくさへ思はれぬ。(二葉全集)

解説

〔原書〕「あゝ、かういふ晩だつたなア、歌人仲間の誰かれが寄り集つて、しんみりと世間ばなれした物語などをお互に話し合つたのは……(ほんにあの時は愉快だつたが)……」と急にその頃の事が戀しう(思ひ出されてたまらなくなり)自然と涙が催されるのでした。(折りも折り)友に別れた雁が只一羽(寂しう)空を鳴いて通る。一體どこへ行くのやら。(私の身の上のやうにも思はれて、その寂しさと云つたらありません。いや「さびしい」とは世間普通の言ひ方で、(そのやうな言葉では、とても今の私の心持は言ひ足りません。寧ろかうしていつまでも絶えないで居る私の)命があつかましいものだともだに思はれるのでした。

〔作者〕ほんたうに心の合うた友達と相會した夜の事を追想して感に堪へないで、この文を書いたものであります。それ等の友達も或は離散し、或は早く此の世を去つたものも居るやうに思はれます。作者は今、語る友もなく、只一人孤獨な寂しい生活をしてゐる。「友に別れし雁たゞ一つ」と自分の身に引き比べてたまらない程の寂寥の感を胸一ぱいにためて、もてあましてゐるのであります。

解説

〔原書〕●あはれ——感動の意味をあらはす詞で、「あゝ」と譯する。●浮世の外の物語——清い話、宗教藝術學問等の話で、こゝは歌謡であらう。米の値さか人の噂などの世間話してない。●わたり——邊。こゝでは「頃」の意。●涙ぐまるゝ——泣くまいとして自然と目に涙を催す。「に」は「その時に」の意。●つれなく——情に強く決して他から動かされないこと、平氣であるのだ。あつかましい。こゝは餘りの寂しさに動かされて命も平氣では居れず絶え切れさうだがやはり平氣で命が續いてゐるものだといふので、寂しい心持を極度にあらはしたものである。

〔指導〕○この文では「いひかはしつるは」の下に「かゝる夜よ」の句が來べき思想であることに注意すべきでせう。それと「雁」の所から以下可なりの補足が必要であります。「友と物語りしたのはこんな晩だつた」と云つて涙を流してゐるので、反面には今の孤獨な境遇といふことを含んでゐる。そこへ「友に別れし雁たゞ一つ」とあるので、(私の身の上のやうに云々)の補足が必要になります。「さびしきは世のつれなく」と「命つれなく」の間には省略の多いことは前からの文の勢で察せられます。「さびしきは世のつれの言葉に



い、今、の、わ、が、心、の、う、ち、を、あ、ら、は、し、得、ず、事、ろ、か、く、生、き、居、る、こ、の、わ、が、命、……と、續、く、所、で、あ、り、ま、す。  
○こんな感情をあらはした文は、さりわけ作者の胸中に充分にひたつて解しなさいと拙い答案となります。  
只一字づつ、の逐語譯をしたつていけません。

五 左の文を解釋せよ。

(沖繩女師二部)

誠まことに能あたくこそ我われは來きつれ。何なにぞ來きる事ことの甚ひどだ遅おそかりし。山やまの麗うつくしと云いふも壤どろのうづたかきのみ。川かみののどけしと云いふも水みづの逝いくに過ぎざるのみ。牢らうとして抜ぬくべからざる我われが半生はんせいの病疾びやうじやくは、争あでか壤どろと水みづとの醫いすべきものならんやと齒牙しゆがにも懸かけず侮ありたりし已いこそ、先まづ侮あらるべき嫌いやなるものなれや。(尾崎紅葉)

〔譯本〕

ほんとに自分はまあ来てよかつた。(いやもつと早く来ればよかつたのに) 實際来やうが遅かつたよ。(よい處だとは聞いてるたのだが)、何に山が奇麗だと云つたつて、壤がもりあがつて高くなつてゐるだけさ。川がのどかでよいなど云つたところで、水が流れてゐるだけのものさ。かたくくしみついてとても取れさうもない自分の今迄の長い(この惱の)病氣は、どうしてそんな嫌や水でなほされるものかと問題にもせず馬鹿にしてゐたのだつたが、その自分こそ先づ馬鹿にさるべき愚かものなんだ。(来て見ると忽ち今迄の惱は消えうせて魂が生き／＼して来た。)

〔譯本〕

●「こそ」を来つれ——「こそ」を除けば「能く来つ」になるから、直譯すれば「よく来た。」である。然し「こそ」を入れると感情が強く件なふのであるから、「まあ来てよかつた。」と歎息の心持を述べた方がよい。●「逝かりし」——述體形止めといふので餘韻を残す云ひ方。こゝも「何ぞ来る事の大それた遅かつたことよ。」と譯するのは直譯に過ぎて感心せぬ。●牢として——牢は「堅固」の意。しつかりさかたく。●病疾——久しくなほらぬ病氣。●齒牙にも懸けず——齒牙は「歯さき」は。云ふに足らぬ意。

〔譯本〕「金色夜叉」の一節でよく教科書に出てゐます。文中「我」といふのは小説の主人公圓實一のことです。彼が同々の心を抱いて豊原に行つた所その意外な山水の美世に、打たれて今迄の憂悶の情が一掃されたといふ下りであります。直譯にならぬ様に且つ「我」といふ人物になつてその心持をあらはさうと努めなさい。

六 次の文章の要旨を述べ且傍線の部分を解釋せよ。

(鹿兒島女師二部)

苦しんだり、怒つたり、嘔ういだり泣ないたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽あき／＼した。飽あき／＼した上に芝居や小説で同じ刺激を繰くり返しては大變だ。余が欲する時はそんな世間的の人情(1)を鼓舞する様なものではない。



俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。<sup>(3)</sup> 理非を絶した小説は少からう。<sup>(4)</sup> どこまでも世間を出ることが出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なものもこの境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、<sup>(5)</sup> 浮世の勤工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても地面の上を駆けあわいて、鏡の勘定を忘れるひまがない。<sup>(6)</sup> (夏目漱石)

解答

【要旨】「喜怒哀楽は人の世につきもので、飽きくしてゐる。そんな人情から離れ得る詩を自分には欲する。所が小説も芝居も殊に西洋の詩は人情が主で自分の理想にあはぬ。」と云つて人情から離れた藝術を主張してゐる。

【解説】

(1) 世間一般誰でもが必ず有つ感情、即ち喜怒哀楽の情を振るひ起す。

(2) 苦しい嫌なこと多い人生を忘れた静かな清い氣持。

(3) 理非の問題の全く道入らぬ小説。「理非」とは道理不道理。

(4) 始めから終り迄、世間の人情を離れ得ぬ。

(5) 世間普通の人情。

(6) 「浮世」とは「此の世」、「世間」。「勤工場」とは各種の店が品物を並べてゐる所で、今の百貨店のやうなもの。この世のだけでもよく口にすることを百貨店の品物に比して云つたものである。

参考

【解説】此の文は夏目漱石の有名な小説「草枕」の一節で、所謂非人情の藝術を強調し、人情を刺激する普通の藝術を排してゐるくだりである。

【語彙】 ●俗念——世間的の人情雜念。 ●詩歌の純粹なもの——教訓や諷刺などの道入らぬ詩歌。感情のみの詩歌。 ●解——ゲダツ。俗念を去る、わけ出る。 ●用を辨じ——こゝでは世間普通の事柄だけで詩歌を作つての意。 ●地面の上を云々——淨かな境地に對して、俗念の多い境地を地面と云つたもので、どうしても俗念から去ることが出来ぬといふ意をかく面白く表したのである。

【用語】「要旨」といふのは「大意」と似たもので、極めて大體の意味を云ひ、後で文の要點を簡約に述べれば



よい。よく読んで御覽なさい。この文は同じやうなことを言葉を変へて幾度も言つてあるに気がつくでせう。三段に分れます。

一、「苦しんだり」から「大變だ」まで。——（人情は盛だ。）

二、「余が欲する詩」から「詩である」まで。——（非人情の詩を欲する。）

三、「いくち」から「忘れるひまがない」——（普通の藝術は人情を離れ得ぬ。）

従つて要點を簡約に云へば「此の上人情を刺殺されてはたまらぬから非人情の詩を理想とする。」といふことになるのです。故に解答には後の方に「人情から離れた藝術を主張してゐる」と附加したのであります。

七 左の文中——印の部分の意味を述べよ。（本文を書き取る必要なし）（埼玉師二部）

住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界を眼のあたりに寫すのが詩

である書である。細かにいへば寫さないでもたとへて眼のあたりに見れば、そこに詩も

生れ歌も湧き、着想を紙に落さないでも、<sup>(11)</sup>金玉の響は胸に起り、丹青を畫架に向つ

て塗抹しないでも、<sup>(12)</sup>五彩の絢爛は自ら心眼に映る。（夏目漱石）

解答

(一) 「世間との交渉はなかく、面倒である。この面倒を住みにくい世から、住みにくいうるさを取去つてしまつて、のんびりした有難い世界を眼の前に寫し出して來るのが詩であり

書である。」と云ふので詩書といふものゝ意義を説いたのである。

(二) 黄金と玉のよい音。うつくしき聲。此處は「よき詩の境地」の意に用ひてある。

(三) 種々の美しい色彩がまばゆくきらびやかなこと。「五彩」は本來は青、黄、赤、白、黒の五色でいろどるの意味。さて此處は「よき書の趣」の意に取るがよい。

参考

〔詩書〕 ●著者——こんな風に作らうといふ思ひついた考。詩歌文章繪畫などを描く時にいふ。●紙に落す——文字に表現する。●丹青——赤と青の典で普通繪の具のことである。こゝは文字通りに解してもよい。

●塗抹——ぬりつける。なすりつける。こゝは繪を描くことになる。●心眼に映る——心の中に生ずる。

「心眼」とは心を眼にたとへたので「心」といふに同じい。

〔大意〕 この世から難な部分を取去つて有難い世界を寫し出すのが詩や書である。いや紙に寫し出さなくとも、その態度でこの世を見れば詩とも繪ともなつて心に映つて來るのである。

〔書寫〕 口語文について「解せよ」とか「意味を述べよ」とかの問題が出る。受験者はどうも解答に困つて、仕方なく一つ二つ言葉を入れたたり變へたりして答案を書くやうですが、それは解せよ云へば唯口語に直せばよいものゝやうに思つてゐるからです。よく文の意味をのみ込んだなら間違なくそれをそのまま、自分のものとしてよく第三者に分るやうに述べさへすればよいのですからその積りで答案を認めなさい。

八 次の文を解釋なさい。



吾人は詩人の建立せる蓬萊に入り畫家の創造せる桃源に遊んで陶然たる幻惑を受くるを辭せざると共にわが親しく見聞せる日常生活の局部が其の儘眼前に搖曳して寫實的幻惑中に吾人を擔ひ去るを快とするものなり。(夏目漱石)

〔譯文〕

吾人は、詩を讀んで、詩人がその想像で造り上げた蓬萊山(仙人の住むといふ山)とも云ふべき仙境へ入つたやうな気分になつたり、又繪を見て、畫家がその想像によつて造り出した桃源(これも仙境の名)ともいふべき仙境に遊んだやうな気分になつたりして、うつとりと心を奪はれることを厭はないと同時に、自分が實際に見聞してゐる日常生活の一部分が、其の儘眼前にゆら／＼と動いてゐるといふやうに、實際の事物の寫し出し方によつてうつとりとした心持にさそひ込まれることをも亦愉快に思ふのである。

〔參考〕

〔解説〕昔々は神や繪によつて仙境に遊ぶ快味を喜ぶと共に、實際見聞した事が眼前に再現されるその巧妙さに心が引きつけられるのも愉快だ。その意味でつまり作の内容及び表出技巧の興味について述べたものである。

〔用語〕

●蓬萊——支那で仙人の住むと云ふ想像上の山。●桃源——晋の時代、武陵の漁夫が発見したといふ仙境。●幽谷——うつそりさよい氣持になる。●幻惑——「ゲンラク」心をまどはされる。こゝは作品の巧みさを引きつけられる意。●搖曳——「エウエイ」ゆらめく。眼前にゆら／＼と浮ぶ。●寫實的幻惑——事實をそのままに寫し出すことによつて、心をうつそりさせる意。

〔挿題〕かう云ふ文を逐語譯にしては何にもなりません。例へば「詩人のつくり建てた蓬萊山に遁入り」さか、「如のやうなまどはされを受けるのを辭しない」さか「事實を寫す風の幻惑の中に私共をかゞぎ去るのを快いとするものである」さ云ふやうな譯をよく入學試験に見受けますが、何の事だか、分りません。充分に文の要旨を明かにして答案の意味がはつきりするやうに述べて行くことが肝要です。常に文の大體の筋道を取りはづさぬやうに下さい。前述の「解答」と「概説」を比べ参照して下さい。

九 次の文を讀んで後の問に答へよ。

(京都女師二部)

園中兒等をよろこばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、いちじゆくなり、竹の子なり、鶏なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。喜ぶ兒等を見れば我は唯うれしきなり。此の時、慾もなし。黙坐して自然に對すれば、初は其の愛すべきを覚え、終には其の敬すべきを覺ゆ。尙久しく對すれば、其の奥に不可思議なる何物かの潜めるが如く思はる。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあ



はれは自ら知らるべくや。(大可桂月)

問

(1) 作者ハ何ヲ語ラウトスルノカ。

(2) 傍線ノ箇所ヲ解釋セヨ。

解答

(1) 自然界の中で育つ子供の自然性の貴さをしみじみ感じてそれを語らうとするのです。

(2) 「子を持つて知る親の思」といふことがあるが、たとひ子を持つてまだ親の思は知らなくとも、自然の貴さを表はす子供を見てみると、物の深い趣といふものは自然とわかることが出来るやうに思ふ。

参考

【傍線】 ●物のあはれ——物の情趣、物の深い感じ、物のおもしろみ、などを講ずるがよろしい。こゝなどは「親の思」の意ではない。

【傍線】 自然界の貴さを説いてあるやうだけれど、こゝではどちらか云ふと、その中でよろこんで育つて

る子供の中の自然性といふものが、文の中心になつてゐる。それは「國中見事なよろこばしむるものは」といふ書きぶり、「よしや……」以下の文が子供を主にしてゐるのでわかります。従つて申張の「臥坐して自然に對すれば」の「自然」といふのは、自然物も子供の自然さも共に含めて云つてあると考ふべきであります。作者は最初田圃自然の情趣を説いて来たのですが、その中でたのしむ子供を見ると如何にも自然そのまゝであるので筆が子供の上を走つたのであります。この問題などは傍線句はありませんがやゝもすると誤つた解答をし易いから充分注意を探究せねばなりません。

一〇 次の文を読んで後の問に答へよ。

(福岡師二部)

春寒未だ去らざる時、爐を擁して古人を友とすれば、遠寺の鐘聲霜に牙ゆ。一陣の暗香に驚いて顧みれば、見得たり瓶中の芳姿、これ晝間の散策に竹外の一技を手折りもて来し家づとなりけり。

(1) 全文を平易に解釋せよ。

(2) 関點ある語句を詳説せよ。

解答

(1) 早春の寒さのまだ去らない時分に、爐のほとりで、(よ)い心持でなつて(古)書を開いて讀ん



である。遠寺の鐘の聲が霜夜の静けさによく澄んで聞えて来る。(折から)どこからとなくふんと芳しい香がする、おやと思うてふり返つて見ると、瓶の中に花の奇麗な姿が見えた。(さうだつた)これは(今日の)お晝の散歩の際、竹籤のほりに見つけた(梅の)一枝を折つて家へのみやげに持ち歸つたのだつたわい。(何とまあよい香だらう。)

(2) ○爐を擁して古人を友とすれば——「火鉢を圍んで暖を取りながら、古い書物を読んで古人の思想を相手に心を慰めてゐると」の意。爐といふのは、床を穿つて火を置き多くは暖を取る所だが、火鉢の事をかく言ふ時もある。

○霜に牙ゆ——霜の置く晩は静かなものである。従つて鐘の音も澄んではつきり聞える。「牙ゆ」といふ語は(一)冷たい。(二)澄ミテ明カデアル、鮮明デアル。(三)ヒツキガヨクトホル。本文は(三)に當るが然し(一)(二)の意味も交つてゐる。

○竹外の一枝——「竹外」とは竹籤の外。一枝は前からの關係上、梅花一枝のことである。

○家づと——我が家に持ち歸る苞且。即ち家へのみやげ。

参考

【語釋】●春寒——早春の寒さ。●一陣の晴香——「一陣は、フキ(の風)。「晴香」は、こからかわからぬが

香つて来るので多く「梅花の香」のことである。●驚いて——「おや」と思ふ心の動きの意で、こゝは「おつたまげて」とか「びつくりして」とか譯しては餘り強すぎる。

【指釋】この文は「早春の静夜梅花を見てしんみり悦に入つてゐる心持を表はしたものであります。『春寒未だ去らざる時』『晴香』『一枝を手折り』など『瓶中の芳姿』は直に梅花であることかわかりませう。こゝを「見る事が出来た瓶の中の芳しい姿」となど譯しては最早落第でせう。

二 一の文を通釋せよ。

(千葉師二部)

彼の君子人の老後を見るに、煩惱自ら消盡して、身神塵垢の表に淨く、外樂を非とし、世喧を忘れ、澹然として慮なく、泊乎として爲す無く、内に自持する所ありて、行住晏如たり。これ決して情感の春、氣鋭の夏、思索の秋に於いて見るべからざる所、老いて益々神健に、智徳よく和合したる、人生何れの時かこの時よりいみじき。

(坪内雄禰——文學其の折々)

解答

あの(學徳備はつた)君子人の老年(の生活状態)を觀察して見ると、苦しみなやみが自然とすつかり消え失せて、身も心もきたない情慾から離れて淨らかであり、(食ふとか飲むとか云ふ



やうな)物の樂を掛け、世間の取汰沙を忘れ、あつさりとして心に一物なく、靜かな無爲の狀態であるが(而も)内心にはしつかりと自ら守る所あつて日常生活が常にゆつたりと安らかである。この(やうな状態)は決して、春とも云ふ可き情感の青年時代や、夏とも云ふべき意氣盛な壯年時代乃至秋とも云ふべき思索の成熟時代には見られない所であつて、老いて益々精神がしつかりと強くなり、智と徳としつかりと和合したもの(と云ふ可く)人生のどの時代もこの(老熟した)時よりもすぐれて立派な時はないのである。

〔参考〕

〔語釋〕 ●君子人——學徳兼れ備はつた人。「彼の」さあるがこゝは誰ぞ指したのでなく、誰でもそこまで修養した人を云ふのである。●煩惱——佛教の方で云ふ語、情慾から起つて来るうるささ、なやましきこと、●消遣——すつかり無くなつてしまふ意。●塵垢——人間の情慾をきたない塵や垢に比して云ふ。●世喧——世間のいろ／＼な風評や争鬭等。●澹然——水のやうにあつさりしてゐる有様。●泊乎——靜かな様。●爲す無く——世間の事に手出しをせず靜に暮してゐる。老子の言ふ無爲無慾の状態を云ふ。●行住——なくともささるさいふ字だが日常の生活のことである。●晏如——やすらかな有様。●思素——眞理探求のために思ひきはめること。

〔推察〕 この文は人生を四季に喩へ、その中で、冬とも云ふ可き老年時代の圓熟した境地を讚美したものであります。「煩惱……晏如たり」まで、一息に續けてあるので、靜しにくいから途中、一度位切つて靜した方がよいでせう。

がよいでせう。

二二 解 釋

(岐阜女師二部)

人の稟性は千種萬様なり。仔細に點檢すれば、其の面の同じからざるが如きものあるや明らけし。たゞ此の如き千種萬様の人々に向つて、吾人の期待する所は、頼もしき人たる事是なり。頼もしき人とは只々信用すべき人を意味す。而して信用は我より要請すべきものにあらずして他より寄與すべきものなり。如何に天下に向つて大聲疾呼し、我を頼もしき人物と思へといふども、天下の人我を信せずんば、我はこれを如何ともする能はざるなり、如何に天下の視聽より逃れ隠れんとするども、天下の心我に歸せんか、我亦これを如何ともする能はざるなり。豈たゞ天下の大のみと謂はんや。(鎌倉幕時)

〔参考〕

人のうまれつきはいろ／＼に違つてゐる。こまかにしらべ研究して見ると、丁度その顔形が違



つてあるやうなものであることは明かである。たゞこのやうないろく性質の違つた人々に向つてかくあり度いと望む點は、「信頼するに足る人たれ」といふ事である。頼もしき人とは只々信用の出来る人といふことを意味する。そして信用は自分の方から人に向つて自分を信用せよと求めるべきものではなくして、他人から自然に信用して來るといふのが當然なのである。如何に天下に向つて大きな聲で呼はり「俺を頼もしい人物と思へ。」と云つた所で、天下の人が自分を信用しなかつたなら自分はどうしようはないのである。(之に反し) 何とかして天下の人に氣づかれぬやうにしようと思つて逃げ隠れしても、天下の人の信用が自分に集つて來ると自分としては亦それをどうすることも出来ない。(その信用を受ける外はないものなのである。) 今大きく天下と謂つたが、どうして唯天下の大きな範圍内の事だけと限らうか。(一府縣、一町村、或は一家といふやうな小さな範圍内に於ても同様の事なのだ。)

参考

〔推察〕 ○頼もしき人たる事はなり。——頼もしい人となるさ云ふ事なのである。これを(……)人たる事はである。などの直譯は拙である。○天下の心我に歸せんか。——天下の信用が自分に集まつて來ようものなら。これも(……)我に歸しようか。などは最も拙である。○豈た天下の大のみを謂はんや——これはこれだけでは解するに苦しむ。下に「一家の小に於ても然り。」と入れて見るさよく分る。そして「大なる天下に於ても事のみに謂はんや。小なる一家に於ても然り。」と同義。「以上の事は大きな天下に於てばかりでない。小さな家に於ても同様だ。」といふ意味になります。

下は於ての事のみを謂はんや。小なる一家に於ても然り。」と同義。「以上の事は大きな天下に於てばかりでない。小さな家に於ても同様だ。」といふ意味になります。

一三 次の文を読んで後の問に答へなさい。

詩人としての山陽は、必ずしも八方無礙とは云はない。若し漢詩の世界を二分して、李白杜甫とせば、山陽は前者に屬せずして後者に屬する者だ。山陽は抽象的に物を考へることが出来ない。又自ら空中樓閣を造る事が出来ない。彼は恒に實際に即してゐる。彼の缺點は、寧ろ餘り實際に忠實すぎる點である。然し、それだけ彼の詩は、形式の如何にかゝはらず、文學の如何にかゝはらず、國民的詩人としての價値がある。何故なれば、その文字や形式は支那のものであるが、其の題目、其の内容、其の精神は悉く日本的である。たゞへ支那の事を詠じたとしても、日本人の眼を以て觀たものだ。(鑑賞録)

問 (1) 全文の趣意を述べよ。

(2) この文によつて李白杜甫の詩の傾向を約言せよ。

現代文



(3) 傍線の部を説明せよ。

【解答】

- (1) 山陽の價値は實際に忠實に、且つ日本人の眼で観て漢詩を詠じた國民的詩人たるにある。
- (2) 李白は抽象的、空想的に詩を詠じたが、杜甫は具體的、實際的であつた。
- (3) 1、空想的であれ、實際的であれ、どの方面も必ず自由に歌へたと云ふわけではない。「無礙」とはサワリがない自在といふこと。  
 2、空中に奇麗な舞殿を建てるといふので、空想によつて心に美の世界を描くといふ意。  
 3、「其の」とは山陽の詩。山陽の詩の中に歌つてある事柄。

【参考】

【附録】 ●李白と杜甫——支那唐代の代表的大詩人で後の漢詩はこの二人の何れかの詩風に屬する。●實際に即して——山と河とが或事件とが、實際に自分の見聞し感激した事實について詠するのである。

一 左の文の傍線の部を解釋し、全文の大意を書きなさい。(山梨女師二部)

新を喜ぶものは、舊を守らうとするものを目して、<sup>1</sup>因循姑息といひ、<sup>2</sup>頑冥固陋といひ、<sup>3</sup>陳腐迂濶といふ。舊を好むものは、新に趨るものを嘲つて、<sup>4</sup>輕佻浮薄といひ、

生意氣といひ、又無節操といふ。新も舊も悪いものは其の通りであるが、善い方からいふと、新は改善を意味し、進歩を意味する。舊は確實を意味し信用を意味する。

- 1、因循姑息
- 2、頑冥固陋
- 3、陳腐迂濶
- 4、輕佻浮薄

【解答】

【附録】

1 「因循」——古い習慣に因り循ひて、一向新しい方面に邁らないであること。「姑息」——目前一時の間に合せ。一時のがれ。「因循姑息」とは古いしきたりにぐづついで一時のがれをしてあること。

2 「頑冥」——かたくなで道理にくだらないこと。「固陋」——かたくなで見聞のせまいこと。「頑冥固陋」とは、にくらしいほどわけのわからぬこと。



8 「陳腐」——ふるびて役に立たないこと。「迂闊」——世事にうといこと。「陳腐迂闊」とは、ふるくさくて實地の役に立たずうっかりしてゐること。

4 「輕佻」——かるはずみなこと。「浮薄」——輕々しい。うすつべら。輕佻と同義。

〔大意〕新派、舊派、お互にその弱點を捕へて攻撃し合つてゐる。兩方共に攻撃されるだけの缺點があるが又兩方ともに善い方面——即ち新派に改善、進歩、舊派に確實、信用——のあることを見逃してはならぬ。

参考

〔指導〕本文では、作者の云はんとする所が最後の善い方を述べた點にあるから、そこを主として詳しく、前の方を簡約にまとめれば大意となります。

一五 左の文中傍線の語には假名を付け、且全文の大意を簡単に述べなさい。(宮崎女師二部)  
我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ち、自國の缺陷を補ふことに努めず。進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことに努めず。たゞその日暮しに一時の苟安を偷取しつゝあるは何ぞや。

参考

〔東方〕驕慢。(ケウマン) 萎縮。(キシユク) 慚ち。(ハチ) 缺陷。(ケツカン) 闡明。(センメイ) 苟安。(コウアン) 偷取。(トウシュ)

〔大意〕我が國民は物質的にはおごつて来て、精神的には萎縮してゐる。自國の缺陷を補ひ、自國の真相を明かにし世界の誤解を正さうとはしないで、全くその日暮した。それではいけない。

参考

〔指導〕「自力の不足」も「缺陷」の中に遁入るからこれを略する。「努めず」が二度使つてゐるからこれを略する。「その日暮し」と「一時の苟安を偷取しつゝある」とは結局同様の意味となるにつきこれを略する。かうして骨組の部分を手易に簡約に述べれば大意となります。或はもつと短くも云へる。即ちこの文は「精神の萎縮」してゐるのを指摘するのが主であるから、「物質的に驕慢となり」を略してよいのです。なほ「この文はどんなことを云つた文か」といふ問題の場合は、「我が國民が精神的に萎縮してゐることを歎いた文である。」となります。

〔語彙〕●萎縮——勢力乏しくなえちぢむ。●缺陷——不足。不完全。●闡明——はつきりすること、明かにすること。●苟安——一時その目前の安きをむさぼる。一時のぐれ。●偷取——こつそりこねすみこる。

一六 次の文を読んで

現代文



- (一) 作者は何を云つてゐるか。
- (二) 作者はそれを(一)を(二)といふ組立で表現してゐるか。  
を答へなさい。

(埼玉女師二部)

つらつら文運の振興を考ふるに其先を作すものは大抵詩人ならざるはなく、其の衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チョーサー・スペンサー・ミルトン・シエクスピアの英文學に於ける、コルネイユ・モリエール・ラシーヌの佛文學に於ける、ゲーテ・シルレル・レツシングの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然もざるはなし。乃ち我が文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵、景樹二翁を得、近體詩家に於て近松、竹田二叟を得たれども、出づるに或は其の時を得ず或は其の道に適せず、才或は其の志に合はず、是を以て其の勢力の及ぶところ局限せられて未だ文學の全體に向つて其の積衰を振ふこと能はざりしを見る。

余は彼の諸家の外に於て、其の才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しながら、稀

世の偉才を抱いて其の用處を誤りたるが爲に、日本文學の泰斗たる名譽を得ることなひ、徒に史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、「萬能達して一心足らず」といふが如き嘲りをも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾て其の人と其の才とを痛惜せざんばあらず。余は今日、世人が猶其の人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むるところなきにしもあらずといへども、退いて之を再考すれば、更に深く惜しむ所なかるべからず。其の人を誰ぞかする。山陽頼氏はなり。(朝比奈知果)

附註

- (一) 一體詩人は文運振興の先を作すもので、我が文學を振つたものも詩人であるが、それに當る人は山陽である。彼は確に日本の文學を振つた人であるが、絶代の文豪と云はれないのは唯その才の用處を誤つたからで實に惜しいことだ。
- (二) 先づ何圖に

- (1) 詩人は文運振興上重い位置に居ることを述べて暗に詩人山陽を賞揚し、



- (2) 有名な四人の詩人を例に挙げ、その勢力は未だ文學全體に及ばなかつたと抑へ、
- (3) 右の詩人よりも遙に勝れてゐるが泰斗たる名譽を得て居らぬ詩人がゐる。誰か、それは山陽だ。と揚げて結んでゐる。

つまり此の文の組立は、山陽の偉いことを云ふのに、先づ必要な土臺からだん／＼築き上げ、最後に黄金を屋上にあげて置くといふやうな組立法である。

**參考**

〔通解〕(前略)そこで我が日本の文學を振り起した大もさも亦詩人に求めなくてはならない。私は古體詩家には眞淵、香樹の二翁が居り、近體詩家には近松、竹田の二翁が居ることを知つたけれど、これ等の人々の中或人は丁度都合よい時世に出合はないとか或人は素養が其の道に不適切であるとか、或人は才が自分の志に一致しないとかで、其の勢力の及ぶ範圍が一部に限られ、長い間衰へてゐた文學全體に向つて振ひ起すことが出来なかつたやうである。

私はこれらの人々以外に、其の才能と學問とがよく釣合を得て、其の上丁度都合のよい時世に出遭つて居りながら、世にも稱なれた才能を持つてゐたにも拘らず、その才能のつかひ處を誤つたが爲に、日本文學の第一人者たるの名譽を得ることなつて、たゞ歴史家だ、政治家だ、文章家だ、詩人だと言はれただけで、其の名の上に、「絶世絶代の文豪」といふ尊稱をつけてもらふことが出来ず、「いろ／＼の藝能には通じてゐるが、肝腎の精神が定まらない爲に偉人さばなれなかつた。」といふやうな悪口までも受けるやうになつた一人の才物を發して、いつもその人とその才能とを惜しまずには居られぬ。その人さば一體誰を指すか。それは頼山陽先生である。

か。それは頼山陽先生である。

**〔通解〕**

●權度——釣合、平均。「權」とは「はかり」「度」とは「ものさし」。權衡も同義。●泰斗——その道の目録と仰がれる大家。泰山北斗の時、名高い支那の泰山や目じるしになる北斗星のやうに尊敬される人。

●絶世絶代——古今に比べる人の無い程秀でゐること。●眞淵——一心足らず——眞の善には上達しなから其の心が定まらぬ爲に立派な人となれぬ。

〔通解〕本文は詩人の位置の重大であることを述べ、その實例を挙げたといふ風に取りやすいのであるが、三段に於ける書きぶりをよく讀んで見ると、さうでないことがわかります。山陽論をなすのに詩人の位置の重大であることを前文に述べたに過ぎないのです。眞解しやすい問題だと思ひます。

一七 左の文を讀みて讀書には如何なる注意を要するかを書け。(大阪池田師二部)

吾々の最初の體驗は固より完全なものではないが、その中に隠れてゐるものを明るなみに引出し、その中に潜んでゐる矛盾と戦を重ね、その中に具はつてゐる内面的傾向を次第に推進める事によつて吾々どの生活は始めて發展し、吾々の思索は始めて眞理に接近する。若し吾々が吾々の生活に關する眞理の標準を、例へば物理學に於けるが如く自己以外に固定した尺度に求めるならば、吾々は何時まで經つてもそんなものを發見することが出来なものであらう。吾々は永遠にたゞ與へられたものを盲



信するか若しくは永遠に懷疑とは雙生兒である。なきものをあると考へるのは輕信である。眞理を求めるのに、最初からそれがないときまつてある方面を捜し廻つて、永久に無い無いと騒ぎ立てるのは懷疑である。幻の上にその思想の根柢を築かうとしてゐる點に於ては兩者共に同様である。生活に於ても思索に於ても、最初にも堅實な歩を進めようとするならば、吾々は自分の體驗を信じて之を學び知らなければならぬ。讀書の價値も亦この信念の上に立つて始めて發揮されるのであります。

(人格主義)

【解答】

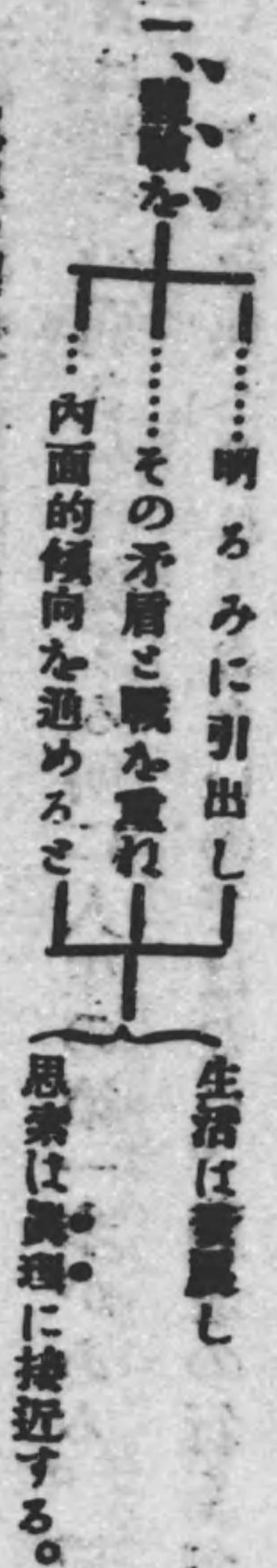
他人の書中にあることをそのまま丸呑みにしては永遠に盲信か懷疑かに陥る。故に自己の體驗を信じて讀書によりそれを明るみに出し、矛盾と戦ひ、内面的傾向を次第に推進める——さう云ふ考で讀書することが大切である。然らばそこに讀書の價値が出て来る。

【本考】

【語釋】 ●懷疑——自己の身に實驗すること、「解脫」といふよりもしつかりした意味がある。 ●明るみに引

出し——體驗した事でも外界の問題に動れて意識内に表はれぬものが多い。讀書によつてそれを思ひ出し考案すること。 ●矛盾と戦を重ね——懷疑の中に全く相反するものがある。それを統一しようとする努力する。 ●内面的傾向——自己内心の奥底を反省考案しようとする傾向で、外面的傾向といへば、心が外界の事物に支配される傾向である。 ●懷疑とは雙生兒である——懷疑がいつも伴ふといふ意。「懷疑」とは信じようとするが一方から疑が起ることである。眞理の標準は自己以外には無いとわかつて居れば懷疑は起らないのであるが、自己以外に求めるといふことになれば盲信法に備するが、さもなくば懷疑せざるを得ない。

【指導】 一つや二つの難語句があつても構はないから、二三回よく讀んで文の筋道を把むのです。それには矢張り三段位に分けて見るがよい。



二、眞理の標準を自己以外に求めると  
永遠に「盲信」か「懷疑の雙生兒」である。

三、生活眞理の堅實な歩は體驗の上に築け。讀書の價値も發揮される。これをもちつと簡單に考へれば

一、生活の眞理は體驗の中に發見されるので、  
二、懷疑以外には發見されぬ。強いて(讀書によつて)發見しようとするれば輕信か、懷疑かである。



三、故に「強者」をもさして「弱者」といふことになりません。従つて自然と「讀書には如何なる注意を要するか」といふ問題が解けて来るので、一段毎に大體の意味をつかまないうで、始めから難語句に囚はれてゐては却て要領を得なくなり、まして現代文はかう云ふ問題の出し方が至極適切で今後この傾向は多くなるのでせう。

一八 次の文を読んで後の問に答へなさい。

弱者は唯その弱さを自覺する所に人生の第一歩がある。さうして弱者と雖も、その行くべき道と與へられてゐないのではない。弱者の行くべき道には幾多の懐しい先輩が我等を待つてゐるのである。弱者は決して強者の口真似をする事によつて強くない。強者の真似をする事によつて弱者は唯膨れるのみである。青膨れ又は赤膨れになるのみである。私は此の事を私自身の爲に、又私自身と同じく弱い人達の爲に云つて置きたい。(阿部次郎)

問 (1) 弱者はどうすればよいのか。

(2) 「青膨れ」、「赤膨れ」とはどんな意味か。

解答

- (1) 弱者は先づ自分の弱いといふことをぼんたうにさと、次に弱者であることを自覺して偉い人になつた先輩の教を學ぶことである。
- (2) 無理な膨れ方をすると青膨れ赤膨れとなる。こゝは、弱者が強者の真似をするから、出来ないことをやらうとする無理がある。無理をして強がつてゐる醜い慎しみのない状態で、極めて不健全な人格を指したものである。

参考

【指導】こゝに云ふ弱者と強者は、勿論、精神上、性格上の事である。情欲に貢げる人、不正義を知りつゝ、不正をする人、社會の因習に囚はれ易い人、……皆弱者であります。強者はどしどし自我の實現をなし得る人、眞善美の生活を思ふ存分になしとける人、……かくの如きは超人でありまして百人に一人もないのでせう。従つてすべての人は先づ自分の弱さを眞實に知りぬかなければ、ぼんたうではありませぬ。その自覺なしには學問も道徳も事業も眞實なものになりませぬ。故に作者は、その自覺を「人生の第一歩」であらうと云つたのです。然し世の中の人はその迄深く考へないから、皆青膨れ赤膨れの人間になつて非常に醜くやつてゐるのでせう。さて自分の弱い事を自覺した先輩は澤山ありますが、親鸞上人は誠にその一人であると思ひます。吾古來の聖賢は皆この自覺の上に自己を建設したものに外ならぬと思ひます。

一九 次の文の大意を述べ、その個所を説明しなさい。

現代文

(東京府女師二部)



〔1〕花が象徴するものが空想的な喜であるとするれば、新緑の情緒は一步現實に踏み込んだ備である。そして花の喜に伴なふ音楽は驚てあると同時に、新緑に伴なふそれは時鳥の聲である。驚の聲は其の物自身に留つてゐるが、時鳥の叫は浮かれた心を現實に引き戻す悲の聲である。驚の聲は花自身の如く宛轉として圓みがあるに反して、時鳥の叫は、新緑の刻々開展するにつれてのやるせない備の象徴である。花のみ麗しいと思ふ心は浮かれた心である。

新緑に深い味ひを認めることの出来るのは、生を味つた後の心でなければ出来難い。それだけ新緑には現實の深みが伴なつてゐる。

〔大意〕花は空想的な喜を表はし、新緑は現實の備を示す。それに花には圓轉たる驚の聲が伴ひ、新緑には時鳥のやるせない備と悲の聲とが伴ふ。この新緑の現實の深みがわかるのは、生を味つた後の心だ。

〔補解〕

- (1) (花を見ると浮かれ心になるので)花が空想じみた喜を表はしてゐると云へる。さうすれば、新緑を見た感じは一步實際問題に觸れて起る備と云つたやうな心持である。
- (2) 驚の聲はのんびりしてゐるといふ唯それだけに留つて、別に吾人の心に深い反省を與へることがなく、時鳥の叫は浮きくした心に反省を與へ、現實を思はせる悲みがある。

〔参考〕

〔補説〕花と新緑を比較し一般に花のみを麗しいと思つてゐるけれど、新緑には深い味があることを述べた文である。

〔語釋〕 ●象徴——或心を形としてあらはしたるもの。 ●情緒——先づ感情気分といふのと同じと見てよい。 ●現實——眼前に存在してゐる事實。 ●宛轉——まろびころぶ有様。 ●生を味つた後の心——生きるための苦惱を無効した後の心。

〔指導〕 ○大意の取方——三段に分けられます。

- 一、花と新緑とに對する心持の相違。
- 二、更に花と新緑とに伴なふ音楽から生ずる心持の相違。
- 三、花を麗しいと思ふ心は浮かれた心で、新緑の深い味がわかるには生の體驗後である。これを續けて述べるべきの解答のやうになるが、なほ一、二を共に全文を二段に分けて見ることもつと簡單になる。即ち「花の情は空想的な喜だが、新緑の情は現實的な悲だ。この新緑の深刻さは生の體驗がなくてはわからぬ。」となる。



○説明と解釋——少くともこの問題では同じ意味に取つてよいと思ひます。解釋と云へば唯別な口語に少し云ひかへることのやうに誤解してある受験者が多いので、特に説明としたのでありませう。従つてその心持で、多少の補足をなすつ、よくわかるやうにかみ砕いて説くのです。

二〇 次の文を読んで文後の問に答へなさい。

門の透間からかいま見ると、金堂の扉は静かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもゐることか、どこやらにさゝやくやうな聲ひびきがして、それもやがて消えてしまふと、あたりはもとの静寂になる。天人の足音でも聞えさうな宵である。このやうな静かな夜をじつと佛殿の間に閉ぢ籠つて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。(藤田泣菫)

問

- (1) この文はどここの如何なる趣を描き出したものか。
- (2) 「燈明のともつてゐる」ことを「屈託さうな」といひ「瞬いてゐる」と描いたことについて各自の感想を記せ。

二一 よか。

- (3) 「堂守の僧のさゝやく」を書いたことが、此の文にどんな効果を齎してゐると思ふか。
- (4) 「天人の足音でも聞えさうな宵である。」の一句を置いたことについて、各自の感想を述べよ。
- (5) 傍線の部に於て、作者の心はどう動いてゐると思はれるか。各自、気づいた所を記せ。

解答

- (1) 盧舍那佛を中心にして、あたりの静寂森嚴の趣を描き出したものである。
- (2) 「屈託さうな燈明」といふので、誰とても相手のみない寂しい心持があらはれてゐる。そして下の「一つ」といふ語を生かしてゐる。「瞬く」といふ語は、人間の目ばたきのことと、燈明の光の明滅する様が、何となく生きた魂のあらはれのやうに感じられて一層の静寂味が増はる。
- (3) 静中更に静を加へたものである。即ちさゝやくすらも聞きとれる程の静かさであるが、その聲ひびきが消えた後は更に一層静寂の感を増す。従つて文はこゝにその趣の中心をつくるこ



とになる。

(4) 静寂の極致を具體的に表現したものである。天人は軽く大空を飛行すると云はれて居る故その足音などは無論聞きとれさうに思はれぬ。その「足音でも聞えさうな音」といふのであるから、魂の底にしみ込むやうな静寂さを感じしめられるのである。同時にこの境内の森厳な気分も、天人を聯想することによつて、一層加はつて來てゐると思ふ。

(5) 作者の心はこゝで人間界を離れ虚舎那佛の心の中に入り込み、佛と共に永遠の相を觀じてゐるやうに思はれる。

参考

〔語釋〕 ●かいま見る——遊園から一寸のぞき見る。●金堂——「コンダウ」と讀む。寺院で、本尊を安置した本堂のこと。●堂守の僧——お堂の番をする僧。●虚舎那佛——「ドルシヤナブツ」大日如來で、大佛體のこと。●觀じて——考へて、じつと冥想して。(觀るといふのは意味が浅くなるからいけない)

〔解説〕 この文は夜、東大寺あたりをそぞろ歩きしたときの詩的情操の豊かな文の一節であつて、作者の感情が極めて微妙に描き出されてゐると思ひます。

二一 次の文中傍線を施した所を、あげられた例歌をつかつてわかり易く説明せよ。(京都師二部)  
私はこゝに二三の簡單な例歌を以て赤人西行芭蕉の態度を説明してみよう。

春の野に莖つみにさこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける(赤人)

かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅に交る撫子の花(西行)

花の枝の露の白玉ぬきかけて折る袖ぬらす女郎花かな(西行)

山路來て何やらゆかし莖草(芭蕉)

赤人は自然の素樸な戀人であつて自然との融合がそのつからできる。(1)これが平安朝の感傷的な詩人ならば眠り得ないであらう。西行の愛は感傷的である。彼は愛の對象であるものを捉へようとするがそれは露のやうにこぼれてしまふその露も彼には涙として感じられる。美は彼の心を慣れしめ誘つて行くが捉へ得るものでなく、いつまでも満足を與へない。芭蕉の心は西行の抱いてゐた如き感傷的な愛の否定を經てきた。(3)この否定は個物に對する執着の否定であつて愛そのものを殺したのではない。いま彼の心には對象のない廣やかな愛が動いてゐる。彼はもはや莖を摘まうとも撫子を折らうともせぬ。彼は莖を透して彼の愛は莖草に一刹那の間依存してゆか



しさの漣波を起す、その漣波が俳句の表現である。

【解答】

(1) 「葦つみに来たのであつたが、この春の野のなつかしさにとうとう快く一夜をこゝにねてしまつた」といふので、自然の前にはわけもなく一切を忘れて恍惚となる。その自然を自分の戀人のやうに思ひ、その愛の胸に抱かれたまゝ美しい夢の世界に入るのであつた。(自然との融合があのづからできるとはそれだ)これが平安朝の詩人となると感じやすく涙もろい傾向があるので、かうまで素懐に打ち任せて眠るといふやうな事は出来ないであらう。

(2) 漣波に交つて撫子が咲いてゐる。折柄の朝露に二層の美観を呈してゐる。——(愛の對象)「あゝ青蘆だ。折り度い」と思ふ。——(捉へようとする)「手をのばし漣波をかきわけて折る。想ち露の玉はこぼれ落ちた。」今迄の美観はもろくも失せた。一切は無常である。幻滅の寂しさがあふ。かう思ふと何だか露は無常を欺く自分の涙のやうにも感じられるのである。美観の幻滅そこにやはり物足りない氣持がある。

(3) 芭蕉が四行の愛を否定したといふのは、一つの物に執着した感じやすく涙もろい愛情はただほんたうのものではないといふ意味の否定であつて、ほんたうの愛そのものを無くしたので

はない。四行は「漣波をかきわけて撫子を折り」、「露に袖をぬらしつゝ女郎花を折らずに居れぬ」執着心があるが、芭蕉は「山路の葦草に何やらの奥ゆかしさ」を見出し、そのまゝしみんと眺めてゐる。もはや一個の葦草に限られて居るのではない。廣い愛が動いてゐる。その漣波を翫んで愛しようなどとは思ひもよらぬ。

【参考】

【語釋】 ●素懐——かさりけもなくわざとさらしさもないこと。 ●融合——さけ合ふ。一つになる。 ●對象——相手になるもの。 ●執着——一つの事物に心がいつまでもこりつく。 ●感傷的——感じやすく涙もろい傾向。

【題意】 この問題の出し方は極めて面白い。讀解力がよくわかると思ひます。今後現代文試験問題はかう云ふ風に進んで行くでせう。語句もよくわからなければならぬが、一部分の理解では役に立たない。前後連絡を取つて徹底的によく讀解することが肝要です。

二三 左の文を讀んで次の問に詳しく答へよ。

(鹿見島女師二部)

「茶は六歳の時「われと来て遊べよ親のない雀」と口誦んだ。無造作な、たゞ言はないであらぬことを言ふのが、彼の死ぬまで俳句を詠ひ續けた心持である。彼にあつて其の俳句は、或時は「悲しき玩具」でもあつたらう。或時は「淋しき盃」で



もあつたらう。又俳句は彼の「偽らざる獨言」でもあつた。時には「楽しい唄」でさへもあつた。兎も角一茶にあつては、一日々々を生きてゆく上に、俳句は缺くべからざるものだつた。此の意味で一茶も亦俳句を以て自分を生かしたと謂へるが、俳句を以て自分を向上せしめようなど、いふ自力的なことゝはまるで違つてゐた。

(萩原井泉水)

問 1 一茶は句作に如何なる態度をとりしか。

2 次の語の意義

- イ、悲しき玩具、ロ、淋しき盃、ハ、偽らざる獨言、ニ、楽しい唄、ホ、俳句を以て自分を生かす。

解答

1 一茶は生きて行く上に詠はずに居れぬから詠ふといふ態度で句作した。従つて生活そのまゝを率直に表現したのである。即ち換言すれば句作を離れては生きて居れぬから、自己を生かすための句作であつた。

2 1、玩具が子供の心を慰め楽しませしめるやうに心の悩みを慰するに足るものは唯十七字の俳句であつた。而も子供が玩具に對するのとは違つて、やはり悲哀を帯びてゐたから「悲しき玩具」と云つたのである。

ロ、一ぱいの酒で苦惱を紛らすやうに俳句によつて苦惱を紛らした。而も酒と違つてどこ迄も淋しみが伴ふから「淋しき盃」と云つたものだ。

ハ、人に見せるための句作でなかつた。心の中をそのまま獨言のやうに俳句に現はさず居れなかつた。

ニ、句作によつて楽しい唄をうたふ氣持にもなつたのである。

ホ、俳句によつて生活に光明と希望とを得たのである。句作すれば心持が明るく元氣づくのである。

参考

【附録】 ●向上——進歩意識、一層よきに肉ふ。●自力的——自分の力によつてよりよくならうとする傾向。【指題】 この文は全部一茶の句作の態度を述べたものであるから、(1)の問はつまり文の要旨、大意を短く述べて置くのと同じことになるやうです。

二五 次の文について

現代文



- (1) 芭蕉の俳諧に對する態度を約言せよ。  
(2) 鑑賞批評をなせ。

今の世は凡ての人が己を正しく偽らずに出して行く事が出来ない時である。眞實の事を云ひ、直勁に振舞へば忽ちに其の身が危い。人間と人間との交渉は外面的であり、形式的である。外面的な因襲を重しとして、内面的な自然を輕んずる。形式的な義理の爲めには本質的な人情を殺さねばならぬ。あゝ、是が人間としての必然な生き方なのであらうか。或は今の世だけが呪はれた時代なのであらうか。それは解らない。——芭蕉はつくづく感じた——本當にそれは解らないけれども、こんな風にして生きる事の眞に幸福でない事は確かである。たとへ財寶を持つてゐるにしても、權勢をもつてゐるにしても、自分を偽つて生きてはつまらぬ事ではないか。若し、今の世にしては人間と人間との交渉に、到底心からの眞實が許されないものとしたならば、自分は事ある人間を離れて天上に親しまう。おゝ、月や雲や花や風や、

其等には少しも虚偽といふことがない。雲は月に媚びないし、風は花の爲めに己を偽らない、それであつて月や花の美しさは換へ難い。自分の奉じてゐる俳諧の境地は實にこゝにある。(旅人芭蕉)

解答

- (1) 芭蕉は虚偽に充ちた人間界を相手にして生きて行くことが出来ないから、虚偽のない大自然界に親しまうといふその心持態度で俳諧に向つてゐる。つまり俳諧によつてより眞實な人生を創造しようといふ態度である。
- (2) 凡ての人が虚偽な生き方をしてゐる。これは社會の罪である。そしてそのため「内面的な自然」「本質的な人情」を殺すといふことは、眞實を愛する人ほど堪へ切れぬ事である。で「あゝ、是が人間としての必然な生き方であらうか」といふ嘆聲となり苦惱となり懐疑となるのである。この時社會を呪ふ人となるか、進んで社會改革の旗を押し立てるか。芭蕉はその何れでもない。彼は苦しい體驗を経て、「人間を離れ」るのである。こゝの所は退嬰的、隱遁的、逃避的である。然し彼は唯退いたのではない。「おゝ月や雲や、それ等には少しも虚偽がない」と發見し何といふ美しきであらうといふ心持で自然の世界に突進せし思ふがまゝに自己を生かす新しい俳諧道



を創出したといふことになつてゐる。彼はその意味で創作的、向上的、奮闘的だと云はねばならぬ。

此の作は充分に芭蕉の眞實に同感し芭蕉を現代に生かした作と云はれるが、同時に作者自身の生活態度でもあり又俳諧に對する作者の信仰でもあると云つてよいと思ふ。

二圖 左の文を読んで

(兵庫女師二部)

イ、全文の趣意を述べなさい。

ロ、傍線の部分を摘出して詳解しなさい。

ハ、感想を述べなさい。

「何のその百萬石も笹の露」<sup>1</sup>。どうたつた俳人一茶<sup>2</sup>の意氣は眞に平民の幸福と矜持とを味つた者でなければ抑むことができぬ。俳人一茶にとつては加賀百萬石の權勢よりも、<sup>3</sup>彼自身の魂の自由が尊かつたのであつた。

私たちは自分の魂の無限に尊いことを本當に自覺しなければならぬ。<sup>4</sup>官位に魂を賣る者<sup>5</sup>があり、<sup>6</sup>賣白に魂を賣る者<sup>7</sup>があり、<sup>8</sup>虚榮に魂を賣る者<sup>9</sup>がある。

家を捨て、富を捨て、官位を捨て、學問を捨て、衣を捨て、<sup>10</sup>素裸の人間となつた時はじめて眞人間の姿があらはれる。(吉田益二郎)

解答

イ、(趣意)

「魂の自由は貴い」といふことを悟れ。それには官位金錢等外物の慾を捨て、眞人間の姿となることだ。そこに眞の幸福も味はれる。

ロ、(摘解)

1 何のその百萬石も笹の露——加賀百萬石の殿様の勢と云つたら大したものであるが、自分の眼から見ると、何のその、あの笹の葉にたまつてゐる露と同じやうにしか見えぬわい。官位と榮辱とそんなものが何にならうか。あの露見たやうにはかなく、もろいものさ。そんなものにとらはれてゐるよりも、俺のやうな素裸の自由な平民の幸福が一番有難いなア。

2 俳人一茶——俳句を以て生命としてゐた一茶。一茶は信濃の人で、姓を小林と云ふ。江戸末期、一時江戸に出てゐた。

3 平民の幸福と矜持とを味つた者——官位財寶を持たないといふことが、どんなに仕合せで



あり又はこらしいものであるかをよく味ひ知つてゐる者。(平民とはこゝでは何も持たない人間の意である。)

- 4 加賀百萬石の權勢——加賀の殿様は百萬石といふ大きな祿高の所有者であつた。その強大な權力勢力。
- 5 魂の自由——本心が何物にも左右されないで純真なまゝであること。
- 6 自分の魂の無限に奪いことを本當に自覺し——官位、金錢は外形的一時的のもので、本當に自分のものでもないし、又本當のねうちもないものである。しかし自分の魂こそは本當に自分のものであつて、而もその自由を得れば眞の幸福を味ふことが出来るものである。さう云ふ大へんな貴いものであることを自分でさとるといふのである。
- 7 官位に魂を賣る者——官位を得るために、自分の魂を無視する者。
- 8 黄白に魂を賣る者——金錢に眼がくらみ、そのためにはどんな悪事をもする者。
- 9 虚榮に魂を賣る者——他人に見えを張ることに腐心して、更に自分の魂のことを考へない。
- 10 素裸の人間——生れたまゝの自然な心を持つた人間。官位財寶一切を捨て去つた時が素裸の人間である。心にそれ等を欲する心持があつてはまだ素裸とは云へない。

ハ、(感想)

富貴榮華は人の欲するもので、殆ど普通人間の目標になつてゐる。これを得れば樂觀し、得なければ悲觀するのが常である。然しこれ等は何と云つても、外面的形式的相對的のものであつて、決して眞の満足、眞の幸福を得られるものでないのだ。折角得たとしても、それは東の間で、不満と憎みと争とがもつて交つて来るものである。そんなものに目がくらむのを佛敎では「迷ひ」と云ふ。人間は本來もつと久遠のもの絶對のものを求めてやまないのが本質なのである。それは「自己の魂の自由」を得るといふことである。故に人間が一度「眞の人間性を生きる」時には、圓滿具足の有難い境地をしみくと感ずるであらう。永遠の光をそこに體驗し認めるであらう。これが眞の幸福でなくて何であらうぞ。

加賀百萬石の權勢は、今日から見てもむなしなものである。然し魂の自由を得て居た俳人一茶の人間性は炳として高く天に聳えてゐるではないか。作者又こゝに同感して魂の自由を説き、眞の人間性の貴さを高調す。その熱烈さ眞實さを引きつけずには置かない。

参考

〔指掌〕「趣意」——は一茶の事を説くのが主であるやうに見えるけれど、作者の精神は、やはり人間性の貴さを



高麗する點にある。そのために一茶を持ち出したものでありますから、趣意を述べる場合には一茶を出す必要はありますまい。大意を問はれた場合は「一茶は魂の自由を得た人だ。私たちは官位財物を捨て、眞人間となり魂の自由を得なくてはならぬ。」と書いたらよからうと思ひます。○「詳解」——はこの場合は唯別な口語に言ひなほした位では何にもならぬ。例へば「魂の自由」——「精神の思ふまゝ」としてしまつてしまふ。もつとさうあるのが魂の自由であるかどうかわかる位に解く必要がある。權勢をあこがれ、權勢に酔らうやうでは自分の本心はそれにくゞりつけられて自由を失つて居るのだから、さう云ふことのない境地が魂の自由である。従つて「本心が何物にも左右されない純眞なまゝであること」とすれば先づよからうと思ふのです。(6)の答をよく味つて下さい。○「感想」——は何を書いてもよいわけですが、やはり本文の精神をかみわけて作者に同感する點を述べるといふ態度がよいと信じます。つまり作品から感得した點を自分の言葉で表現すればよいのであります。

二五 左の文を読んで、

- (一) 全文の趣意を述べなさい。
  - (二) 傍線の部、どうして「唯一つの救の道」になるのですか。その理由を説明なさい。
- 哲人ソクラテスは、「知識の究竟は『自分は何も知らぬ愚者』といふことを意識することである。」と言つた。智者にとつては、自分の無智なことを心から覺るのが唯一つの救の道でなければならぬ。

金を持てる者にとつては、金を捨てることが唯一つの救の道でなければならぬ。官位を持つ者にとつては官位を捨てること、かれ自身を救ふ最後の方法でなければならぬ。(吉田健二郎)

解答

(一) (趣意)

知識も金も官位もすべて一切のものを持たないといふ自覺、境地に達せよ。そこに人生の眞の味も湧く、安心もされるものだ。

(二) (論解)

金は私達の官能の慾を満足させる。だから金を持つて居れば、常に心はそれ等の慾の満足といふことを追うて居る。其の上他から取られはしないか、失つては大變だといふやうに不安は絶えないのである。そこでありたけの金を捨てる。換言すれば金に對する心を断つてしまふのである。すると不安がなくなる。魂の自由が得られる。ほがらかな安樂界が展開して來る。これが「救」といふものである。



少し油断をすると直ぐに雑草が蔓る、徒らに雑草を蔓らせてしまふと土地はつひ荒れ果て、しまふ。そこで時には「どうかして絶対に雑草の生えない様にする事は出来ないものだらうか」と、言ふ様なことまで考へるのだが、しかし絶対に雑草の生えないと言ふ様な土地では私達に必要な植物も亦うまく育ちさうにも思はれない。雑草の發生の盛な時は、即ち土の肥えてゐる時なのである、そしてそれは將によき種を蒔くべき時なのである。そればかりでなく年々生える雑草のお蔭で土の肥やされつゝある功德は又非常なものである。畑に取つては雑草は邪魔であつて、同時にそれは大切な肥料である。

これは私達人の一生に於ても同様なことが言はれる。(相馬御風)

○右ノ文ヲ私達ノ一生ノコトトシテ考ヘテ各項二十字内外ニテ次ノ項ニ答ヘヨ。

(1) (土、土地、畑)トハ何ヲサスカ。

(2) (雑草の發生の盛な時は土の肥えてゐる時)トハ如何ナル意味カ。

解答

(1) 精神活動の源泉。元氣。人間性。吾人の或物を求めようとする力。

(2) 雑念情欲の盛に起る時は「求める力」の強大な時である。向上奮闘の力も充分に備はつてゐる時である。その進んで善を爲すだけの力を持つてゐるのを「土の肥えてゐる時」と云つたのだ。

参考

〔推察〕 雑草といふのは吾人の雑念妄想のことである。自然に氣がつかませう。然し「土地」は何に當るか、一寸云ひにくいのですが、雑念はどうせ心内に起るので「心」と云つてもよいのであります。しかし心は誰にもあるが、雑念は人により年齢によつて違ひがある。唯「心」も云ひかれる。心は常に動いてゐる。否、何物かの力によつて動かされてゐる。その動きが、雑念ともなり、或は理想觀念ともなるのであります。その「或るもの力」はこれを「源泉」とか「元氣」とか「人間性」とか云ふのです。又その「或る物の力」は丁度、土地が何かを生じようとするが如く、何物かを求め得ようとして居るのであります。故に「求める力」と云つたのです。その力こそは實に不可思議な一種の力で説明の出来ないものだと思ひます。

二七 左の文は「修養」の上より見て如何なることを暗示してゐるか、その感想を書け。

(沖繩女師二部)



絶対に雑草の生えないといふやうな場所では、私達に必要な植物も亦うまく育ちさうには思はれない。そればかりでなく、年々生える雑草の御蔭で、土の肥されつ、ある功徳は又非常なものである。畑にとりては、雑草は邪魔物であつて同時に、それは大切な肥料である。一本の雑草すら育たないやうな砂漠には、同時に有用な植物も生えないし、美しい花も咲かない。

(相馬御風)

解答

雑草といふのは吾々の雑念妄想である。煩惱、欲情である。このものゝ爲めに人間は悩まされ勝である。どうかしてこれを亡ぼしたいと苦しむのであるけれども、後から後からとましくかゝつて来てなやまされる。終には、「とても自分のやうなものは役に立つ人間でない」と思つて悲観するのであるが、今この文を読んで見て忽ち一道の光がさして来たやうに人生が明るくなる。希望に充たされて来る。「かうまで断ち切れぬ雑念煩惱があればこそ、一方に自分は大きに爲すあるの力を備へて居る人間なのである。又、この雑念を反省し見詰めて行くことによつて、一層自分の徳性は養はれるものである。」と自覚し、今迄の消極的悲観的な考へ方の間違ひであ

ることに気がつかねばならぬといふことが暗示してある。さうだ、自分はこれから自分の使命に向つて唯一心に猛進すればよいのだ。私はこゝに光と希望と元氣とを得たやうに思ふ。

参考

〔指導〕 この文には、「雑草の生える程の土地の方がよいし、又、雑草はよい植物の發育を助けるやうに利用されしめる」といふことが述べてあるが、自然と右解答のやうな暗示を受けるのであります。然しかやうな感想文はどうしても人によつて多少の違ひは免れません。唯大體を示したに過ぎません。つまりよく文の内容を味讀し、作者の心に觸れて見て、自分の胸に湧き出た思想をそのまゝに答案文として表現すれば結構であります。

二八 次の文を読んで文後の問に答へなさい。

さまざまに考へて見るものゝ、結局のところ、あらゆる問題の根本は、我れみづからの上に落ちて行く。そして、やはり黙つて自らをより善くより善くする爲めの修行をしつゞけた古來の修道者の生活が、尊く、ありがたく拜まれるのである。

いかにしてまことのみにかなひなむ

ちとせのうちのひと日なりとも



いたづらに高いところからお前達はかうしろ。と教へたのでもなく、いたづらに肩を怒らしてきさまたちはけしからん。とどなつたのでもなく、むしろ努めても到り得ない我みづからをかう云つた風に責めたり悲しんだりしてゐた良寛和尚などの見えす現はれなかつた生活が、私達には最もなつかしく最も貴く感じられもし、慕はれもするのである。(相馬御風)

問 (1) 全文の趣旨を述べなさい。

(2) 傍線の部の意味をよくわかるやうに解きなさい。

(3) 歌の意味並に作者を記しなさい。

解答

(1) (趣旨) 何より先づ自分自身をより善くしようといふ修行をしなくてはならぬ。

(2) (傍線)

1. 他人の批評とか他人の道徳上などについて何も云はない。

ア、自分は道徳家、人格者のやうな氣になつて他人を下に見下してゐる様。

ハ、眞實の道徳に一致するやう努力してもなかなか一致し得ない自分自身。

(3) (傍線) 長い年月の間のたつた一日でもよいから、眞實の道に合致した日を送りたいものだが、さて) どういふ方法をとつてその眞の道にかなふやうにしようか。(なか／＼私は眞の道に合致しないで苦しんでゐることだ)

(作者) 作者は良寛である。それは文中「かう云つた風に責めたり悲しんだりしてゐた良寛和尚」と云ふ書き方でわかる。

二九 左の文を解釋せよ。

(札幌師範二部)

老將は兵を談せず良賢は深く癡す言多きものは卑しとせられ語少きものは憚らる言を以て招くは無言を以て招くに如かず語を以て斥くるは無語を以て斥くるに如かず桃李そもそも何を言ひて下自ら蹊をなせるや宗廟そもそも何を語つて人敢て瀆さざるや。(幸田露伴)

解答